

平成28年熊本地震

熊本市女性職員

50の証言

平成28年熊本地震から3年、地震発生から復旧・復興に至るまで、時に迷いながら、女性のネットワークを活かし、様々な立場で、災害業務にあたってきた熊本市役所の女性職員。その体験や苦悩を、初動、避難所対応、被災者支援といった分野ごとに手記としてまとめた証言集！

また、熊本市の復興アドバイザーである浅野幸子さんのメッセージで浮き彫りになった、災害時における女性特有の課題。

本著が今後の災害発生時の参考になれば幸いです。



はじめに



熊本市長 大西 一史

熊本地震の発災から間もなく3年が経過します。

発災直後のことを振り返ると今でもあの震災直後の大混乱した記憶がよみがえります。

私が災害対応の陣頭指揮を執った災害対策指揮室では、次々と現場から入る情報をもとに、極度の緊張状態の中、手探りで必死に対応にあたっていました。そして、市役所の各部署においては、被災した市民の皆さんを守るために、必ずしも市民の皆さんからみれば十分ではなかったかもしれませんが、それぞれの職員が混乱する災害現場において全力で対応しました。

それ以来、今日に至るまで市民の皆さんが一日も早く震災前の暮らしを取り戻すために、職員一丸となって取り組んでいるところです。

震災から3年、徐々に公共施設やインフラなどの復旧が進み、熊本の街に賑わいが戻っている一方、私達が日々の復興業務に追われる中で、あの過酷だった現場の状況とその記憶が徐々に薄れてきているのも事実です。

そこで、熊本地震における災害対応の記憶を出来るだけ忠実に後世に継承していかなければならないと考えていた折、ある女性幹部職員から「実は熊本地震の際に、女性職員同士のネットワークを作って連携をとって災害対応をしていました。」という話を聞きました。

私は、恥ずかしながらそのような独自のネットワークが出来ていることは全く承知しておりませんでしたが、逆に女性職員がどのような状況にあったのか、またどのように震災対応を行ったのか、その体験を多くの皆さんに知っていただくことで、今後の大規模災害の際のヒントになるのではないかと考えました。

幸い、熊本市復興アドバイザーをお願いしている、減災と男女共同参画研修推進センターの浅野幸子先生のご協力を頂き、今回このような手記として熊本市女性職員50の証言をまとめることができました。

この手記が他の自治体や今後の防災減災に何らかの形で貢献できれば幸いです。

証言集に寄せて



減災と男女共同参画 研修推進センター共同代表 浅野 幸子

私は熊本市の復興アドバイザーを務めさせていただいたご縁により、昨年、数名の女性管理職の方に熊本地震についてのヒアリングさせていただいており、そのパワフルな対応力や熱意に圧倒されたのだが、この証言集を拝見し、改めて大きな感動を覚えた。

通常の業務の枠や発想ではとても対応できないような状況の中で、被災者支援の実質性を確保することを最優先して、時には平常時の組織判断を超えた柔軟な対応に踏み込みながら、前の職場の知識・経験や外部人脈を活かした人、マニュアルの限界を目の当たりにして本来の災害時の役割を超えて積極的な調整を行った人、新たな仕組みを提案した人など、あらゆる部門で勇気をもって対応に当たっていった様子が浮かび上がってくるのだ。

とはいえ女性は、災害時にはプライバシー・安全・衛生などの問題などに直面しがちで、行政職員といえども不安や困難はつきまとう。また、家庭では子育てや介護など、家族のケア役割を担う女性も多く、仕事と家族との間で葛藤を抱えた人も多かったようだが、それぞれの事情の中で最善を尽くした様子もうかがえた。

しかしわたしは、被災者の生活面での多様な困難と個別の家庭状況に寄り添った支援が求められる、行政の災害対応の担い手にこそ、このような“くらし目線”での困難や葛藤を実感できる女性職員たちの活躍が不可欠であると思う。

今回の証言集により、女性職員は家族ケアや安全などの条件さえクリアできれば災害時であっても男性と同等に指導力を発揮できること、状況に合わせた“柔軟性”や周囲の支援をうまく受け入れながら対応していく“受援力”を大いに発揮していたことが分かった。そのことは、組織の創発性や柔軟な危機対応力を生む素地として、(男女問わず)多様な生活背景や経験をもった人材が活躍できる状況をつくっておくことの重要も示してるように思う。また、こうした女性職員が平常時・災害時のいずれにおいても活躍できる環境を整えることは、今後ますます増えるであろう育児・介護を担いながら働く男性職員の支援にもつながる。

大きく変化する時代の防災行政のあり方に対しても新たな道を拓く可能性を大いに秘めた本証言集が、多くの方に読んでいただけることを心から願ってやまない。



Index



◆「初動（前震・本震直後）」のこと

- ・前震での初動対応について (政策企画課 森崎 朋子)2
- ・ネットワークによる高齢者の健康支援と悪化防止 (高齢介護福祉課 高本佳代子)2
- ・みんなの力を結集した災害対応 (スポーツ交流部 田上 聖子)4
- ・初期対応だけでは終わらない本当の震災 (環境政策課 組崎 桂子)6
- ・公務員であることの使命 (教育政策課 上村奈津子)7
- ・二区での復興支援を通して (西区役所保健子ども課 迫田貴美子)8

◆「災害対策本部」等のこと

- ・熊本地震回顧録 (政策企画課 村上 和美)12
- ・今大地震が起こったら・・・あなたはどう動きますか？ (総務課 池田 由加利 / 原武 尚子 / 松竹 優子 / 河津 陽美)13
- ・区役所にて (北区役所 野口 恭子)16

◆「避難所」のこと

- ・熊本地震・その先へ (地域活動推進課 岡本 智美)20
- ・環境改善から自立支援～地震からみえたこと～ (男女共同参画課 藤川 潤子)21
- ・熊本地震を振り返って (生活安全課 除野 りえ)22
- ・避難所について (中央区役所まちづくり推進課 谷川 麻美)23
- ・熊本地震を振り返って (中央区役所福祉課 林田 花奈)24
- ・被災から避難所閉所までの道のり (東区役所まちづくり推進課 茶園 聡美)25
- ・熊本地震を振り返って (西区役所保健子ども課 小崎美知子)27
- ・避難所について (植木まちづくり交流室 岡山 文江)28
- ・新採で大震災を体験して (北区役所区民課 續 真菜)29

◆「物資・給水」のこと

- ・熊本地震を振り返って (地域政策課 藤崎 千春)32
- ・支援物資班と連携した栄養士活動 (北区役所保健子ども課 猿渡 秀美)33

◆「罹災証明」「住宅」「震災廃棄物」など支援のこと

- ・被災者支援情報を伝える (復興総務課 伊藤恵美子)36
- ・熊本地震を経験して (生活再建支援課 横田 直子)37
- ・熊本地震を振り返って (健康福祉局 石櫃 仁美)38
- ・災害ごみと被災した家屋の公費解体 (震災廃棄物対策課 赤松 亜弥)39

・住宅の耐震化～熊本城復興	(建築物安全推進室 濱田 清美)	41
・被災宅地危険度判定を通じてあらためて感じた周りへの感謝の想い	(開発景観課 鎌田 早希)	42
・支援の現場から見えたもの～地域での活動を通して～	(熊本市市民病院地域連携室 三嶋 千尋)	43
・災害ボランティアセンターを運営して	(社会福祉協議会 中川奈穂子)	45

◆ 「所属業務」 のこと

・その時、議会は…	(議会事務局 田上美智子)	48
・緊急の時の体制と報道	(広報課 上村 清美)	49
・消費者センターの現場では	(消費者センター 東原 福美)	50
・感染症対策業務とLGBT支援活動を通して見えてきたこと	(感染症対策課 泉 真理子)	51
・熊本地震 ペットをめぐる被災者支援	(動物愛護センター 村上 睦子)	53
・「支援」と「受援」	(健康づくり推進課 木原 薫)	55
・被災した母子への後方支援	(子ども未来部 島村 富子)	56
・熊本地震を振り返り	(子ども・若者総合相談センター 馬原 葉子)	57
・震災時の児童相談所と一時保護所	(児童相談所 中村 恭子)	58
・保育園の現場で起きていたこと	(城東保育園 諸熊理津子)	59
・熊本地震の発生から	(保育幼稚園課 村尾 仁美)	60
・被災した動植物園	(動植物園 上野明日香)	61
・小中学校の教育的支援が必要な子どもたちへ	(特別支援教育室 城門 千代)	66
・使命	(北消防署楠出張所 松村 優子)	67
・上下水道の復旧業務を振り返って	(水運用課 緒續美智子)	68

◆ 「家庭と災害対応」 のこと

・介護と緊急時の対応について	(子ども支援課 村山佐江子)	72
・想定外の熊本地震	(子ども・若者総合相談センター 谷富 麗子)	73
・育休復帰後の地震対応について	(観光政策課 北添 友子)	74
・災害対応と育児	(西区役所まちづくり推進課 中村 幸香)	75

◆ 寄稿

・私たち（指定管理者）が行った、男女共同参画の視点での取組	(熊本市男女共同参画センターはあもにい 藤井宥貴子さん)	78
・外国人支援	(熊本市国際交流振興事業団 勝谷 知美さん)	79



「初動（前震・本震直後）」



のこと

前震での初動対応について

所 属	政策局総合政策部政策企画課	職位	主 査	氏名	森崎 朋子
-----	---------------	----	-----	----	-------

1 あらまし ～ 《前震》 ～

この手記では、4月14日の発災直後の情報収集の状況について、感じたことを記載していこうと思う。

2 発災時の状況 ～ 《執務室内の危険性》 ～

21時26分、その時、私は、翌日の出張の準備のため、職場に残っていた。そろそろ仕事を終え、帰宅しようとしていた時、突然の強い揺れに驚き、思わず机の下に身を隠した。揺れは、思ったよりも長く、今迄に体験したことがない地震だと感じた。

揺れが治まり、様子を伺いながら机の下から出ると、隣の席の脇机の引き出しが飛び出していたり、パソコンが落下しているのがわかった。しかし、課内を見回してみると、このような被害は軽い方で、湯茶置き場近くの床には、倒れたコーヒーマーカーのお湯が広がり、壁際に二段重ねで積んであった書類棚が落下し、嵌っていたガラスが割れ散乱していた。

もし、地震が発生した時に、その辺りにいたら、大けがをしていたに違いなく、狭い執務室内の有効利用といった感覚で積み重ねていた棚の恐ろしさを実感した。

幸い、停電にはならず、課内には、数名の職員が残っていたので、まずは手分けして、課職員の安否確認及び招集の連絡を行った。

時刻も、夜間だったが、9時半くらいと寝るには早い時間だったため、割合連絡は取れやすかったが、参集となると、子どもさんのいる家庭などは、まずは、家族の安全確保が優先され、登庁に時間がかかるといったケースもあった。

3 情報について ～ 《状況把握と公開の難しさ》 ～

そういった初動対応を行っていると、となりのモニター室が情報収集場所（情報調整室）となり、いくつもの電話やパソコンなどが運び込まれた。次々と人が集まってきたが、最初は情報がなく、不安の中、連絡待ちの状態が続き、これからどうすればよいのかと指示を仰ぐ人が多く、自分が何をすべきかと

いうことがわからない状態であった。

しばらくすると、市内の被害状況確認のため、見回りを開始した担当者から次々と各地域の被害情報が入って来るようになった。「道路が波打っている（亀裂が入っている）」、「施設の天井や壁が崩れた」、「橋が落ちたようだ」などといった様々な情報が入ってきた。

電話で入ってくる情報は、共有化するため、ホワイトボードに書き始めたが、すぐに書く場所がなくなり、壁に広用紙を貼り、それに書き続けた。

モニター室は、報道各社が待機する部屋の前にあるため、幾人もの記者が入口に張り付き、壁の情報をメモし、それがテレビなどで流れたが、暗く余震が続く中での情報でもあり、正確さに欠けた情報も多くあった。

夜が明けると、被害状況についても、より正確な情報が入るようになり、現場も落ち着きを取り戻した。思ったよりも被害が大きくなり、まさか、二十数時間後により大きな地震が発生するとも思わず、安心したのを覚えている。

4 終わりに ～ 《初動対応時の注意点》 ～

今回の地震では、災害時の対応に関する知識不足を痛感した。特に、初動期の業務の把握は、職員が必ずしも全員参集できるとは限らないため、自分の担当だけでなく、複数の業務の内容を把握しておくことが望ましいと思う。把握には、マニュアルを徹底すべきだが、その業務の趣旨を理解しておくべきだ。業務は、状況によって異なることもあり、必ずしもマニュアルに記載されたものが最適とは限らない場合があると思う。

また、リーダーの必要性を実感した。人が集まってきても、誰が何をすべきかを割り振ることができなければ、効率的に動く事ができない。その点を踏まえると、今回の地震では、情報調整室に各局の課長級職員が張り付きとなっていたが、現場で指揮を執る必要がある立場の職員を留めておくことが、効果的なことなのか疑問に思った。

ネットワークによる高齢者の健康支援と悪化防止

所 属	健康福祉局福祉部高齢介護福祉課	職位	課 長	氏名	高本 佳代子
-----	-----------------	----	-----	----	--------

1 はじめに

2016年4月1日に、熊本市の地域包括ケアシステム構築の使命を受け、高齢介護福祉課長を拝命した2週間後に大規模地震が2度発生した。

筆者は東日本大震災時の健康支援の経験により、大規模災害による高齢者の健康悪化や介護度の重度化を懸念し、当初から、

「高齢者の健康と命を衛る」、そして、「要介護者の重度化を起させない」。そういった気概をもって取組んだことを記録として残すこととする。

2 前震と本震のとき

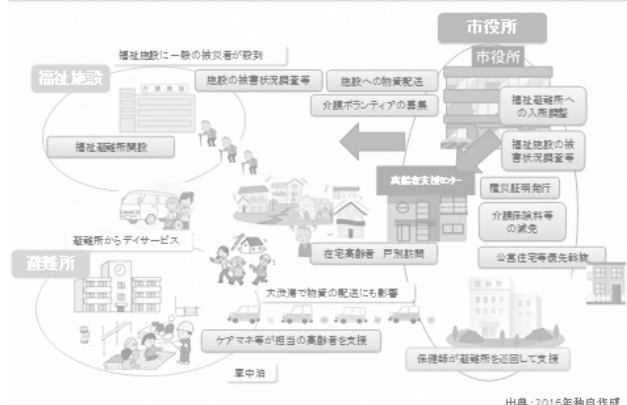
4月14日の前震時には市役所10階の執務室でデスクワー

クをしていた。数名の職員も時間外勤務をしていたが、激しい揺れに驚き、とっさに机の下にもぐり込み悲鳴を上げることしかできなかった。机の引き出しが開く音、本棚が倒れる音が大きく聞こえたが、幸い職員には怪我はなかった。「災害対策本部が立ち上がり避難所が多数開設される」と即座に思い、まずは職員の安否確認を行い、参集を促すと共に、所属業務を開始した。まる2日間、前震で寝ずに対応を行っており、公共交通機関が止まっている中、家族に迎えに来てもらい、自宅に着いたのは16日午前1時24分…本震1分前であった。そのため、前震・本震の自宅の影響を確認できずに、そのまま市役所に引き返した。

2 発災時の高齢者支援

まず、発災当初の業務としては、①在宅高齢者の安否確認と支援、②高齢者福祉施設の入所者の安否確認と施設被害状況確認、③公設高齢者福祉施設の被害状況の把握等であった。特に心強かったのは、熊本市高齢者支援センター（以下、ささえりあ）と介護支援専門員（以下、ケアマネ）の存在であった。ささえりあの受け持ち高齢者の安否確認は100%であった。また、ケアマネ等も高齢者が彼方此方に避難する中、高齢者の自宅の他、いくつもの避難所や地域コミュニティセンターなどを回り、受け持ち高齢者を探しまわって支援を継続してくれた。

熊本地震における発災当初の主な福祉活動状況



異動直後での発災であったため、福祉関係団体と関係が深いとは言えない状況であったが、老人福祉施設協議会（以下、老施協）などの関係団体と連携して、福祉避難所の対応や福祉施設への物資搬送などを行った。特に老施協の会長をはじめ、複数の女性理事長がおり様々に相談にのってくれた。また、当初、備蓄物資を前震で使い切ったのに加え、運ぶ職員や車等が不足する中、物資は一般市民の避難する一般避難所が優先され、福祉避難所などの福祉施設には行き渡らなかった。ところがそこに熊本市議会議員からの支援申し出があり、福祉施設への物資注文受付と搬送の仕組みづくりを行った。福祉施設からFAXで紙おつむや食糧などの不足している要望を聞き、リスト化して議員にメールで送ると熊本青年会議所が物資拠点から福祉施設まで搬送してくださった。それが円滑に実施できたのには、物資拠点の運営をしている文化スポーツ交流部長との連携もあった。さらに、熊本市には27の「ささえりあ」を束ねる熊本市地域包括支援センター連絡協議会があるが、会長は医

師会理事でもあり、全国の老人保健施設団体からの物資の拠点となっており、物資が届かない在宅の高齢者を訪問する全ての「ささえりあ」に物資提供された。指定避難所には行かずに自宅に留まっていた一人暮らし高齢者など、「ささえりあ」の訪問は心強かったと思われる。

他方、健康支援として区役所の保健師が避難所や地域コミュニティセンターなどに避難している高齢者を含む市民を発災直後から支援していた。保健師自ら受け持ち担当校区を巡回して必要な支援を行っていた。保健師自身が妊婦、あるいは小さな子どもがいる保健師も発災当初から活動していた。前震時に他都市保健師の派遣依頼を提案したが、区役所に健康福祉局の保健師を派遣して対応した。当然、本震後には他都市の保健師派遣を要請した。健康支援のノウハウは東日本大震災支援で学んでいた保健師も多かった。健康支援の主管課である健康づくり推進課と常に情報交換しながら高齢者の健康支援を進めた。

3 福祉避難所

一般避難所では避難生活を送ることが困難な高齢者や障がい者等については、福祉避難所を開設し受入ができるよう福祉施設等と協定を締結していた。発災前に176施設1,746人分を確保していたが、施設が被災し受入れができないところや、一般市民が避難してその対応に追われる施設もあった。そのような中、発災直後（3日以内）に福祉避難所として受け入れ可能であった施設は32.3%、受け入れ困難であったが受け入れた施設が20.5%と約半数の施設が受入れを表明してくれた。区役所を通して福祉避難所へのマッチングなどを実施して92か所の福祉施設に537人受け入れていただいた。特に高齢者の身体状況等に合わせた福祉施設とのマッチングには時間を要したが、発災当初から、福岡市介護保険課長からの申し出があり、いち早く事務職員を派遣してくださっており、福祉避難所マッチング事務などに従事してくださったのには大変助かった。

福祉避難所に避難した高齢者については、高齢介護福祉課の保健師等を派遣し、ケアマネや保護課、住宅部門と連携して、相談支援や公営住宅優先斡旋など福祉避難所からの退所支援を実施した。高齢者の福祉避難所を閉鎖したのは2016年11月であった。

4 要援護高齢者等支援緊急対策

高齢者を全数把握したいところであったが、市の高齢者は約18万人である。一般避難所の高齢者支援は区役所が行い、介護サービスを受けている高齢者はケアマネやささえりあが確実に対応してくれていた。しかし、介護認定を受けているが介護サービスを受けていない高齢者など把握できていない高齢者を一切支援から洩らさないために「要援護高齢者等支援緊急対策」を立ち上げた。ただ、高齢者の健康状況を把握でき、家庭訪問に慣れている保健師の確保が大きな課題であった。厚生労働省等に何度も相談をしたが、なかなか保健師を確保することは困難であった。そこで健康づくり推進課と連携して、市民病院の看護師及び、区役所に派遣されている他都市保健師計100名を確保した。そして円滑に進められるよう従事予定者と区役所の保健師、ささえりあを対象に説明会を実施した。具体的には

避難行動要支援者名簿を活用し、ささえりあや民生委員等関係者と連携して、把握できていない高齢者をピックアップするなどして巡回訪問を行い必要な支援に結びつけた。

5 他都市専門家とのネットワーク

筆者は日本公衆衛生学会等に所属しており、発災当初から岡山大学の公衆衛生学教授や横浜市の統括保健師などがメールなどを通して支えてくれた。4月下旬に教授から大きな段ボールが届いた。日持ちのするパンやお菓子、野菜ジュース、そして、アロマオイルが送られてきた。市役所10階の執務室に缶詰めで業務を行っており、ほとんど飲食していなかったのに気づかされた。引切り無しに続く県内外からのマスコミ対応もあり、特にラベンダーのアロマには癒された。また、発災当初に事務職員の他都市要請について模索していたところ、仙台市の健康福祉局長から直接メールや電話があり、罹災証明の発行事務や、大規模災害時の介護保険等福祉事務について、経験を伝える用意があるとのありがたい申し出があり、4月の連休前に多くの仙台市の職員を派遣して下さった。中でも大変ありがたかったのは現在担当している職員ではなく、東日本大震災のときに担当していた経験豊富な局外の職員さんも送り出して下さったことである。熊本地震対応が落ち着いた頃、感謝の気持ちを伝えるためにプライベートで仙台市健康福祉局長を尋ね

た。災害時の健康福祉活動の情報交換をするとともに今後の熊本地震への対応等についてもご教授いただいた。感謝と共に、あってはならないがもしも被災自治体を支援することになれば仙台市の健康福祉局長のようにプッシュ型で支援を行いたいと感じた。

6 おわりに

災害時対応には正しい情報のやり取りが重要である。発災後、LINEと情報活用に関する連携協定が締結された。元々LINEを個人的に使用していたが、仕事に使用できることが認められた形となったことが大きいと感じる。2018年の西日本豪雨災害における西予市の対口支援ではLINEの健康福祉支援グループを立ち上げた。約80名の職員が登録して熊本市からも情報提供や資料送付を行うなど団結力をもって効果的に支援することができたのではないかと感じた。

今後も、これらのことをしっかりと職員や関係者とも共有して、災害に強いまちづくりに活かして参りたい。

みんなの力を結集した災害対応

所 属	経済観光局文化スポーツ交流部 (政策局東京事務所)	職位	部長	氏名	田上 聖子
-----	------------------------------	----	----	----	-------

1 初 動

(4月14日の前震)

マンション13階の自宅にいた私は、壁面収納や食器棚があったという間に倒れる瞬間、自分の身に起こっていることとは捉えられず、3D映画を見ているようだと感じていた。

揺れがおさまり、何しろ早く出勤しないといけないと思い、すぐに市役所に歩いて向かった。

市役所に到着すると、私の部下職員たちは、いち早く駆けつけてくれていて、安否確認や管轄のスポーツ・文化施設の被害状況の確認を行ってくれていた。普段から多くの施設を管理し台風などの風水害時に対応している職員たちは落ち着いて行動しており、危機管理能力が身についていると感じた。

この時点では、大変なことが起きたとは思いつつも、この職員たちと力を合わせれば必ず乗り越えたと確信した。

(4月16日の本震)

前震後、災害対応に追われ、一旦帰ることができたのは16日の夜中だった。久しぶりに帰った我が家で遅い夕食をとり、眠りについて数時間後、前震とは比べものにならない揺れに見舞われ、このまま死ぬのではないかと、あまりの恐怖に暫く布団にくるまったまま起き上がることができなかった。

それでも公務員として市役所に行くことが使命だと勇気を振り絞って起き上がり、電気も水も止まっている中なんとか準備を

して出勤した。市役所職員である夫も一緒に出勤しており、二人とも同時に庁舎の下敷きになって死ぬかもしれないと本気で覚悟し、職場についてすぐ息子に遺書を書きメールを送信した。

出勤してきた職員から熊本城の櫓等の倒壊の報告をうけ、被害状況を地図に落とし込んでいく中で熊本城の被害が甚大であることがわかってきた。前震とは比べものにならない被害の大きさに、茫然としたのを覚えている。また、前震に比べて出勤できない職員も多く、疲れも溜まっている中この人数でこの局面を乗り切れるのかと不安が募ってきた。

以降は、私が文化・スポーツ交流部長として携わったスポーツ施設における災害対応、特に物資搬送拠点の中核を担ったアクアドームでの出来事について記述したいと思う。

壁面収納が倒れた自宅(4/14撮影)



2 被災時のスポーツ施設における対応

被災時のスポーツ施設には、多くのやるべき事や役割がある。
①まずは被災状況の確認②避難所の開設③物資拠点の運営④施設の早期復旧⑤本来のスポーツができる環境の整備。

被災後スポーツ振興課は、安全確認ができたスポーツ施設をボランティア団体等の物資の配送拠点としてお貸しするなど市民からの要望に柔軟かつ迅速に対応もしつつ、フェーズに応じて変わってくる役割に対応したやるべき事を次から次に臨機応変に実行し、課長を中心に怒涛の働きをしてくれた。

3 避難所としてのスポーツ施設 “アクアドーム”

熊本市の西に位置するスポーツ施設 “アクアドーム” は、被災後二つの大きな役割～①避難所②物資配送拠点～を担うこととなった。

広い駐車場を備えているスポーツ施設には、毎日夕方になると車中泊の人も含め数千人が避難してきていた。4月とはいえ寒い日が続く中、大量の毛布が必要だったのだが、現場の職員は大量の毛布がアクアドームの物資配送拠点にあるにもかかわらず、避難されてきた方々全員に行き渡らないのであれば、「公平性」を欠き、そして「混乱」も想定されるために配布しないという判断をしていた。水やオムツの配布も一人当たりの数を決めるなど「公平」に行き渡することを重んじたことで、何度も長い列に人が並ぶことになっていた。アクアドームの避難所に行く度に「公平である前に、目の前で凍えている人を救いましょう」「水やオムツは箱で配布し市民の皆さんに分け合ってもらいましょう」と私は何度もいい続けることになる。

災害対応を行う公務員は「公平」であることより「市民の皆さんを信じて臨機応変に太っ腹な対応することも大事」だということをつくづく感じた。

4 物資配送拠点としてのスポーツ施設 “アクアドーム”

アクアドームのもう一つの大事な役割は、物資の配送拠点であった。熊本市の東に位置するスポーツ施設 “KK ウイング” に物資を集中させ避難所に物資を集中配送するという方針が本部から示される中、アクアドームにおいてはボランティア団体や福祉団体と連携した物資配布を自主的にはじめていた。

物資は届けども配布する車両がない中、消防団の車両や市役所のOBの民生委員さんなど車両をもっている知り合いに声掛けをし、物資が少しでも早く市民の皆さんに届くよう、物資の配布を手伝ってもらった。

中でも一番頼りになったのは、若者を中心に立ち上がったボランティアグループの皆さんだった。聞けばトラックをレンタルし、避難所に行くことのできない高齢者などに草の根的に物資を届けているとのこと。避難所に避難できない市民の皆さんへの物資配布は、行政では到底行き届かなかった部分である。物資の配布も、行政が担うだけではなく、ボランティアグループなど市民の皆さんの力を結集することで本当に困っている皆さんに物資を少しでも早く届けることができたと思う。

物資が搬送されたアクアドーム（4/19撮影）



5 助けてくれた市役所アマゾネス軍団？！

普段からお付き合いのある市役所女性管理職のネットワークが、これほど大事で頼りになるものだった（非常時にどっしりと構えていて落ち着いているのは女性が多い!?）のだと被災を通じて改めて感じる事ができた。相談すると解決のために皆が動き私を助けてくれた。ほんの一部ですが書き残したいと思う。

物資倉庫の中で溜まっていく一方だった物資の配布については色々なセクションの女性管理職にお世話になった。オムツや生理用品は、男女共同参画課長が男女共同参画センターハーモニーと連携して配布してくれた。同じくペット用品は、動物愛護センター所長が配布を引き受けてくれた。トイレットペーパーなどの様々な物資は、健康福祉局の総括審議員や高齢介護福祉課長が車で取りに来てくれるよう福祉施設に頼んでくれて、施設で被災している市民の皆さんに行き渡った。

人員配置についても、ボランティアセンター長は、朝と晩に圧倒的に足りなかったボランティアの手配を引き受けてくれたし、総務課長は、職員の配置人数が足りないことを相談すると、できるだけ多くの職員が配置できるよう心を砕いてくれた。プライベートでお世話になった方もいる。OGの元上司は、「大変だけど頑張って」と女性管理職にわざわざ手作りのお弁当を届けてくれた。

一緒に働いていた同僚は、自宅の水電気が復旧せずお風呂に入れなかった私を自宅のお風呂に招いてくれて、食料の確保が難しい時期だったのにもかかわらず野菜がたっぷり入った暖かいスープなどの晩ご飯をご馳走してくれた。



いただいたお弁当と夕食

皆さん本当にありがとうございました！

6 さいごに

不眠不休の対応に限界を感じていた頃、他の政令指定都市の防災服を着た職員と熊本市役所ではじめてすれ違ったときは、ありがたさに胸が熱くなった。

今でも全国各地から多くの職員を熊本市役所に派遣していた

だいている。全国の仲間の力をお借りしながら、熊本がたくましく立ち上がることに、そしてこの経験を生かして全国の仲間へ恩返ししていくことが、今熊本に求められていることだと思う。

今、私は東京事務所に勤務しており、災害が起こったとき政令指定都市市長会がどんな動きをしているのかを間近でみてい

る。一番市民に近い地方自治体として、そして県と同じ権限をもっている政令指定都市として、また地震被災経験のある都市として神戸市・仙台市とも力を合わせて、どんなことがあっても立ち向かっていく力が私たちにはあると信じている。

初期対応だけでは終わらない本当の震災

所 属	環境政策課 (震災宅地対策課)	職位	主幹兼主査	氏名	組崎 桂子
-----	--------------------	----	-------	----	-------

その日はすでに帰宅し、自宅でくつろいでいた。ミシッという音と同時に、花瓶の割れる音が響き渡った。尋常じゃない。震度何？テレビや携帯を見るが、速報が出ない。

当時の私は、局の連絡調整担当をしていたため、地震に限らず、大雨警報が発生した場合など、局内の当番の者に電話連絡することになっていた。震度5以上で局から2名だと頭に入っていたものの。そういう場合なの？いったいどうなってるの？

誰に連絡すればいいのか？何をすればいいのか？状況が飲み込めず、パニックになりかけたとき、残業中の職員からラインがきた。

「無事ですか？職場にいます。すぐに動けます。」

その言葉でわれに返った。とにかく市役所に行かなくては。市役所に向かう途中、激しい余震のたびに悲鳴が飛び交った。私もどきどきしながら市役所に急いだ。

職場に着くと、すでに職員がそれぞれに慌しく動いていた。私も安否確認や課内や局内の関係者と連絡を取り合いながら、状況の把握に必死だった。そんな中、財政課や総務課などから物資運搬や避難所への派遣要請が局に向けて次々と入ってきた。

局内が1フロアに集まっていたため、局内の状況把握や動員職員の確保は容易だった。みんなが何かやらなくてはという雰囲気包まれており、明け方まで続いた毛布などの物資運搬等の力のいる作業についても、男女問わず皆積極的だった。一晩中対応に追われ、一段落ついたのは翌日の午後9時を過ぎた頃だった。

災害訓練の効果もあり、うまくいったと思っていた。私はその日、そのまま職場に泊まることになったため、夜中まで資料作成や情報の整理を行っていた。机にうつぶせになり、少し眠ろうと思ったときだった。本震だった。

とっさに机の下にもぐった。揺れがおさまり顔をあげると、執務室のキャビネットや机が散乱し、前震の後とは違う、もっと悲惨な光景が目の前に広がっていた。

呆然としていると、停電になり、さらには、誤報であったのだが、地下2階で火災発生のアナウンスが響き渡った。

背筋が凍った。動けなかった。地下からしか外に出られないのに、地下が火災なんてどうすればいいのか。

ひとりだったらどうなっていたことか。幸運なことに、その日は上司も一緒に職場待機だった。「とにかく外に出よう。」と声をかけられた。避難の前に防火扉を閉めるなど、上司の冷静な行動がなんとか地震の恐怖を遠ざけてくれた。

外に出ると、暗闇の中、市役所が揺れているのがうっすらと見えた。笑われると思うが、そのとき私は本気で「この世が終わる」と思っていた。恐怖を超えて、全てが終わってしまうんだと、ただそう思っていた。

しかし、火災は誤報とわかり、執務室に戻るよう指示が入った。戻りたくなかった。地震直後の恐怖が湧き上がってきた。戻りたくない。戻ったらつぶされて死んでしまう。

でも、戻らないという選択肢はなかった。本当の震災対応はこれからだった。訓練のように、一日で終わることはなかったのだ。

それから一年後、私は異動し、新しい職場で地震からの復興に携わっている。地震のことはいつまでもたってもいい思い出にはならないが、この経験で災害は、どこでも、誰の身にでも起こり得るのだということをあらためて実感している。職場のみんなも、全国の災害に敏感で、何かあればすぐに関心する用意と心構えができている。

またいつ被災するかわからないが、この世が終わるわけではない。何があっても地道にやれることからやっていきたいと思う。

公務員であることの使命

所 属	教育委員会事務局教育総務部教育政策課	職位	主幹	氏名	上村 奈津子
-----	--------------------	----	----	----	--------

1 はじめに

はじめに、この証言では、私自身が家族と同居する単身者であり、震災業務と育児や介護との葛藤、といった内容は書くことはできないため、女性としての視点というよりは、熊本市の一職員として、震災の経験を通して感じたことについて記したいと思う。

2 前震

平成28年4月14日（木）21時26分に前震が発生した際は、南区の城南中学校で仲間と共に趣味であるテニスを楽しんでいた。ドーンという地響きと、生まれて初めて体験する揺れに襲われ、最初は何が起ったか理解できなかった。

30分程運転し西区の自宅へ戻る途中で、熊本城前の稲荷神社の玉垣が倒壊しているのを見て、熊本でもこんなに大きな地震が発生することがあるのか、と驚くばかりであった。上司に連絡後、23時過ぎに職場へ到着し、夜を徹して文部科学省や熊本県教育庁との連絡や報道資料の作成等を行い、翌日の朝を迎えた。

15日（金）は全市立学校が臨時休校となったが、この時点では、学校の避難所の住民も週末になれば帰宅され、翌週18日（月）からは学校も再開し日常生活に戻るに違いない、と楽観的に考えていた。まさかこれが前震に過ぎず、この後に本震が発生するなど思いもなかった。

3 本震

20時間近く連続して勤務した後、4月15日（金）は19時頃に退勤した。前日は一睡もしていなかったため、疲労困憊のまま眠りに就いた。

16日（土）1時25分、突然の強い揺れにより目が覚めた。床が縦横に揺れ、ミシミシと不気味な音をたてる築40年超の木造の自宅。携帯電話からは緊急地震速報の警告音が鳴り続け、絶え間なく続く激しい揺れの中、布団を被って身を屈めながら強い恐怖を感じ、このまま死んでしまうのかな、と死を意識した。

職場に無事を連絡し、自宅に家族を残して暗い夜道を徒歩で職場へ向かう途中、京陵中学校へと次々に避難する住民や、ブロック塀や壁の崩壊した家屋を目にした。熊本県伝統工芸館の前では、熊本城の石垣や櫓が無残に崩れ落ちた姿を見て、歩きながら涙がとめどなく溢れ出た。

参集後は、市長事務局との調整、避難所に関する住民からの苦情、報道機関からの問合せ、国や県からの人的・物的な被害状況の確認など電話は鳴り止むことがなく、職員全員で対応にあたった。

4 救援物資配送業務

4月17日（日）は7時過ぎから同僚と共に公用車のバンで、市境近くの東区KKウイングと西区の物資拠点であった西部クリーンセンターの間、片道約20キロを何往復もし、救援物資を配送する業務を行った。

本震後に初めて見る市内の様子は想像以上に被害が大きく、辛い思いをされている被災者の姿と、雲一つない澄み切った青空との対比に、胸が締め付けられるようだった。

KKウイングは、全国の自治体や団体等から届いた膨大な量の救援物資に溢れていた。自衛隊員が手際よく荷下ろし作業をしていたが、それでも敷地内には荷下ろしの順番を待つ大型トラックが何台も列をなしていた。

ここでの市職員の役割は、できるだけ多くの量の物資を公用車に積み込み、各々の担当地区へ配送することであったが、この方法では、物資はあるのに必要とされている場所へすぐに行き渡らないことは明白であり、バンで配送しながらも無力感に苛まれた。

5 避難所勤務

地震発生の日からは、教育委員会事務局が担当する南区のアスバル富合や城南総合スポーツセンターなどで避難所運営業務が始まった。

幸い家族や自宅に大きな被害はなく、家庭での育児や介護もなく、他の女性職員よりは夜勤に従事しやすい環境にあったため、積極的に引き受けるべきと考え、夜勤シフトに多く入った。

城南総合スポーツセンターは、本市職員が避難所勤務を開始する前は、相模原市派遣の応援職員により運営されていた。避難所勤務の経験がない私たち職員に、効率的な物資の管理方法や感染症対策のための衛生管理など避難所運営のノウハウを引き継いでくださり、感謝の気持ちしかない。

6 心身の変化

大きな余震も続く中、この状況がいつまで続くのかわからない不安。本震から1週間程度は、地震でないときでも、床が揺れているような地震酔いの状態になった。ライフラインが断たれ、電気はすぐに復旧したものの水道やガスの供給は停止し、入浴が思うようにできなかったこともストレスだった。

また、職場での日勤から、そのまま避難所へ移動して夕方から夜勤に入る日は、24時間の連続勤務となり特に厳しかった。職員が交代で2～3時間程度の仮眠をとるが、熟睡できたことはなかった。

しかし、市民も職員も辛い思いをしている中、公務員なのだから市民のために働くのは当然で、弱音を吐けずに気が張っていたと思う。これらのストレスや、昼夜を問わない不規則で長時間に亘る勤務により、精神的にも体力的にも無理が蓄積して

いった部分があったように思う。半年後に突然襲われた肩甲骨間の痛みや腰痛も、無関係ではなかったのかもしれない。

震災以降、初めて出勤せずに丸一日休養することができたのは、前震からちょうど1か月後の5月14日（土）のこと。やっと休息できたと心から感じることもできた日だった。

7 結びに

この熊本地震の経験を通じて、自分が公務員であることを深く認識した。採用時のサービスの宣誓で、全体の奉仕者として誠実かつ公正に職務を執行することを固く誓ったのだが、このよう

な災害時には、自分の事情がどうであれ参集して市民のために職務にあたる使命を強く感じた。

現在も私は教育政策課に所属し、指定避難所である井芹中学校の避難所担当職員をしている。防災ラジオ、雨合羽や最低限の洗面道具等を入れたリュックサックを自宅に常備し、発災後3日間の避難所での初動に備えている。今後、大規模災害が発生した場合には、このリュックサックを背負っていち早く井芹中学校に参集し、避難所での対応に尽力したいと考えている。

二区での復興支援を通して

所 属	西区役所保健福祉部保健子ども課 (北区役所保健福祉部保健子ども課)	職位	技術主幹 (主任保健師)	氏名	迫田 貴美子
-----	--------------------------------------	----	-----------------	----	--------

1 前震と本震～背中を押してくれた3人～

熊本地震を機に職場異動をした私は二区の復興支援にかかわることができた。それぞれの場面を通して「3」をキーワードに振り返ってみた。

前震～本震では、3人の人に背中を押してもらった。前震直後は長男、本震後は父と友人だった。

前震の日、小学1年生になったばかりの長女のお見知り遠足を翌日に控え、早めに家事を済ませたところで地震が起きた。中学2年生の長男は気丈で「お母さん、落ち着いて。」という声を機に、どう行動すべきかを考えることができた。上司に無事であることと子ども達の預け先が確保できず、すぐに出勤できないことを伝えたが、上司も女性であり理解を示してくれた。ただその後も預け先の状況が整わず、もどかしい思いをしたのを覚えている。翌日の出勤後は担当校区の避難所を中心に巡回したが、避難者の方々も比較的元気だったため、少し安心して夜遅くに子ども達のいる実家へ帰った。

本震はその実家で被災したが、前震で怪我をした父も含め皆、無事だった。「次こそ、出勤しなければ。」という思いを持ちながらも不安がる長女の姿を目の前にし、このまま両親に子ども達を託してよいか迷った。その時、元警察官の父が「こんな時こそ、出勤しなさい。子ども達のことは大丈夫だから。」と言ってくれたことで決心できた。その後、子ども達を自身で守れない不甲斐なさが込み上げてきたが、友人から「市役所職員として、多くの人の役に立っているのだから、頑張ろう。」と言われ、職務に専念できた。

2 西区役所での災害対応

～これまでの経験が生きた3つの事～

当時の勤務先であった西区では、これまでの経験が生きた3つの出来事があった。1つは子育ての経験、2つ目は看護師・保健師としての経験、3つ目は前震・本震直後に回った避難所での経験だった。

本震後、西区には津波警報が出たため、比較的高い建物であつ

た区役所に大勢の人が詰め掛け、パニックとなっていた。

執務室に溢れる人、自身のデスク周りでも床に人が座り込んでいたが、夜が明けた時点で執務室以外の場所に移動してもらった。そのような中、避難者の中には小さい子ども達もいたため、少しでも不安が紛れるよう絵本やおもちゃを自由に使えるスペースを確保するため避難者の方々へも理解を求めた。幸い子ども達のためならと場所を譲ってくださり、大変な状況の中でも人の優しさにほっとした出来事だった。

本震後1～2日は続々と来熊する医療チームの先導役で避難所を回り、医師がトリアージするのを補助した時、たった2年間であったが看護師をしていてよかったと感じた。その間、熊本市に先立ち医療対策本部運営支援チームの派遣要請を西区独自で行い、その指揮をとったのも上司だった。災害医療を専門とする藤田保健衛生大学のチームが来熊してからの3日間、その一員としてチームの災害時の医療対策本部の役割と様々な職種が建設的に意見交換することを体験した。その経験を多くの同僚に積んでもらうべく、班内で調整を行ったことは保健師としての経験が生きたと思う。

余震が続く中、避難所集約に向けて個別の聞き取りを行う際も総務企画課と連携し、聞き取り票の見直しや聞き取りマニュアルの作成に取り組んだ。その際、避難所巡回を何度も行い被災者の実態を把握していたことで声かけをどのように行うとよいかがわかっていたことが役に立った。

3 北区役所での災害対応

～専門職としての3つ支援～

その後、5月6日付で北区に異動となり、被災者支援と通常業務を平行して行うことからスタートしたが、その利点と難しさを感じた。

被災者支援として、直接的には避難所当番として出向き、間接的には他都市の保健師チームが避難所巡回や電話での支援の調整役を担った。

また5月10日から幼児健診が再開され、子どもの心のアンケートを実施するという被災者支援の側面も持ちつつ、通常業

務に従事する場面も増えていった。

被災者の方の状況を避難所で直接把握ができたことが、他都市の保健師チームへの助言に役立った。直接的・間接的支援を連動させて行えたことで被災者の負担を軽減できたのではないかと考えている。

ただ被災者支援と通常業務を平行して行う事の大変さや気持ちを切り替えることの難しさも知った。避難所での支援は、元の生活をいかに早く取り戻すかが課題あり、時には被災者の方の思い通りにならず辛い思いをさせてしまったこともあった。また避難所から一歩出ると、地震の影響を受けずに生活している人もおり、こちらも気持ちを切り替えながら支援を行った。

更に専門職として強く感じた事は、災害は社会的弱者がより大きく影響を受けるということだった。被災当初の車中泊等もさることながら、元の生活に戻るのに時間を要すのを肌で感じた。避難所で変調をきたした体調を整え難いこと、そのような不調の中、生活再建について検討しなければならないことは大変な労力を要し、手厚い支援が必要であると感じた。

4 終わりに ～尊敬する上司へ～

この手記に登場する女性の上司からも多くのことを学んだ。自身にも家庭がある中、真っ先に出勤し何日も泊り込み、疲労が蓄積しても感情的にならず、判断力が低下することもなく指揮を執り続けた姿に士気が高まったこと。柔らかさとしなやかさを活かし、区内調整を行ったことで、藤田保健衛生大学を始めとした外部との連携や他課との協力体制の構築を図ることができ、災害対応がうまくいったこと。何よりも私たち課員の力を信じ、自分たちでも判断できる組織に育ててもらったこと。

上司からの多くの学びとたくさんの人への感謝は尽きないが、学んだ事を今後の復興支援、市政に活かせるようにしたい。





「災害対策本部」等



のこと

熊本地震回顧録

所 属	政策局総合政策部政策企画課 (改革プロジェクト推進課)	職位	課長	氏名	村上 和美
-----	--------------------------------	----	----	----	-------

1 初動

4月14日午後9時26分、先輩方と会食後の帰宅途中、前震が発災した。経験したことのない揺れに、思わず皆で国道三号線沿いの歩道にしゃがみこんだ。地震が収まるのを待って、商店街の被害状況等を横目に見ながら慌てて市役所に戻り、災害対策本部情報調整室に駆け付けた。職員が続々と参集し、1時間もたつと、ほとんどの要員が持ち場についた。

当時、私は政策局の主管課である政策企画課長。政策局対策部は、国や関係機関、さらには庁内の総合調整を担うこととなっており、部下職員の安否確認を行いながら、残業で残っていた職員や参集してくれた職員の協力を得て、庁内外の情報収集を行った。

情報調整室には、次々に被害情報に加え避難者情報が入ってきた。寄せられた情報は全てホワイトボードに記されていたが、未確認情報も多く情報は錯綜していた。そのような中、夜が更けるにつれ、4月とはいえ冷え込みが増し、屋外避難場所に避難している人達への毛布の要請が多く寄せられてきた。

備蓄倉庫にある毛布は既に出尽くしていた。追加手配ができないか、日赤や自衛隊に連絡していると、「県から市に毛布が輸送されてくる」との一報が入った。

そこで、届いた毛布の配送手配の指示を情報調整室の指揮者に求めたが、「物資輸送を担当する対策部の職員が参集していないので配れない」との答えが返ってきた。想定外の震災発生に情報調整室は混乱し、指揮者も防災計画とは違う手配の判断が出来ずにいた。

しかし、今まさに寒さに震える避難者が多数いること、そして参集したものの当面の役割がない職員が大勢待機していることを考えた時、非常時には計画外の行動をすることも必要であると私は考えた。

指揮者に輸送の別手配の提案と、その手配を私が行うことを進言したところ、了解してくれた。すぐに、財政局対策部に使用可能な公用車を全て庁舎前に待機させるよう依頼するとともに、毛布が届いたら、広域避難場所に配るよう、政策企画課と財政局の職員に指示をだした。職員達は迅速に手筈を整えてくれた。

しかしながら、一時間以上待っても、県からの毛布は届かなかった。確認すると、毛布が届けられるという情報は、どこから連絡があったかわからない未確認のものであったのだ。待機していた職員の代表者が業を煮やして「どうなっているんですか、早く命令を出してください。」と情報調整室に集まってきた。私は、次の手を打つことの判断を仰ごうとしたが、情報調整室は混乱を極め、指揮者も様々な対応に忙殺されて、後回しとされた。

「この状況では指揮命令系統を逸脱してもやむを得ない」と私は判断し、自ら指示を出すことを決断した。決断したら早かった。

まず、毛布が確実にストックされている場所として消防学校

を突き止め、こちらから取りに行けば毛布を提供してもらう約束を取り付けた。そして、待機していた職員に、毛布を取りに行き、避難者の多い広域避難場所に配布するよう命令した。まだ夜も明けぬ午前4時過ぎ、命令を受けた職員達は、使命感にあふれる顔で飛び出していった。

二時間後、寒い中での作業で頬を紅潮させた職員達が戻ってきて、無事に毛布の配布が終わったことを報告してくれた。そして、その現場で得た情報をもとに次の支援を進言するとともに、大量の毛布の搬送に疲れているにもかかわらず、次の仕事の指示を私に求めてきた。頼もしかった。「よし、頑張ろう。この職員達とともに頑張れば、必ずこの災害を乗り越えられる」と、その時私は思った。

2 災害対策本部と政策企画課

前震から一日半、復旧対応の目途が立ったと思った16日未明、更なる被害をもたらす未曾有の本震が熊本を襲った。市民、職員の多くが、驚きと恐怖に苛まれ、絶望感を味わったのではないだろうか。庁内においても、混乱がピークに達していた。

程なく、危機管理防災総室に代わって、政策企画課が災害対策本部の事務局を担うこととなった。普段から庁内調整を行っていた当課がその役割を担うことによって、危機管理防災総室の負担を軽減するとともに、災害対策本部での市長の指揮命令の伝達や各局対策部の連携が円滑に行えることを狙ったものだった。

災害対策本部の出席者は、自衛隊や関係省庁からのリエゾン、さらには指定都市を中心とした応援職員など、回を重ねる毎に増えていった。また、11回目の推進本部からはマスコミにも公開したことによって、本部会場は立錐の余地もなく、席と資料づくりに追われた。緊迫した状況が続き、資料の作成や開催時間の連絡調整など通常期ではありえない手違いもあったが、政策企画課の職員達が見事なチームワークで乗り切ってくれた。

このほかにも、発災当初は、様々な業務の初期対応を政策企画が担っていた。避難所に避難している方々の意向調査の取りまとめや、避難所で提供する食や備品の充実、また指定都市市長会からの応援職員の調整や、国や他都市、民間企業からの支援物資の受け入れ、避難所生活から自宅等へ戻っていただくための相談体制の構築など。書ききれないほどの仕事が次々と湧いてくるといった状態で、その対応に追われていたが、課員一人ひとりが高い使命感のもと黙々と遂行してくれた。本当に頼りになる仲間だった。

3 ふりかえり

二度と起きてほしくはない災害。しかし、そこで得た経験や知識は貴重なものである。

あの時の情報調整室での私の行動は、数時間後、命令系統を

逸脱した行為だと上司から止められた。確かに続けて行うべきものではない。しかし、あの瞬間の判断は間違っていなかったと、今でも思っている。

対策本部の運営も、7月に民間企業から提供されたタブレットを活用しだと、膨大な資料作成作業から、資料の差し替えやコピー等の作業を軽減することができた。まさに、ICTによる効率化を実感した瞬間であった。現在の熊本市では、ほとんどの会議でタブレットを使用することが当たり前となっているのも、このことが契機である。

また、全国からの支援は本当にありがたく、人の心の温かさを痛感した。中でも、被災経験のある都市の職員からは、疲労が蓄積している職員への配慮も含め、常に一步先の的確なアドバイスをもらい、大変助けられた。

本市も、他自治体での有事の際には、被災経験を活かした支援を先頭に立って行っていかなければならないと、肝に銘じることとなった。

4 ふりかえり~その2

私が災害対応に追われている間、家族には大きな負担をかけてしまった。ケアが必要な母は、前震発災当時、一人で家にい

たため、恐怖で家を飛びだしてしまい、一時所在不明になってしまった。幸い、近所の方が保護してくださっていたが、当日、母を預かる予定だった姉は、迎えに行くのが遅くなっていた中で発災と、母の行方知れずで慌ててしまい、転んで手首を骨折してしまった。

それでも、余震が続いていたため、母の世話を姉家族が引き受けてくれていたが、本震が発災し、姉のマンションも被災してしまった。たまたま、母の様子を見に姉の家に行っていた私は、避難所に姉家族と母を送り届けたのち、皆の「一緒にいてほしい」という声を振り切って歩いて登庁した。

本震で母が住む実家も半壊。ケガをした姉や仕事で帰れない私が困り果てていると、ケアマネージャーさんが、母を入所させる施設を手配してくれた。ありがたかった。嫌がる母をなだめて入所させたが、地震前から施設に入所していた父も含め、しばらくは様子を見に行く時間もなくて、寂しい思いをさせてしまった。結局、母は約一年間施設での暮らしとなったが、あの時、母をケアしながら仕事をする事は不可能だったろう。

二か月以上休みなく働き続け、自分の家を片付けることができたのも、本震発災から数か月たった後だった。

熊本の人みんながそうであったように、精神的にも肉体的にも余裕のない日々だった。

今大地震が起これたら・・・あなたはどう動きますか？

所 属	総務局行政管理部総務課 (政策局総合政策部国際課)	職位	課 長	氏名	池田由加利
	総務局行政管理部総務課 (中央区役所保健福祉部保健子ども課)	職位	主 査	氏名	原武 尚子
	総務局行政管理部総務課 (財政局税務部市民税課)	職位	主任主事	氏名	松竹 優子
	総務局行政管理部総務課	職位	主 事	氏名	河津 陽美

1 大地震は突然に 《どう動けば・・・》

2016年4月、管理職になったばかりの私は、新たなことの連続で緊張と不安、そして慌ただしい毎日を過ごしていた。

その瞬間は、食事会の帰り道、タクシーに乗ろうと国道3号線に出たときだった。目眩かと思ったのも束の間、立っているのも困難で一緒にいた2人と円陣を組むようにその場に座り込んだ。他人事としてテレビで見ていた大地震を今自分が経験しているのかと、信じられない気持ちと漠然とした不安を覚えていた。

今ならば、この瞬間から業務継続計画に則った活動を始めるのであろうが、当時は微塵も思い至ることなく市役所に向かって歩き始めた。

途中、職場に何度電話してもつながらず、メールさえ送れない。当時、電話に頼っていた連絡網は、大災害時には全くと言っていいほど機能しなかった。

総務課は、総務局対策部に属し、「職員の安否確認と参集状況」を集約し本部に報告する業務を担当する。市役所に着くと、残業していた職員が情報収集や各局への連絡を行っていた。市

の施設や避難所には、多くの市民が避難してきたことで混乱し、職員は目の対応に追われ、確認や報告に手が回らない状況であることが数字に表れていた。一方、総務課の職員は、1月に行われた大規模災害訓練での経験を基に段取りよく作業を進めており、繰返し行う訓練の重要性を改めて感じた。

到着するや否や情報調整室に向かったが、集まった職員はどう動けばよいのか、指揮系統が不明で初動体制はほとんど機能していなかった。また、発災からこの間、業務継続計画という言葉聞くことも、当然開けて見ることもなかった。

2 派遣職員の配置 《毎日毎日・・・あれもこれも・・・》

総務課は、各対策部から要請があった場合に職員を派遣する業務も担う。5区役所からは避難所運営のため、多くの人員が要請された。そこで、昼夜2交代制での配置を整えるため、必要人員を各局に依頼し、派遣人員を集約する調整業務を行ったが、毎日翌日分を調整し本部に報告する作業を半月ほど繰り返した。

2日後に本震が発生し、避難所はますます大きな役割を果た

すことになったが、多くの職員が“日替わり”で当たっていたことから、毎日入れ替わり立ち替わり不慣れな職員が対応することで困難を極めた。学校や自治会等の関係者から信頼関係が築けないことで不満が上がり、職員の中にも「自分たちはあてにされていない」などと感じる者も少なくなかった。

避難所には、当初、正確な情報や本部での決定事項等が届かず、避難者からの質問や要望等にも対応できず困っていたことを、現場で活動した職員に聞いたのは随分経ってからだった。今でこそ緊急時も平時もラインで課内等の共有を図っているが、当時は情報共有できる環境も体制も整っていなかった。職員と顔を合わせることもなく指示を出していたので、現場の声を拾っていなかったことは大きな反省となった。

そのような中、指定都市職員には1箇月間支えてもらった。効率的な運営、避難者との信頼関係の構築等その仕事ぶりに職員は感化された。また、“日替わり”で行っていた配置体制についても、現場の意見や要望を踏まえ、拠点避難所等への集約に合わせ、全ての避難所で職員を“固定化”するとともに相談員を配置するなど、避難者に寄り添う安定的な運営になり、学校や地域からも職員を評価する声や励ましが聞かれるようになった。

試行錯誤で始まった避難所運営も9月中旬に全ての避難所が閉鎖された。この間、物資の対応、家屋被害調査、り災証明発行等多くの人員が要請され、復旧業務も増大する中、人員確保は非常に苦慮した。希望に応えられないなど困難も多かったが、国・県・指定都市等の自治体、全国の労働組合、民間企業等様々な応援によって支えられた。一度も現場に携わらなかった私は、苦勞を厭わず昼夜懸命に従事した職員はじめ多くの皆様に敬意と感謝を改めて伝えたい。

3 業務継続計画が肝！《実際動けるように準備！》

私たちは発災後から一刻も早く通常の生活に戻すよう全力を尽くさなければならない。業務継続計画は、継続すべき重要な業務と中止する通常業務とを選別し、それによって生み出された人員を効率的に災害応急業務等に当てられるよう事前に整理するものである。しかし、熊本地震時には市役所内で十分に周知できておらず、その意味合いが職員にほとんど共有されていなかった。

今回の地震を教訓に、それぞれの段階において必須となる業務、必要人員等を予め想定するなど経験を踏まえた改定が行われ、計画の実効性をさらに高めるための条例も制定された。有事の際に機能させるには、目標を決め、誰が何をどうするか、具体的な役割・内容を一人ひとりの職員がしっかり認識し常に動けるよう準備をしておくことが重要である。

災害は突然起こるものであり、規模や被害の状況、また、職員個人の状況等も全く異なるものであり、計画をペースにしながらも柔軟に対応していく必要がある。

4 終わりに 《チーム力の結集》

自分の生活を振り返ると、発災後、毎晩遅くまで従事し、一日おきに職場に泊まった。発災直後から自分の生活や時間はなかったもので、両親が自活できていたことは有難かった。また、

県外にいる長女が食事を作って持ってきたり、彼女が勤める会社からはコンロやボンベ、大量の水や非常食が自宅に届けられ、職場では、職員の家族が毎日スタッフの食事を差し入れてくださった。対策部は緊張の連続で心身ともに過酷ではあったが、各局の協力や課員の頑張りなどによって、職場は温かく地震前の不安も解消していた。

そこで、総務課と一緒に対策部業務等に従事した3人の女性職員を紹介したい。次から次へと発生する業務を毎晩遅くまで手際よく遂行していく彼女たちがいたから乗り切れた。チーム力、ネットワーク力が発揮されることが非常事態に力をもたらしてくれる。

～熊本地震を経験して～

中央区役所保健福祉部保健子ども課

主査 原武 尚子

1 訓練を活かして《発災直後の役割分担が重要》

前震のときは時間外勤務中であつたため、そのまま残っていた職員で課内職員の安否情報の確認、市職員の安否・参集状況の集計及び各対策部からの派遣要請への対応を行った。

毎年1月に実施されている大規模災害訓練から間もなかったため、局対策部の設置はスムーズに行えた。しかし、訓練では滞りなくできる安否・参集状況の集計は、電話がつかない、人がいない、各局対策部が混乱している中で、集計の報告を各局対策部に周知することも、上がってきた数値を集計することにも時間がかかった。熊本地震後、この経験を踏まえ集計方法を変更し、その後に起こった豪雨での対応では役立った。

また、前震は夜に発災したこともあり、参集した職員には飲酒している者もあり、避難所への備蓄用品の配送など車の運転が必要な業務に対応できる職員の確保が難しかった一方、することがなく待機状態が続く職員も多かったため、発災直後の役割分担を事前に定めておく必要性を感じた。

2 余裕がない・・・《多岐にわたる業務が続出》

本震直後は、避難所の運営に携わった。地域の方と人間関係が築けていない初期段階において、一人での夜間対応は不安があつたが、男性が地域のボランティア等の多数を占める中で、男性に言いにくい状況（授乳等や女性用品等）の相談はしやすかつたのではないと思う。当時は、女性職員を避難所運営として夜間に派遣しない傾向にあつたが、組合せを配慮するなど避難者の立場に寄り添う工夫も必要である。

発災1週間後からは対策部業務がメインとなり、主に人員配置業務を担当し、国や自治労等からの応援の受入体制づくり等を行った。各区役所と連携しながら必要数や内容を把握し、配置場所や人数等を決めていったが、どうしてもミスマッチが発生した。数の充足だけではなく、受け入れ側、応援側の双方に満足される体制をつくるにはきめ細かなヒアリングや状況把握の必要性を感じた。しかしながら、多岐の分野にわたり急を要する様々なオーダーが局対策部の業務として次々発生する中で、時間的にも気持ち的にも余裕がなく対応が困難であつたことは、今後同様の災害等の対処を考える上で、自分の課題とし

て残った。

3 生活が送れるように 《自らの備えも大切》

一方、私生活では自宅のライフラインが全て止まり、自分自身の生活をどうするか途方に暮れた。特に、避難所業務を行っていた時期は、夜間勤務も多かったため給水所には行けず、生活用水の確保が難しかった。発災直後は自分のことは後回しで災害対応を行うことになるが、このようなことを見越して、行政としてだけでなく自ら備えておくことの大切さを痛感した。

～震災が与えてくれた気づき～

財政局税務部市民税課

主任主事 松竹 優子

1 市民が求めることを優先 《価値観の転換》

発災当日は、市民からの電話対応に追われ、翌日からは避難所の運営業務を担当した。避難所では、地域住民が行政頼りの姿勢であり、当時は自身も様々な用意を行政が全てやらなければ、という価値観に支配されていた。しかし、今ならそうではなく、住民と行政が協力し、住民自らが避難所を運営できる体制を作るようにすべきであったと思う。住民の中で清掃係・物品管理係・見回係・看護係等々の自治グループを形成し避難所を運営するなど、日頃から地域と行政が、住民も巻き込んだ避難所運営の具体的な情報の共有や訓練を行っておくべきだと感じた。

発災から数日経った頃、対策部業務を担当するよう指示があった。具体的には、避難所の人員配置調整、対策本部用資料作成、被災支援メニューの作成業務等多くの業務に対応した。BCP（業務継続計画）は作成されていたものの、事実上機能しておらず、継続必要性の低い業務の判別が、個々の担当職員の判断では困難であり、作成していた計画の徹底やトップダウンの必要性を強く感じた。

事務分掌や規則に拠り所のない事務が当然ながら数多く発生するため、柔軟な対応が求められた。例えば、被災者支援策の冊子の印刷業務において、本来自身がいた総務局の担当業務には該当しないが、スピードが最優先されることから、担当業務とは関係なく、内容整備は財政局が、発注業務は総務局が行った。その後、広報部門から復興対策部門へ引き継がれていった。

以上の経験から、専門部門が出来るまでは、従前の組織で課題解決を図る必要があり、そこには課や局といった組織の枠（壁）を超える必要があると感じた。緊急時には、規則遵守、組織の業務といった従来の価値観よりも、市民が「今、求めていること」への迅速で柔軟な対応が優先されることを強く認識した経験であった。

2 地域住民として 《反省から新たな目標へ》

一方、私生活であるが、当時両親と震源地である益城町に居住していた。電気は数日で復旧したものの、水道の復旧までには数週間もかかった。余震を警戒し、数日車中生活をし、その後は車へ退避できる用意をしつつ、自宅で生活した。また、両親は被災者として避難所に出かけ、自衛隊による入浴支援や一

部物資の配給を受けており、自身も水道が復旧した市内在住の友人宅のシャワーを借りるなどの生活を強いられた。

そういう中で、市職員としてやるべき業務には、可能な限り対応できたが、地域住民として、最も被害の大きかった地元の復旧活動に関われていなかったことに対する悔いが残った。居住地である地域に対し、できたことがもっとあったのではないかという思いがあり、悔しさやジレンマを感じた。

この反省を踏まえ、震災以降は、行政職員としてではなく、地域住民としてどう地域に関わっていくかについて、考えるようになった。行動を移すまでには、まだ至っていないが、仕事としてではなく、住民として地域に交わる、関わっていくことが今後の自身の目標の一つとなった。

～対策部と避難所を経験して～

総務局行政管理部総務課

主事 河津 陽美

1 地震直後の市役所 《安心に配慮した職員配置》

時間外勤務中に前震があり、本庁舎6階の総務課でも大きな揺れを感じた。その日は市役所ロビーが夜間開放されたため、明け方まで避難者の受け入れ対応を行った。発災後、余震が断続的に続いたこと、また時間が深夜になったこともあり、避難者は不安と疲労で心身ともに消耗していた。毛布の運搬やロビーの被災箇所の補修は男性職員と協力して行ったが、一部女性の避難者からは、女性職員にそばにいてほしいとの要望を受け、隣に寄り添ったり、トイレへ付き添ってほしいとの相談を受けることもあった。避難者は性別、年齢もさまざまであったことから、それぞれの安心に配慮した職員配置が必要であると感じた。

2 対策部業務と避難所業務 《視野を広げて》

その後は、対策部業務として、主に避難所の人員配置調整を行った。各避難所の配置要請に対して、各局へ人員派遣を依頼するが、各局は応急業務等にも人員を要しており、必要配置数を確保することは簡単ではなかった。電話等で避難所や各局の情報を収集するが、その場で細かに各所の状況を汲んだ調整を行うことは難しく、時間を要した。平時から、避難所等の必要人員と各局の対応可能人員を把握し、人員配置予定を備えておくこと、またそれが非常時に確実に生かされることで、よりスムーズに、より適切な人員配置が可能になると感じた。

また、私は対策部業務と並行して避難所に従事することもあった。実際の避難所の環境や、人員配置の状況等、避難所の従事者側に立つことで見えてくるものがたくさんあった。避難所に行くまでは、自分是对策部の業務しか見えておらず、自身の視野が狭くなっていたことを反省した。対策部での業務はデータや書類がメインであり、文字や数字だけではイメージしづらいことも多いため、実際の避難所で自分が見たこと、感じたことを対策部の職員にも報告し、情報共有を行った。幅広い視野を持つこと、また、部門間の密な情報共有、連携が大切であると感じた。

3 災害時と日常との違い 《地震後の生活》

一方、私生活では、一人暮らしをしていたが、避難所業務や対策部業務では帰宅時間が遅くなることもあった。普段は車や人通りの多い道だが、地震直後は同じ時間でも車や人はほとんど通らず、不安を感じることもあった。また、地震後早々に体調を崩してしまったが、備蓄していた物品は体調不良を想定しておらず、食料品や医薬品の調達が困難であった。どこかで「自

分は大丈夫」と考えていた、自身の防災に対する認識の甘さを痛感した。震災対応時は、自宅よりも職場にいる時間の方が長かったが、課長をはじめ課員同士協力して業務を行うことができた。急を要する業務も多く、心に余裕がないときでも、互いに気持ちを分かち合える温かい職場環境であり、当時の自分にとっては大きな支えになっていた。

区役所にて

所 属	北区役所	職位	区長	氏名	野口 恭子
-----	------	----	----	----	-------

1 4月14日（前震）

北区長の辞令を受けて2週間後、植木地区校区自治協議会の役員さんとの懇親会を終え、ほろ酔い加減で自宅にたどり着いた直後、突然、これまで経験したことのない、体がどこかに持っていけるのではと感じるほどの大きな揺れに襲われた。

自宅は無事であったが一人暮らしの実家の母が気になった。人口咽頭を使って話し電話は苦手である。飲酒しているので車は使えず、タクシーもすぐ来てくれるとは思えない状況だった。市内に住む娘夫婦とは連絡が取れたので、直ぐに実家の様子を見に行ってもらおうよう頼んだ。無事が確認できひと安心する私に娘が発した言葉は、「お母さんは区長でしょう。直ぐに職場に行きましょう!」。持つべきは、働く母親を応援してくれる家族であった。

市では市長を本部長とする「熊本市災害対策本部」が直ちに設置され、私はく市民の窓口となり、区域内の被災状況を把握して非難や避難所などの支援を迅速に行い、保健福祉など様々な対応を実施して市民生活の維持安定を図る「北区対策部」の責任者となった。

14日深夜、北区対策部では避難所へ職員を派遣するとともに、24時間体制で避難所への物資配送をスタートした。

2 4月16日（本震）

15日の早朝に2,600人を超えた管内避難者報告数は夜11時頃には300人を切った。そこで一旦帰宅させてもらうことにした。前日徹夜したので爆睡していたのだろう、16日深夜1時過ぎに発生した本震は揺れで目覚めたところから記憶がある。停電しており周囲は真っ暗であった。

すぐに職場へ駆けつけようとも考えたが、対策部に詰めている部長の言葉が思い出された。危機管理の実務経験を持つ部長である。「もしもの時、慌てて暗い中を運転するのは危険です。道路状況が確認できない状態で事故に巻き込まれては返って迷惑です。長期戦への備えを忘れないください。」、周囲が明るくなりだしてから急いで職場に向った。

信号機が所々消えていたが辛い通行できない箇所はなかった。自宅から職場の北区役所へは、市の中心部から北の玄関口と呼ばれる九州自動車道植木ICへと続く国道3号線を北上し

なければならない。対向車線は通勤する車でいつも渋滞している道路だ。しかしその日の早朝、目に映る景色は明らかに違った。対向車に自家用車らしい車は見当たらない。前面の「災害派遣」の文字が目立つ。兵庫、八王子、広島、相模原、…初めて見るナンバープレートも多い、全国各地からの車が續いていた。救急車、消防車、ガス会社、トラック、自治体の公用車…。自然と涙が出てきた。「こんなに全国から…。頑張らないと。大丈夫だ、大丈夫だ。」、自分に言い聞かせながら、ハンドルを握っていたことを覚えている。

北区役所2階の区対策部、総務企画課の電話は鳴り続けた。支援物資も次々と届き、多くの職員はその場の対応に追われた。何より情報がひどく錯綜していた。17日の深夜1時、北区管内避難者報告数13,345人、ピークを迎えた。

3 避難所運営

2011年の東日本大震災が起きたとき、私は男女共生推進課長だった。平成24年版の男女共同参画白書は「男女共同参画の視点からの防災・復興」が特集テーマに掲げられた。当時、内閣府男女共同参画局から次々に発信される情報からは、これまでにない大きなうねりが感じられた。私も人ごとではないと思い、もしもの時には東日本の教訓を踏まえ女性の視点で心身の安心・安全に配慮した避難所運営に取り組もうと考えていた。しかし現実は一歩が踏み出せないまま時間だけが過ぎていた。そんなある日、市の男女共同参画センターが避難所用の啓発チラシを作成したと地元紙に掲載された。藤井館長の顔が浮かんだ。さっそく連絡してデーターを送ってもらい内閣府のHPから入手できる避難所チェックシートとともに各区の避難所での活用を訴えることができた。4月23日の第21回災害対策本部会議でのことである。本震から1週間が経っていた。

嬉しいこともあった。直後に、くまもと被害者支援センターの真嶋センター長が自ら北区役所に来られた。啓発チラシと併せてポスターを持参され、各避難所を回りたいとの申し出であった。県警時代と変わらないその行動力に感激したことは忘れない。

3 避難所閉鎖

生活再建に向け次へのステージへと進むためとはいえ、余震が続く地震災害である、避難所閉鎖は現場を預かる区役所としても大変なパワーが必要とされた。

力となったのは、災害対策本部で組織一丸となり前へ進もうという方針が示され、その意義が市の共通認識であることが確認できたことだった。本部の意向を受け、5区長が頻繁に集まり、日々変化する課題の解決に向き合う「場」が設けられた。北区対策部では、組織の核となる管理職全員が担当業務の枠をこえ協力しながら、現場では率先して行動した。他都市応援職員の献身的な働きも大きかった。それぞれ試行錯誤ではあったが、多くの職員が被災者に寄り添ってくれた。

7月31日、北区最後の拠点避難所を閉鎖する日を迎えた。その日、避難所はこれまでの喧騒が嘘のように静まり返ってい

た。帰宅される最後の避難者から「お世話になりました」という言葉をもらった。チーム北区の仲間と、内外から支援・応援して頂いた本当に多くの方々との出会いに、感謝の思いが溢れた。

特に混乱を極めた避難所開設から閉鎖までの間、私は、チーム力の大事さについて身をもって学ぶことができた。大切なのは、組織の中での情報共有、お互いのコミュニケーションを図る機会を小まめに持つこと、決断はシンプルに、任せる時は躊躇なく任せることであったと思う。

結びに、熊本地震被災者そして全国各地の被災者の方々に心からお見舞い申し上げます。

一つでも多くの笑顔がそれぞれのふるさとに戻ってくことを心から願っていることをお伝えしたいと思います。





「避難所」



のこと

熊本地震、その先へ

所 属	市民局市民生活部地域活動推進課	職位	主幹	氏名	岡本 智美
-----	-----------------	----	----	----	-------

1 前震と本震

前震のとき、私は、その年に新たに誕生した地域活動推進課の結成式に参加し、二次会へ向かう数人を見送ったあと、同僚とバス停へ向かっていた。

あの時の衝撃は、誰も忘れることはできないだろう。何か起きたのか理解できなかったが、その場にいた誰もが恐怖に息のみ、只ならない事が起きたことだけは確信できた。

その日は自宅待機の指示があり、翌日、避難所となっている小学校の体育館へ向かった。平日の昼間ということもあり、高齢者の避難者が目立った。避難者に不安を与えないよう、落ち着いた態度で接することを心掛けながら、配達されてきたおにぎりを配った。余震の度、幼児は怯えて母親にしがみつく姿も見られた。

夜になり、避難所運営を交代し、帰宅。車中で寝ていたところ、本震がきた。家族は全員無事で怪我もない。近所の方々も屋外へ避難してきた。皆、家の中にいるよりも、外に出て誰かと話し、少しでも不安を取り除きたかったのだと思う。避難所は大丈夫だったのだろうかと不安がよぎった。

本震後、別の避難所に行った。公用車は足りず、公用自転車を使ったため、街の風景が良く見えた。給油を待つ自動車の列、静まり返ったパチンコ店、電気が消えたコンビニの陳列棚は空のようだった。避難所は避難者の車で溢れかえっていた。自治会長をはじめとする地域の方々、避難者が駐車スペースの整理やトイレ用水の確保に協力してくれた。自分のためだけではなく、皆のために何かしたいという共助の心を持つ人は、少ななかった。わずかな食料の配布だったが、苦情もなく一列に並んでもらえた。本当に有難かった。

本震から半月が立とうとするころ、学校の再開のため、指定避難所を集約し、拠点避難所への移行準備が進められた。拠点避難所となる施設を見て回り、設備を確認。女性専用の更衣室や洗濯場、シャワー室の設置場所など打ち合わせした。東日本大震災の際に避難所で起きた性犯罪の記事を読んだことがあった。女性として、娘を持つ母親として、プライバシーを守りつつ、犯罪が起きにくい環境を作ることは絶対だと思った。

2 拠点避難所

拠点避難所が設置され、私は総合体育館での避難所運営に応援に行った。区職員の尽力により避難所は整然としていた。定期的に避難所内を巡回し、挨拶程度に声をかけたり、雑談を交わしたりした。誰かが見ているという安心感を持ってもらう一方、誰かが見ているという警戒心を持ってもらいたかった。

忘れられない避難者が何人かいる。一人は50代後半の女性だ。気分転換のため、散歩を日課にされていたが、ある日の散歩帰り、私は右手を差し出された。女性の右手には四葉のクローバーが握られていた。散歩の途中、クローバーが目にとまり、四葉を探したそうだ。思いがけず2つ見付き、1つを私にく

れたのだ。どんな思いで四葉を探されたのだろう。他者にも分けてくれる優しさに頭がさがった。しばらくして女性を見かけなくなったので、目途がつき避難所を退去されたのだろう。日常を取り戻されたことを願うばかりだ。私は、その時いただいた四葉を押し葉にし、今でも持っている。地震を忘れないため、苦境にあっても思いやりを忘れないために。

「職員さんも被災者なのにね。私たちのお世話をしてくれて申し訳ない。」と温かい言葉をかけてくださった避難者の方もいた。私の自宅は家具が倒れ、割れた食器が散乱する、ひどい様だった。私が避難所や物資調達など忙しくするなか、自宅の片づけは夫と子供たち請け負ってくれた。足の踏み場がなかった室内は次第に整理されていき、戸が開かず出入りができなかった寝室は、ある日帰ると戸が鋸で切断され行き来できるようになっていた。遠方に住む友人は、何時間もかけて食べ物や飲用水を熊本まで届けに来てくれた。私は帰って寝るだけの日々で、家族に何もしてあげられず申し訳ない気持ちだったので、そんな避難者の方からの言葉が嬉しかった。私でも誰かの役に立っていると思えた。

3 避難所担当職員

私は、避難所担当職員となっている。災害時に自分が何をすべきか頭では分かっているが、改定された避難所運営マニュアルに目を通してもし落ち着かない。熊本地震を経験した以上、次の有事には完璧さが求められるだろう。いざという時の備えをしていなかったと、あの時悔しい思いをしたが、その教訓を生かした準備ができているだろうかと自問している。

環境改善から自立支援～地震からみえたこと～

所 属	市民局市民生活部男女共同参画課 (広聴課)	職位	課長	氏名	藤川 潤子
-----	--------------------------	----	----	----	-------

1 前震

突然、ドーンと突上げたような揺れに仰天した。家族の安否を確認し職員皆の無事を確認した。市民局は物資担当であったため、すぐに「うまかなよかなスタジアム」での支援物資倉庫の集約整理・配布等を局内の職員が対応にあたることになった。同時に避難所にもすでに数人が運営にあたっていた。職場内ではキャビネやPC、物品は散乱し12Fだったためか揺れの大きさを物語っていた。「男女共同参画センターはあもにい」(以下「はあもにい」という)及び相談室においては特に混乱はみられなかった。まさか、これが前震とは夢にも思わずに。

2 避難場運営と支援物資<本震からの動き>

再び大きな地震が襲った。長い余震の揺れが続く中、信号が消え、土砂崩れ、方々のひび割れ、隆起といった無残な道路をどうにか通行し職場へ向かう。

多くの避難所が開設され全員が避難所運営にあたり、各職員が各持ち場での対応に追われた。局内でも避難所運営と支援物資倉庫の対応、本部との連絡調整など混乱しており、自分も本庁災害対策本部情報調整室や支援物資倉庫への従事といった日々が続いた。

情報調整室では、道路・河川・のり面等被害、物資など様々な訴えや連絡の電話が鳴り響き、さすがに夜中の電話は少なかったが大勢の職員で目まぐるしいものだった。

また、支援物資倉庫では、次々と物資を運んできたトラックが連なり続け混乱状態であった。その後、職員と多くのボランティア、自衛隊の協力によって流れが動き出し始めた。中には、スタジアムに行くと物資がもらえるといった情報が流れ、被災した方々が遠くから物資を求めて来られた状況もみられた。

支援物資倉庫で対応した職員は、目の前にたくさんの物資があるのに避難所でしか配布できないルールのため来られた方々全てに断らざるを得なかったことがとても辛かったという。道路渋滞は日に日に酷くなり、この状態はいつまで続くのだろう…と全く先の見えない不安をかかえながら災害対応に全力を尽くすしかなかった。

3 相談室のこと

当時の課では、別の場所に相談室を持ち様々な相談を受けていたが、地震後の相談件数は昨年度の2倍近くに増え、余震が続くことへの恐怖感や体の疲労、身体的なストレスから平常心が保てないことへの不安といった多くの相談が寄せられた。

また、無我夢中で対応してきた相談員も、日を追うごとに震災前には考えられなかった心身の状態(サバイバースギルト状態)が見られるようになり、この地震が相談者だけではなく相談を受ける相談員に与えた影響も大きかった。

*サバイバースギルト状態・・・被災された方の苦悩を思い自分自身が癒されようとする事への罪悪感に苛まれること

4 避難所の環境改善

そのような中、「はあもにい」では、神戸市や仙台市など震災を経験した男女共同参画センターからの助言もあり、すぐに開設された数箇所の避難所を回り地震後の混乱に乗じた性被害や性暴力防止の啓発に動いていた。現場では、仕切りのない避難所での授乳・着替えの場所がない、女性用の物干しがなく下着が干せない、夜間の照明がない避難所での安全対策への不安など女性や子育て家庭に対する配慮が全くなされていないことがわかった。

このことを受け、至急「はあもにい」館長とスタッフと共に内閣府から提示された「男女共同参画の視点からの避難所運営がなされているかのチェックシート」を熊本市版へと作り変え、各避難所で性暴力・DV防止啓発チラシの掲示及びチェックシートを活用するよう全庁的に周知を図った。その後、定期的に避難所を巡回し、「女性や子育て世帯に配慮した避難所となっているか」「男女共同参画の視点に配慮した避難所の管理運営となっているか」等の現状確認を行うとともに避難所スタッフにヒアリングを行っていった。

徐々に環境が改善されていく中、避難所生活において様々な声をあげられるようご意見箱を設置し、意見を各関係部署へ伝え解決に繋いでいった。

意見には、「女性用品がない」「同じエリアに男女が混在していると不安」といった悩みも寄せられていた。なお、集約避難所となった「はあもにい」には、ファミリーが数組、避難者のほとんどが女性ということもあり、不安要素は低かったように思う。

4 自立支援

集約避難所から少しずつ避難者も退所される中で、自立に向けた取り組みが進み始めた。

「はあもにい」においても様々な支援活動が行われていた。また、食生活改善推進員、栄養士と連携し配膳・役割分担・栄養バランスや健康についての話や防災備蓄品等を利用した食事会、さらに今後、避難所を出てからの食生活に役立ててもらえるよう、自立支援のための活動を数回実施した。

その後も、防災ミニ講座の開催や親子メンタルケアの講座など避難者支援を継続した。また、それぞれに個別ヒアリングを行い、多くの方が抱える住まいへの不安や体調面についての不安等を聴き取り職員と情報共有し対応へと繋いだり、当該職員が避難所対応や現地調査で動けない中、「はあもにい」スタッフが率先的に動いてもらったことはとてもありがたかった。

5 女性の視点を防災に生かす

今回の震災で改めて女性や高齢者等に対する視点が弱かったことを踏まえて、地域防災計画、避難所開設・運営マニュアルの中に女性の視点をしっかりと明確化されたことは、今後いつ起こるかわからない災害が発生した場合における速やかにかつ効果的な被災者援護に繋がるものと思う。ただ、女性イコール災害弱者ではない。女性には行動する能力もあるし、体力がないわけでもない。だからこそ、自助・共助・公助といったあらゆる部門においても、女性が積極的に関わることが重要なのだと改めて確信した。

6 支援者に対する思い

この未曾有の大地震で、全ての人が被災者であるにもかかわらず多くの支援者が避難所運営をはじめ家屋調査等、市民に寄り添い、身をこなし対応してきた。そのうち、職員の1人が体調を崩し入院となり休んでしまった。「みんな大変だから私も頑張らなくては・・・と自分を追い込みがちになったのか、或いは市民の怒りや悲しみを受止めたダメージが大きくなったのか・・・」等私自身も考え込み配慮が足りなかったと悔やまれた。長期に避難所対応にあたった職員は、夜勤も続き身も心も限界に近く肉体的・精神的な疲労から、もしかしたら倒れるかもしれない・・・と訴える自分がいたという。また、現場で判定に納得いかない市民からの心無い暴言等を受止めながら休みもせず長期にわたり家屋調査に従事していた職員も正直辛かったという。

振り返るともっと早くに支援者に対し自己メンテナンスの促進やストレスケアを組織的に行う必要があったのではないだろうか。非常時だからこそ支援者が元気でなければ活動は続かない。

また、隣の課では、保育園に預けられず子どもと職場同行し業務を行っていた女性職員がいたり、別の部署でも自宅が大規模半壊で怪我を負い車中泊、親の介護をしながら支援にあたる女性職員がいたりと非常時における女性職員の大変さを目の当

たりにした。

絶対的にマンパワー不足であった中で非常時には市民の支援が優先であることはもちろんだが、支援者側のそれぞれの状況も把握し配慮しつつ、各職員が業務にあたることで支援に対する責任感も増し支援者の心の安定にも繋がっていくものだと感じた。

それでも、様々な震災対応にあたった職員から、初めての体験で大変だったが、非常時において行政としてやるべきこととしての備えや考え方の整理だけではなく、人としての在り方を考えさせられるよい機会でもあったとの声を聞き、苦労が多かったからこそ、職員一人ひとりがそれぞれの経験で得たものは大きかったのだと思った。

7 最後に

この地震で初めて自然への恐怖と車中泊を経験した。余震が続いたせいもあったが、いかに車中が寝苦しいかが実感でき、布団に寝る当たり前のことができない辛さが身にしみた。また、いつも行くスーパーが品切れ状態で大行列のレジ待ちであったり、飲み物がない自動販売機がいくつもあったりと日常では考えられない日々には驚かされた。

本震後の熊本城の姿を見たとき、呆然となり思わず涙がこぼれた。そんな時に全国の政令指定都市の男女共同参画関連部署から、お見舞いや励みなど多くのメッセージが届くなど他都市からの暖かい言葉かけに心がじんわりと暖くなったことを思いだす。

地震発生直後から、他都市より応援に来ていただいた多くの職員の方々が市民のみならず我々職員に対しても親切丁寧に対応して頂いたこと、心から感謝したい。

さらに、仙台市より多くのアドバイスや奥山仙台市長より復興を経験する中で得た気付きや復興に関わる必要性など貴重なお話も頂いたこと、しっかりと心に留め、決して忘れることのない今回の地震体験を教訓として今後の災害対応に生かしていきたい。

熊本地震を振り返って

所 属	市民局市民生活部生活安全課 (震災住宅支援課)	職位	主査	氏名	除野 りえ
-----	----------------------------	----	----	----	-------

平成 28 年 4 月 14 日、16 日に起きた熊本地震から 2 年 8 カ月過ぎたが今でも本当は 14 日と 16 日のことは細かく思い出したくない。

何故なら、今までで一番恐怖を感じたからだ。また、地震で生まれ育った実家が全壊し、解体、更地となったため、思い出すと心が痛く、重くなり、今でも涙ぐんでしまうからである。

私は、過去よりも今から先の未来をどう過ごすかを考えるようなポジティブ思考の持ち主だと思っていたのだが、実は、真正面から辛い過去と向き合うことを避けていたのだと今更だが、自覚できた。2 年 8 カ月もかかったが、今なら過去と向き合える？と思えたことに感謝し、少し当時の状況を書きたいと

思う。

私は、益城町のすぐ隣の秋津校区に住んでおり、実家も同じ校区にあった。

まず、4 月 14 日、実家の父は、2 階で筆筒の下敷きになったが、火事場の馬鹿力でどうにか筆筒の下から這い出ることが出来た。母は 1 階の台所にいたが、テーブルの下にいて無事だった。我が家も全員無事だった。父だけは、背中への傷の完治に 1 カ月かかった。

我が家は、地震直後に停電したので、当時の記憶は、真っ暗な中で聞こえた「ガッシャーン、パリーン」という皿やグラスが割れる音と「ガン、ドン」と何かがぶつかり合う音と地鳴り

のような恐ろしい音ばかり。

私は、娘と食卓台の下に潜り激しい揺れに耐えながら「これは本当に現実なのだろうか？夢じゃないのだろうか？夢であってほしい。」と心から願うばかりだった。

4月15日の朝は、朝日でようやく見えた台所とリビングの無残な光景に強烈にショックを受けたが、すぐに当時の職場の生活安全課に出勤し、公用車で日吉小学校へ向かい、体育館へ避難して来られた約30世帯の方への対応に当たった。お昼に届く予定だった南区からのパンが届いたのは午後4時前位だったと思う。

4月16日は、ようやく眠ろうとした時、またも激しい揺れに襲われた。危険と判断し、すぐ外へ出て、隣近所に声をかけ無事を確認し合った。

高齢者が多いので秋津小学校まで車で行くことが出来るかまず徒歩で確認し、その後車で秋津小学校の校庭に移動し、車中泊をし、そのまま出勤し奥古閑小学校に向かった。

前日の日吉小学校では、地域の防災クラブの方々が地震直後から活動を開始されており、私達が到着した時には、コンロに鍋が置かれ、お湯も準備してあったが、奥古閑小学校では、体育館に約10世帯避難しておられたが、配布物は毛布のみだった。防災倉庫からコンロややかんなどを体育館へ運び急いで非常食の準備に取り掛かった。前日同様南区役所からパンが届いたのは夕方であった。「とにかく道が渋滞して車が進まない。公用車が少ないので物資を届けるのに時間がかかった。」と言うことだった。緊急時に地域の協力があるのと無いのでは、大きな差になることを実感した。

4月17日からは、熊本学園大学及び熊本学園大学付属高校で午前8時から午後8時までの2交代制での勤務を1週間。その後も健軍東小学校、税務大学校、秋津小学校、東野中学校、白川中学校、防災センターなど1日のみの勤務もあれば、連続で同じ避難所に勤務することもあった。1カ月で10カ所の避難所で勤務した。

避難者の方からは、「何で毎日人が変わるのか。人を固定してほしい。」という要望と、「熊本市役所の人と分かるように統一のビブスを着てほしい」との要望が一番多かったと思う。自分ができる判断はその場で直ぐに行い解決する、判断できないことは、すぐ相談し、できない場合は、被災者の立場で考え最大限の配慮をする等解決に向けその場でできることを必死で考え行動した。体力的には限界でも、「ありがとう」の言葉に救われながら過ごした日々であった。

私は避難所担当職員なので、また万が一の時には、他の担当職員と3人で避難所を開設し3日間は何としても秋津校区の皆様を守り抜かなければならないと強く思っている。

今年は、秋津校区防災連絡会を5回開催した。避難所運営マニュアルの修正など回を重ねるごとに地域の方と世間話をしたり、顔見知りが増えたりと、とてもいい関係が築けていると実感している。

万が一は、いつ起こるかわからない。備えあれば患いなし。万が一は、明日かもしれないという考えを忘れず、無事に終わった今日に感謝する毎日をこれからも過ごしていきたいと思う。

避難所について

所 属	中央区役所まちづくり推進課 (財政局税務部固定資産税課)	職位	主事	氏名	谷川 麻美
-----	---------------------------------	----	----	----	-------

1 はじめに

今回、拠点避難所総括業務について、手記の作成を依頼された。中央区におかれた拠点避難所のうち、特に注目をあびた「男女共同参画センターはあもにい」について、記載したいと思う。

2 拠点避難所はあもにいの特徴

中央区では、拠点避難所として指定された施設が前述の「はあもにい」のほか「子ども文化会館」「サンライフ熊本」「大江公民館」「五福公民館」「熊本市総合体育館」の6施設があった。そのうち、「熊本市総合体育館」は、地震の被害が大きく、かつ、拠点避難所にできる適切な施設が多くない東区の住民を優先的に受け入れることとなり、中央区で総括・運営を行ったのは、熊本市総合体育館を除く5施設である。その中でも、特に特徴的であったのは、はあもにいであろう。はあもにいは他の4施設とは異なり、入居者の選定を行う中では、「女性の単身世帯」「女性のみの世帯」を優先に選定された。実際に、隣接するサンライフ熊本の体育館が雨で使えなくなってしまう、はあもにいにサンライフ熊本入居者に移動してもらうまでのおよそ3ヶ

月間は、はあもにいの入居者は女性のみであった。

そのような取り組みが行われた要因の大きなものに、はあもにいスタッフの方々の熱い思いがあった。はあもにいは、男女共同参画センターとしての役割をもった施設であり、スタッフのみなさんは「女性のために」「女性の視点を大事に」というコンセプトで仕事をされている。そのため、「女性が安心して避難できる避難所を」ということを目的に「女性優先（女性専用）」の避難所が開設された。

3 私のこと

私は熊本市中央区のマンションにて一人暮らしをしている。地震発災時も、同じように中央区のマンションで一人暮らしであった。マンションは、外壁内壁ともに亀裂が大きくはいつていた。入居者は私同様単身世帯が多いため、地震後は、実家等に避難していた人が多く、ほとんどの人がマンションでは生活していなかったように思う。しかしながら、私は、「マンションがつぶれて死んでしまっても仕方ない」と覚悟した上で、マンションでの生活を選択した。

私が避難所に避難しなかった理由は、なんとかマンションが
入れる状態であったこともあるが、一番大きな原因は避難所で
の生活が怖かったためである。災害の際、避難所生活にて着替
え・トイレ等女性は大変怖い思いをしたという話も聞いていた
し、なんとなく知らない男性の隣で寝たりするのは怖いな、と
いう気持ちがあり、避難所へいけなかった。

熊本地震では車中泊をした人がとても多かったとの報告もあ
る。その要因のひとつに、私のような女性単身世帯は、避難所
生活に恐怖感があり、避難ができなかったこともあるように思
われる。

4 終わりに

実際にはあもに避難者の方々からは「安心した」「女性だ
けなのでよかった」との声が多数聞かれたし、やむを得ずサン

ライフ熊本から男性も移転することになったときは「怖い」「仕
方ないけどいやだなあ」という意見も聞かれた。

拠点避難所は地震発生後約3週間経過したゴールデンウィー
ク明けにオープンした。女性優先、入居者が女性しかいない避
難所というのはそれまでの3週間熊本市内にはなかった。もち
ろん、各指定避難所にて、女性用の部屋を作るなど取り組みを
行ったところはあるだろう。しかしながら、避難者が多すぎて
そういった仕分けをできるほどの状況になかった指定避難所も
多かった。

また、子どもが小さい世帯は、子どもの泣き声を気にして避
難所には入らず車中泊を選んだ方も多いようだ。

もし、熊本市内にひとつだけでも「女性専用避難所」「子ど
ものいる世帯専用避難所」があれば、そういった人たちも避難
しやすいのではなかろうかと考える。

熊本地震を振り返って

所 属	中央区役所保健福祉部福祉課 (保育幼稚園課)	職位	主事	氏名	林田 花奈
-----	---------------------------	----	----	----	-------

1 発災 ～ 《知っていることの安心感》 ～

「林田さん、担当避難所の希望ありますか?」「道がわかる母
校にしてもらえますか?」そんな会話を年度当初にしたことを
覚えている。

前震当日、午後9時前に帰宅し、母とテレビを観て、至って
当たり前の日常だった。午後9時26分、地鳴りのような音を
たてて家が大きく揺れ、がむしゃらに母の上に覆いかぶさっ
ていた。携帯の緊急速報の音が鳴り響く中、すぐに避難所へ向か
った。病気をもつ母を1人家に残すことがとても不安であったが、
出かける間に1度強く手を握り締めて出発したことを覚えて
いる。

避難所では懐中電灯片手に「避難されている方は運動場へ移
動してください」と歩いた。前も見えないほどの暗闇で、時折
起こる余震が怖かったが、何年も通った母校であったため自然
と足が進んだ。「担当避難所を通いながれていて、校舎の配置を
知っている母校にしてよかった。」と強く思った。「知っている
こと」の与える「安心感」が緊急事態の際に自分を支えてくれた。
運動場の上には報道のヘリコプターが何機も飛んでおり、ライ
トで照らされたり、近寄ったり。「全国に熊本の様子が流れて
いる。ただ事ではない。きっと全国に支援者がたくさんいる。」
と心強かった。

朝まで避難所で過ごし、午後8時頃まで課で業務を行い自宅
へ。徹夜と疲労で午後11時頃に就寝した。午前1時25分、
また地鳴りのような音と尋常ではない強く長い揺れ、鳴り続く
携帯の緊急速報。山に囲まれる自宅は土砂災害の危険性もあり、
荷物をまとめて車で避難した。橋が大きく隆起しており渋滞で
動けず、職場からは朝出勤するよう言われたため、コンビニの
駐車場で暖をとりながら体を休めた。この頃は家の中より車の
方が何倍もよく眠れた。

2 奮起 ～ 《築いてきたもの》 ～

発災後に駆けつけてくれた全国各地の自治体職員・自衛隊・
警察・消防・医療関係・ボランティア・・・光景を目の当たり
にするだけで涙が溢れ、「ありがたい。頑張らなくちゃ!」と自
分を鼓舞したことを覚えている。

当時、私は障がい福祉サービスの業務を担当していた。嘱託
職員も土日を問わず職員を必死に支えてくれた。福祉避難所へ
の手続き、市外へ避難された方の自治体への情報提供、通常業
務を遅らせないようできる限りの努力をした。常日頃から相談
支援事業所の相談員と情報連携を行い、良好な関係が築けてい
たため、「入浴施設を教えてほしい」という要望にも相談員か
ら「系列の事業所で機械浴できるからと伝えて!」とすぐ情報
をもらい提供することができた。加えて、「職員さんは大丈夫?
ご飯食べてる?何かあれば言ってね!」と暖かい言葉をたくさ
んいただいた。

また、地震の影響で不安感が強く頻繁に来課される市民の方
もいた。職員と話すだけで落ち着いて日常を取り戻す方、熊本
市役所に避難されていたため、朝に「おはよう」、夕方避難所
へ向かうときに「また明日」と挨拶するだけで次第に笑顔にな
ってくれた方、障がい福祉サービスの利用に繋がり今でも近況を
課へ報告しに来課される方。正解か不正解かはわからないが、
声を聞いて受け止めて、時には必要な手続きを行い、各関係機
関に繋いで・・・それが当時の精一杯であった。時間をかけて
築いてきた職員同士・各関係機関との関係が生かされた時だっ
たと思う。

3 疲労 ～ 《備えは心のゆとり》 ～

当時、強く覚えているのは電話対応への難しさ。発災後は受
話器を置けば電話が鳴るような状況が長期間続いた。被災され

た方の業務の調整で電話を使いたくてもふさがったままで、やむなく個人の携帯電話を使用して業務を終えていた。電話の多くは「り災証明」についてで、方向性がつかない状況にも問い合わせがあり、お待ちいただくよう何度も説明と謝罪を繰り返すほかなかった。り災証明の受付を開始すると800人待ちにもなった。「やっとり災証明が取得できた」と安堵していただけ一方で、対応人員の増加もできず待ち時間が長いこと、支援策が打ち出されないこと、電話が繋がらないこと、あらゆるご意見や顔が見えない分に心無い言葉も届いた。発災当初は感じなかった疲労も、日が経つにつれ体が重くなり、中には疲れきってしまう職員もでてきた。

しかし、今思うと発災後休みなく走り続けていたせい、なかなか業務に集中できておらず、自分自身の精神・体調面の管理もうまく出来てなかったように思う。他の職員も同様であっただろうが、業務中も余震のたびに離れている家族が気になり、自分の生活への不安も頭をよぎった。久しぶりに早く帰宅しても川で水を汲み、銭湯の行列に並んでいた。「日頃の備えがあればその時間に体を休めることができたかもしれない。そ

うしていれば心のゆとりを持って、職務を遂行できたかもしれない。」と反省した。

4 生かす ～ 《振り返って》 ～

熊本地震からもうすぐ3年。平成31年仕事初め前日の久しぶりの地震。幾度もの揺れを乗り越えたのに、未だ鼓動が早く打ち、「あの時みたいに、これ以上大きく揺れないで」と思う。ずっとこの忘れられない経験とともに生きていくのだと再認識した。

今振り返ると女性として特に不便を感じたのは衛生面であった。トイレも銭湯も女性ばかりが列を成していた。また、この3年で結婚をしたことで「あの時にも子どもがいたら・・・」「1人暮らしになった母は・・・」とも思う。

こうして執筆しながら、私自身がこの経験で感じたことを今後の人生に生かそうと改めて振り返るとともに、全国の被災地の1日も早い復興を願うばかりである。

被災から避難所閉所までの道のり

所 属	東区役所まちづくり推進課 (子ども政策課)	職位	参事	氏名	茶園 聡美
-----	--------------------------	----	----	----	-------

1 はじめに

平成28年4月14日の前震の発生後、テレビの速報では熊本城の天守閣の辺りから白い粉塵が上がっている映像が伝えられていた。4月2日に、二の丸広場で夫の会社の花見があり、久しぶりに天守閣まで上ってみた。桜を前景に見る熊本城は風情があり、思わずカメラのシャッターを切った。当時、小学2年生だった息子は、城主（一口）でありながら、その時が初めての入城であった。自分の名前の札を見つけて喜び、天守閣からの風景を楽しんだばかりだった。

翌15日、当時の勤務地の東区役所まちづくり推進課に出勤すると、早速、災害ごみの収集についての問い合わせの電話対応に忙殺された。しかし、これは、これから目まぐるしく変化していく地震関連の業務の一端に過ぎなかった。

まちづくり推進課は、災害時は避難所の開設や運営、総合相談の窓口業務が課されている。当時の業務や出来事を、前期、中期、後期に分け、振り返ってみた。

2 初期の業務 (地震発生から拠点避難所の開設まで)

本震の発生時は前震を受け、交代で宿直している職員がおり、緊急の出勤はしなかった。翌朝になって出勤すると、区役所には既に多数の方が避難しておられた。まちづくり推進課がある2階のカウンター越しのスペースにも避難されていた。初期の業務を振り返ると、突発的な事態への対応に振り回されることが多かった。

4月に課内異動でまちづくり班から環境班に配置換えになったばかりであった私は、日中は、災害ごみ関係の問い合わせで鳴り止まぬ電話の対応に追われた。台風の時の災害ごみでは風倒木や波板等が多いが、今回は地震のため、瓦やブロック、皿、ガラスといった埋め立てごみが多く搬出され、2、3日経つと、街中のごみステーションがあふれかえる状況となった。自治会からの要請で災害ごみの収集に従事する機会があったが、皿やガラス類をパッカー車に放り込むと、すさまじい破壊音とともにその破片が飛んでくる。クリーンセンターの職員も、先の見えない収集作業でとても大変だったと思うが、そのような中、全国30都市からごみ収集の応援に来ていただいたのは、本当にありがたかった。



災害ごみの収集作業（H28.4.18撮影）

また、時にどこの課にも属さない仕事が舞い込む。地震直後、長崎県に住む方から、実家が倒壊しそうだと言った近所の人から連絡があったので、見にいってほしいとの電話があった。業務の合間を縫って見に行くと、すぐに倒壊するとは思えなかったが、

私の判断で大丈夫ですとも言えず、数枚の写真をメールで送信し確認していただいた。この他にも、知り合いに連絡がつかないので確認してほしい、風呂に入りたいが銭湯が渋滞している、地震で隣家の空き家の戸口が開いてしまったので閉めてほしいなど、様々な要望が寄せられた。

4月21日には、市政だよりの臨時版が発行され、各校区の自治協議会長のご自宅へ配布して回った。会長ご自身が被災されておられる方もいらっしゃる中、どの校区の会長も、地域の方々の安全確保や避難所の運営等に奔走されておられ、頭の下がる思いであったが、反対にこちらの労をねぎらっていただいた。配布をしながら、被害の状況を見て回る。特に秋津校区の変貌に驚いた。ちょうど、前の月に東区内の歴史文献等を整理するため、秋津校区の小さな御堂やお地蔵様などの写真を撮って回っていたのだが、どれも跡形もないくらい潰れていた。今回の地震の凄まじさを感じた瞬間だった。

避難所業務では、当初は食料を始めとする物資の確保や配送、避難所に勤務する職員への指示等を行っていたが、4月の末頃になると、拠点となる避難所の開設作業が始まった。東区には大きな施設がなかったため、管内4ヶ所のほか、中央区の熊本市総合体育館の2階を拠点避難所として開設することになった。指定・指定外避難所に避難されている方々への意向調査、名簿の作成、拠点避難所への移動や運営体制の整備など夜通しの作業であった。東区管内全避難所の本部要員として交代で宿直業務にもあたっており、この頃は課員の疲れもピークに達していた。

3 中期の業務

(拠点避難所開設から避難所閉所の決定まで)

5月8日には、一部の方の拠点避難所への移動が始まった。この日は、息子の誕生日であったが、当然、祝える時間に帰れるはずもなかった。しかし、母はおらずとも子は育つもの。新学期以降、不登校気味で毎日腹痛を訴え、どこの病院にいても治らなかったものが、学校が休校になるや、嘘のように腹痛は治っており、近くの公園に給水車が来ると聞けば祖母といっしょにもらいに行き、近所のスーパーが再開したと聞けば買い出しに行きとそれなりにがんばってくれていた。

この日、中央区から引き継いだ総合体育館避難所に行くと、まだ、混沌としていた。1階は中央区、2階には移動してきた東区が入り、併せて200人以上の方々が避難されることになった。何から初めてよいかわからなかったが、とりあえず、本部を設置し、引き続き残ってくださった大阪市の応援職員の方々に、これまでの運営状況等を聞いた。食事の配給方法やシャワーの使用ルール、ペットの取り扱いなど決めなければいけないことが山積していた。また、この時点で避難所にはまだパソコンがなく、名簿の管理は紙媒体であった。パソコンを何とか調達すると、今度はプリンターが必要となり、その都度、手配に手間取る。後に内閣府から視察に来られた際に、何が必要だったですかという質問を受けたが、有事に対応できる電子機器等がパッケージであればよかったと回答した。

一方、区役所の避難所本部（まちづくり推進課）には、避難所で炊き出しやマッサージ、散髪、演奏などのボランティアを

したいという方々からの連絡が多数寄せられ、その調整業務を行っていた。内容によって、どこの避難所に行っていただくかを決めるのだが、各避難所の人数や配食等の状況を把握しておく必要があり、調整が大変であった。また、避難所でのボランティアを区毎に受付けていて、ボランティアをしたい側もそれぞれの区に連絡をとらなければならず、煩雑であった。市として一括して受ける窓口があれば、もっとスムーズではなかったかと思う。

6月末には、災害ごみをごみステーションで収集する特別収集が終了し、また、家屋の解体が始まりだしたため、ごみ処理手数料の減免申請をする方が増えはじめた。東部環境工場が近いこともあり、他の区に比べ申請に来られる方が極端に多く、時間中はその対応に追われた。この業務は、年度末まで延々と続いた。

季節は移り、暑くなってくると避難所には冷房機が設置され、避難所からの本部への物資の調達依頼も殺虫剤や温湿度計等に変化してきた。避難所でも、より一層、食中毒がでないよう神経を使った。避難生活も長期に亘り、健康面も心配されるようになってきた。余震も少なくなった7月の中旬には、避難所を閉所する時期を決定した。熊本市のほとんどの避難所が、8月15日で閉所とするなか、熊本市総合体育館だけは閉所日を9月15日とした。その時点で、まだ130人ほどの方が避難しておられ、生活の再建の道筋を立てるのにそれなりの時間が必要だと考えたからだだった。

4 後期の業務（避難所閉所の決定から閉所まで）

避難所の閉所が決まってからは、私は避難所の運営要員としてではなく、生活再建の相談員として専従することになった。それまでも、運営の職員が日によって交代することでの支障があったため、避難所におられる方全員の再建の道が決まるまで、投げ出すことはできないと思った。まずは、一人ひとりに聴き取りをし、再建の方法を考えるとところから始めることになった。

聴き取りにあたる職員は、最初の数日間は東部まちづくり交流室と西区まちづくり推進課から手伝ってもらったが、後には、私と社会福祉協議会の職員7名（この方々は、後に仮設住宅の管理業務をされることになる）であった。昼間は仕事で避難所にいない方や、ご高齢の親御さんだけが避難され一人では先の事が決められない方などがいらっしやり、相談に来やすいよう夜間まで対応した。それぞれの方が、生活再建がなかなか進まない原因が何かを確認し、一つ一つ解決していくしか方法はない。住家の損壊が原因であれば大家さんに直接会いにいたり、精神的な不安で家の中に入ることができればいっしょに家に入ることから始めたり、家の片付けができなければ手伝いにいたり、あらゆることをやった。朝、自宅から避難所に出勤し、昼間は区役所で本部業務や通常業務をし、夕方また、避難所に寄って帰るという生活を閉所するまでの約2ヶ月間行った。避難されている方々とも、よく雑談をするようになり、時には「子どもが待ってるやろうけん、早く帰らんね。」など声をかけていただいた。

9月15日の閉所日を迎える頃には、何とか全員の次の生活の目処が立った。9月14日、避難所最後の夜は、NHKで熊

本城再建の特集番組の放映があり、避難所のみなさんと観賞した。避難されていた方のお一人が、長年、心の拠りどころとされている熊本城の写真を撮り貯めておられ、そのことと避難所での生活の様子を、事前に取材されていたからだった。番組では地震の前の熊本城と桜の写真を、避難されておられる方々が観賞されている様子が映し出された。熊本城の再建が、明日からのそれぞれの新しい生活を後押ししてくれるようで、最後の夜にふさわしい内容だった。

5 終わりに

地震発生から避難所閉所までの5ヶ月間、無我夢中で業務にあたった。子どもの誕生日も祝ってやれず、運動会も見ることができなかったが、私の代わりに面倒をみてくれた母にとても感謝している。地震直後、職場の駐車場の車の中で子どもを過ごさせた職員もいたと後で聞き、自分はとても恵まれていたと感じた。もう一つ、組織改編でなくなってしまったが、この大変な時期を共に乗り越えた東区役所まちづくり推進課の職員に

も賛辞を贈りたい。

地震発生から、間もなく3年を迎える。今は、新しい職場で、日々復旧する熊本城を見ながら仕事をしている。早く、また、天守閣から復興した熊本の街並みを眺めたい。



復旧作業中の熊本城（H29.4.9撮影）

熊本地震を振り返って

所 属	西区役所保健福祉部保健子ども課 (保育幼稚園課)	職位	主査	氏名	小崎 美知子
-----	-----------------------------	----	----	----	--------

1 前震時 ～ 《災害は突然やってくる》 ～

平成28年4月14日。私は、息子（当時中学3年生）の塾の迎えで水前寺のスーパーに居た。9時過ぎとなり、塾が終わった息子と合流し、同じころ、残業が終わった夫もスーパーへ現れた。しばらくすると、立ちくらみかという感覚に襲われた。その後、けたたましい携帯音と夫の「蛍光灯の下は離れる」の言葉で地震であることを認識した。自分の身に起こったことであるが、現実であることの認識が不確かであった。ただ、娘（当時高校3年生）も塾に行っていたので、連絡を取ろうとした。しかし、電話が繋がらないことに徐々に大変なことが起きているという焦りと不安が生まれてきた。スーパーの中は、割れたビンから様々な液体が流出し、それらが混ざり合って異臭を放っていた。そのような中、レジが1台のみ稼動していたため、客は列をなし、声を掛け合いながら、避難していた。そのうち、娘とも連絡がつき、私も夫も上司と連絡ができ、それぞれ役割分担を決めた。当時、夫は教育委員会勤務、私が西区役所勤務であった。そのため、勤務場所が遠い私は先に勤務場所へ向かい、娘の迎えは夫が行くこととした。

この日のことを振り返るたびに、子どもたちには申し訳なかったと思っている。子どもたちは二人とも大きかったとはいえ、子どもだけ家に残し、両親とも出勤したのである。親の仕事に対し、子どもが理解していることに感謝しかない。

2 避難所巡りなど ～ 《想像以上の避難者数》 ～

西区役所保健子ども課に着くと、課長から班員の安否確認の指示があり、出勤してきた職員と手分けして連絡をとった。す

ると、「自宅の壁が崩れたので、近くの公園に居ます」や「家に居れないので、車に避難してます」との声を聞き、被害の大きさ、地域による被害差を感じてきた。そのうち、総務企画課を中心に被害状況や避難状況を確認するため、チームが結成された。保健師と事務職でチームを作り、避難所を巡回した。指定避難所となっている小学校や中学校に行くと、体育館には入らず、校庭に自家用車を止めている方、私物の TENT を張っている方、毛布に包まってうずくまっている方など、想像以上に多数の人であった。区役所職員であることが分ると、「シップがほしい」、「頭痛薬がほしい」「熱さましがほしい」と医薬品についての問い合わせを数多く受けた。私たちは、各避難所に避難されている人数を概数で把握し、総務企画課へ報告して、次の避難所へ向かうことを繰り返した。そのうち、朝になり、医療機関の開院状況の確認などを行った。

3 本震時 ～ 《そして想定外の大地震》 ～

平成28年4月16日。少し落ち着いてきたので、自宅へ帰った。夫は水防本部待機当番で不在であった。久しぶりに自宅で眠ったからか熟睡しており、本震の揺れというより、携帯電話のサイレン音で目が覚めた。疲れがあったためか、ぼんやりしながら揺れている間に自宅の階段を降りた。すると、夫からの安否確認の電話があり、大丈夫だと答えた。子どもたちの様子を確認すると、娘は（あの揺れの中）熟睡中、息子は「揺れたね」の一言であった。すると、息子は当たり前のように「おかあさん、急いで行かなきゃ」と言った。この息子の頼もしい言葉に押され、私は急いで準備をし、西区役所へ向かった。

4 津波警報 ～《まさかの警報発令》～

この日、西区には津波警報が発せられ、西区役所に近づくにつれ想像を超える渋滞であった。なんとか契約している駐車場に車を止め、急いで保健子ども課に向かうと、階段はもとより執務室内にも市民の皆さんが避難されていた。避難所として開放されていた西部公民館は1階なので、津波警報を受けて少しでも高いところにと3階の保健子ども課に殺到したようである。ほどなくして、警報は解除されたものの、市民の皆さんは疲労困憊のようで、あまり動けない様子であった。

5 避難所運営など ～《同じようにするとは》

避難所運営で困難だと感じたことは「平等」である。例えば、パンが支給されたとき、一人ひとつが「平等」に配布かというところ、そうではなく、様々な意見が出てくる。体格の差であったり、年齢差であったり、大人と子どもであることなど、「平等」に配布することは大変困難であった。また、避難所のルールとして、飲酒をしない、ペット不可などを伝えても、全ての方が快く受け入れていただけるわけではなく、御理解いただくことが困難であった。しかし、集団生活なので、一定のルールは必要であり、根気よく説明していかなければならなかった。避難

所によっては、地域の方が中心となり、ルールを周知し、整然と運営されているところもあった。

また、しばらくすると避難所に居る子どもたちが中心となり、お弁当の配布や掃除を始めていた。子どもたちにとって、今回の経験は、つらいことも多かったであろうが、成長したことも多かったと思う。

6 終わりに ～《この経験から考えたこと感じたこと》～

私は、子どもが自立している状況であったので、仕事へ専念することができたが、子どもが幼い職員の場合は、難しかったであろうと思う。仕事にいかねばならないという責任感と、子どもを置いていけない心の葛藤に苦しかったとの声も聞いた。職務の内容にもよるが、子どもを持つ職員がこの苦しみを感せず過ごせるようになることが望ましいと感じた。

また、避難所の運営についても、災害対策本部からの情報共有についても、当時は手探りであったため分からないことが多く、困難であった。しかし、様々な職種が各々の得意分野を生かして協力することによって乗り切れたと思う。

やはり、困難時には、個人で考えるより、チームで意見を出し合い、協力することが大事であると思った。

避難所について

所 属	北区役所まちづくり推進課植木まちづくり交流室 (固定資産税課)	職位	参事	氏名	岡山 文江
-----	------------------------------------	----	----	----	-------

1 前震

4月の定期異動後の熊本地震。女性職員は嘱託職員も含め私一人であった。その時、帰宅の準備をしている最中で、植木文化センターの事務所には夜間管理人と私の二人。管理人は「公民館の利用者の安全確認をします。」と即座に見回りに出て、各部屋の利用者が安全に帰宅されたことを確認。私は上司へ報告。その日は近くで植木地区校区自治協議会の歓送迎会だったため上司等3人事務所に駆けつけられた。揺れが激しかったため待機（避難所開設のため）の必要がないか北区総務企画課に確認したが、まだ連絡がないとのことで、状況確認後全員帰宅した。

私は何となく虫の知らせがし、一旦帰宅したが事務所へ戻ってみようと近くまで行った。すると建物全体に電気がつき、近くに住んでいる職員が避難所待機で一人奔走していたため、私もそのまま待機した。また、一旦帰宅した職員3人も北区内の各避難所へ向かった。当時の正職員数は9人。そのうち3人が他の避難所へ派遣。自ら管理する施設が避難所になっているにも関わらず・・・。

2 本震

今度こそ、ただ事ではない。家族と近くに住む叔母の無事を確認。避難所待機している2人の職員へ連絡しようとしても電

話が通じない。こんなときは、出勤するしかない。すでに3人の職員が駆けつけ5人で避難所の対応に追われていた。施設の各部屋、施設駐車場、隣接する芝生広場に多くの方が避難され、トイレの利用や暖を取るため、施設内はごった返していた。幸いにも当施設は被害も少なく、地震直後でも電気ガス水道の使用は可能であった。

3 避難所での対応

～(1) 衛生面～

ある時、ノロウイルスが流行しているとのことで漂白剤等が配布された。衛生面への配慮は、不特定多数の方が避難する場所では重要だ。だが、当避難所は交替事務となるため絶対的に職員数が足りない。その頃は仙台市から職員数名の応援があり、その中に女性保健師が1人。その方が率先して手すりやトイレなど人がよく触る場所を漂白剤を使った濡れ布巾で最低1日一回は拭いて回られた。しばらくして清掃委託職員が出勤されるようになり、漂白剤を使用して日頃の清掃作業を行ってもらった方法をとった。

避難者の健康管理面及び衛生面等については、市民病院の看護師が配置されたのを機に役割分担ができた。

～(2) 食事～

何日目だったろうか。避難者のために植木共同調理場でご飯を炊き、塩と小分けできるビニール袋と共に大きなビニール袋

(たぶん3升ぐらい入っていたと思う。)にご飯を入れて配達してくれた。何袋あったろうか。ありがたかったが、「これいっ
たいどうやって分けよう。人手がいる!」と。女性職員は私一人。避難者の協力を得、男性職員と一緒に小分けにした。恵まれた施設(広い調理室、電気、水道、ガスも利用可能。)であり、作業も手早く進んだ。袋から大きなボールにご飯を移し、塩を振り入れ混ぜる人。お椀にビニール袋の内側を外にしておく人。そのものを十数個用意する人。そこに先ほど混ぜたご飯をよそ人。ご飯が入ったお椀からビニール袋ごとはずす人。配布できるようにお盆に並べ配布する人と、役割分担し、流れ作業でスムーズに配布することができた。この方法は、一人分を手早くある程度均一に配分でき、作業効率がよく、また直接食品に手を触れないため衛生的である。食べるときも手が汚れない。また、後日配食されたカレーライスや丼物のご飯を一人分ずつ大量によそう際や汁物にでも大いに活用できた。社会教育団体での野外活動の経験を生かした。経験も「そなえよ つねに」である。

しばらくすると、食事の準備にも植木町に居住される方(生活改善グループの方を中心に)が、ボランティアとして積極的かつ長期にわたってご協力いただいた。感謝しても感謝しきれない。大変お世話になった。また、多くの方から避難所へ物資の提供もいただいた。本当にありがたかった。私も夜間待機明けはボランティアとして昼食の準備をして帰宅。仮眠をとり夕食の準備に避難所へ通った。緊張していると疲れもあり感じないが、長丁場ともなるとその疲労は蓄積される。

～(3)他都市の応援～

ちょうどその頃、仙台市から第2班として女性2人を含め応援いただいた。東北地震の経験を生かして本市職員の指示を待つことなく、自然に手を差し伸べ協力いただいた。避難所運営には多くのアイデアの提供。特に拠点避難所の大規模な部屋割りのための設計図を作成後、段ボールを使っの部屋割り作業など、絶大なる知恵と労力の提供支援であった。また避難者への自立支援へ向けた準備にも経験を生かした支援をいただいた。ある意味「お任せ」していた点が随分あったと思う。施設職員全員、心身ともに助けていただき、私は別れ際に恥ずかし

ながら思わず嗚咽し、上司や同僚にもそれが伝染してしまったほどである。本当に感謝している。振り返れば精神状態も極限だったのかもしれない。

～(4)自立～

そんな中、仙台市最後の班の撤退が決定。それは恐怖でもあった。自分たちだけでうまく避難所運営できるか。すでに植木文化ホールは6月1日から再開しており、夜間待機できる植木まちづくり交流室職員(以下、「施設職員」という。)の数も減った。残った施設職員と北区区民課職員と協力して夜間の施設管理も含め対応しなければならない。そのためにも1日がどんな流れでどのように職員が動けばよいか。またそれ以外の応援職員が交代で対応することになるため、施設職員、仙台市職員及び看護師と協議し、何をしなければならないのか一日の行動が時系列で分かるように表を作成した。また、交代で待機する職員が共通理解・共通認識で対応できるように看護師が行っている申送りを取り入れ、施設職員が簡単な申送り書(これまでの申送り書に特記事項を追記していくようなもの)を作成し、朝夕の交代の際にこれから待機する職員全員に対し申送りを行うように取り組んだ。それからは、これまでよりもさらに共通認識で行動でき、他局からの応援職員も戸惑わずに行動してもらえたのではないかと考えている。また、食事に関しては本部への物資発注と在庫管理をしやすくするため献立表(準備物)を作成した。

4 終わりに

比較的被害が少ないと言われていた地域の植木文化センター避難所だったからかもしれないが、これらの経験を通して、少なくとも拠点避難所においては、常駐し施設管理する職員(同じ顔が常にそこにあり安心していただける。)が中心となって避難者と応援職員と協力しながら、一丸となって避難所運営を行うことが最善の方法であり重要ではないかと、その時私は感じた。

最後になりましたが、今でも仮設住宅やみなし仮設での仮の生活を余儀なくしておられる被災者の皆様に心からお見舞い申し上げます。また、避難所運営にご協力いただきました他都市職員の皆様、ボランティアの皆様に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

新採で大震災を体験して

所 属	北区役所区民部区民課	職位	主事	氏名	續 真菜
-----	------------	----	----	----	------

1 前震・本震

入庁して約二週間後、新規採用職員研修が終わったその日の夜、熊本地震の前震が起こった。研修が終わり、翌日からの配属先での初仕事に備え、自宅で早々に眠っていた私に、大きな地震の揺れが襲ってきた。いままでに経験したことのないほどの大きな揺れで飛び起きたが、家族にはケガはなく、家の被害も小さかった。

地震の直後から同期とはライングループで連絡を取り合っていたが、その中で「可能な人はできる限りそれぞれの職場に向

かう」ということになった。というのも、新採の研修で「震度5以上の大きな揺れがあった場合は職場に参集する」ということを学んだばかりだったからである。そのため私は家族に見送られながら、配属先が同じ同期とともに車に乗り合わせて区役所へと向かった。区役所に到着後は、区の災害対策本部で電話番を行った。まさか配属先での初仕事災害対応になるとは研修時には思いもなかった。最初は電話の取り方もままならなかったが、鳴り続ける電話をとにかく無我夢中でとり続けた。そうこうしているうちに明け方近くになり、帰宅の許可が出たため、一度自宅に戻った。

そして翌日、配属先は区民課だったため地震の直後ではあるが通常の窓口業務を行った。初めての仕事と前日の震災の電話対応で緊張していたこともあり、その日も帰宅後すぐに眠りについた。そんな中、前日以上の大きな揺れを感じて目が覚めた。その直後、食器が戸棚から落ち割れる音が家中に鳴り響いた。私も母も恐怖でお互い抱き合っ、揺れが収まるのを待った。停電していたので、真っ暗な中何もできず、とても不安な中夜が明けるのを待った。自宅は荒れ放題だったが、父と母の協力と応援もあったので、翌朝すぐ自宅から一番近い避難所に運営のために向かうこととなった。

2 避難所

避難所に到着するとすでに施設管理者の方が、避難者を中に誘導しているところだった。当初、市職員は私一人だったため、とても不安だったことを覚えている。「市役所に職員になったばかりの私に何ができるんだろう。」という思いがあったが、すぐに「誰も経験したことのないような地震なので、職員としての経験年数は気にしないで、今自分ができることをしよう」と思い直し、避難所対応に取り組んだ。

余震が続く中だったため、身の安全を確保することを第一に地震速報が鳴ったら避難者みんなで声を掛け合い、避難所である体育館の外に出て、揺れが収まったら中に戻ることを何度か繰り返した。幸い避難者の方は協力的で、こちらの指示には快く従ってくれた。

しかし午後になると、翌日の大雨予報による土砂災害の恐れからその避難所は閉鎖されることが決定した。その頃には私の他にもう一名職員が駆けつけてくれていたため、2名で避難者の方に「避難所が閉鎖するため、近隣の小学校に移動してほしい」という旨の説明をして回った。必死の思いでこの避難所に避難されている方に避難所閉鎖の案内をするのは本当に心苦しかったが、ほとんどの避難者は納得されて小学校へ移動してくれた。

そんな中、ある高齢者の避難者の方から「お前たちは俺に死ねといっているのか!」という怒号があった。その方は避難所の近くに住んでいたため、「避難所が閉鎖され自宅に戻っても土砂崩れが起こるなら巻き込まれてしまう、他の避難所へ行くにも大変だし今更だ」ということだった。こちらとしても「このままでは避難所での安全が確保されない恐れがあるため、他の避難所で安全に過ごしてほしい」という思いから説明を行ったが、とうとう納得はされないまま避難所から出て行かれた。その後の長く続いた熊本地震の避難所対応のため、この避難所の他にいくつかの避難所を回ったが一番後味が悪い思いをしたのはこの経験だった。今思うともっと寄り添った対応をしたほうが良かったと悔やまれる。

夕方頃には、避難者は全員避難所を後にし、避難所を閉鎖した。

3 震災を経験して

この震災を通して、「公務員としての責任感」を強く意識した。地震が起こる約2週間前までは学生だったこともあり、「今までは守られる立場だったが、公務員になり何かあったときに自分は人を守る立場になったんだ」という思いを避難所対応でひしひしと感じた。右も左も分からない状況での地震対応ではあったが、その経験があったからこそ公務員としての自覚を持つことができ、その後の通常業務も引き締まった気持ちで取り組むことが出来ている。

地震がおこり、震災対応ではつらいこともあったが、被災者からのあたたかいねぎらいの言葉をいただくこともあり、それはとても励みになった。後日談ではあるが、避難所で出会った妊婦さんのお子さんが生まれ、出生届の受付をしたときにはとても感慨深い思いをしたのを覚えている。

「地震がなければ・・・」と思うこともあったが、地震があったからこそ学びや成長があった。この体験を糧に今後も職務を全うしたい。



「物資・給水」



のこと

熊本地震を振り返って

所 属	市民局市民生活部地域政策課	職位	参事	氏名	藤崎 千春
-----	---------------	----	----	----	-------

1 あらまし

今回、少しでも今後の熊本市の役に立つことを書き残したいのだが、それまでとかけ離れた生活や業務に毎日必死で対処していたためであろうか、記憶はかなり曖昧だ。その中で、私があつた主な業務「発災直後の全国からの支援物資の受け入れ」「避難所の食料・物資の調達」について書かせて頂く。

2 発災時の状況

平成 28 年当時、私は夫の職場が福岡市内だったことから、福岡県久留米市内のマンション住まいで、熊本市役所までは新幹線で通勤していた。遠方なので、帰宅は夜 9 時を過ぎることも多々あったが、4 月 14 日の夜はたまたま帰宅し自宅にいた。リビングで大きな揺れを感じ、まさか遠方の熊本で起きた地震とは思っていなかった。テレビの速報を見て咄嗟に、実家の年配の両親のことが案じられ、電話をかけるとひとまず安全が確認できた。このとき、久留米のマンションの揺れはそう大きくなく、あまり実感していなかったように思う。テレビの報道等で事の大きさを知り、数年前に関東で経験した東日本大震災のことを思い出した。あの体験が一つのきっかけとなり、故郷に帰って生まれ育った地元で働きたいと思ったのだ……。そうこうするうちに、市役所内に残っていた当課の同僚から安否確認が入った。市庁舎現場は大きな混乱だったと想像するが、落ち着いて対応している模様だった。参集にあたり、自家用車を持たないため、公共交通機関ではいつ到着できるか予想がつかないことを報告した。

翌早朝、新幹線は不通。どうにか熊本市内へたどり着く手段を調べたところ、普通列車で大牟田方面まで行き、山鹿を経由して路線バスを乗り継いで行くしかなかった。日頃は新幹線で 1 時間程の通勤が、この日は朝家を出て市役所にたどり着いたのは昼をはるかに過ぎていた。苦労したが、この後の本震で交通経路はさらに重大な被害を受けたことを思うと、この日熊本に入っておいてよかったと後日思った。

3 発災後の混乱と物資調達について

15 日午後職場に着くと、市民局は支援物資の受け入れを担当しており、職員は夜中、各避難所へ備蓄倉庫から物資を配送する業務等に必死にあたっていたことを知った。残る職員は、全国から送られてくる支援物資に関する電話に対応しており、私もそれに従事することになった。この日はひっきりなしに鳴りやまない電話に夜中まで対応し、疲労困憊の中熊本市内の実家に戻った。「やっと眠れる」と階段を上がり、狭い踊り場から和室に入ろうとした瞬間、本震が襲った。築 40 年近い木造の 2 階は激しく揺れ転んだ。和室の内壁は崩れ本棚は倒れてきている。階段から転げ落ちないように手すりに必死につかまり、生まれて初めて「死ぬかもしれない」と思った。一旦揺れが収

まると、真っ暗な中、近所の方たちが心配して来てくれ、家の前の車に両親を乗せるのを手伝ってくれた。老いた両親と同居していない自分は、この時地域の心強さを心底感じた。

次の日から、私は全国からの支援物資受け入れ、物資の避難所への配給の連絡等に携わることとなった。発災直後は特に、これまでに経験したことのない避難所と避難者の数に対し、全国から届く大量の物資を、要求に合うように十分かつ速やかに配給できなかったことは、皆様の知るところである。当時現場では、錯綜する情報の中「正しい情報」を収集し調整する本部的な機能がいかにか大切かを感じていたが、このときの本市の経験は、今後の物資の備蓄・供給体制や計画の整備に反映されていくものと思う。

当初、避難所の食糧・物資は支援物資が中心だったが、4 月下旬には当課で一括して食糧、生活物資を調達することとなった。最後の拠点避難所が閉鎖される 9 月中旬まで、初めはおにぎり、パン、野菜ジュース、缶詰など、次第に長期化する避難生活の栄養面に配慮し、弁当も配給した。発災時は肌寒さが残るところだったが、夏を迎え、クーラーなどの環境整備も必要となった。避難者の方々の避難所での生活のニーズに少しでも沿うよう、約半年、本当に大量かつ多様な食糧や物資を調達した。そうしながら、避難所運営職員としても交代で勤務した。

4 終わりに

これを書いているつい先日、年末年始の休暇最終日の 1 月 3 日には、熊本を震源とする地震が発生、北区では震度 5 弱が観測された。私はこのとき、中央区にいたが、たまたま手元に携帯電話を持っておらず、初動の状況確認が遅れてしまった。改めて、常日頃から公務員である自覚を強くもち、予測不能な事態にいつでも対応できるよう気を引き締めたいと反省した。

支援物資班と連携した栄養士活動

所 属	北区役所保健福祉部保健子ども課	職位	技術主幹	氏名	猿渡 秀美 (管理栄養士)
-----	-----------------	----	------	----	------------------

1 発災時 ～ 前震 ～

中央区の自宅マンション3階にて、地震きとともにすごい揺れ。「地震だ。ほんとにきた。私が助けてもらう番になった。」幸い、家族4人とも自宅におり、これより強い余震は来ないだろうと思い、そのまま自宅で過ごす。揺れる度にパソコンとプリンターをムダに押さえていた。

翌日、車の運転ができない私は、バスにて北区役所へ出勤。東日本大震災の派遣先の南三陸町の栄養士から、心配している旨のメールが届いた。無事のメールを返す。夕方、日曜に出勤する旨を約束し、帰路につく。途中、乗った市電はスカスカで、街も閑散として、まるでゴーストタウンのようだった。

2 発災時 ～ 本震 ～

「え、余震の方が大きいのか？こんな揺れ方するんだ」冷蔵庫からも、物が勢いよく飛び出してきた。呆然としている家族とリビングに集合。当時、夫は市民病院の調理師の業務長。栄養管理室長の「家から出られない」との連絡を受け、頭を多少でも保護できればと毛糸の帽子をかぶせ、自転車で市民病院へ向う夫を見送った。

私は、同僚たちとメールにて無事を確認し合ったものの、気が動転しており自宅の周りを徘徊するのが精一杯。すでに近所の小学校には、熊本市職員の仲間たちががんばって働いていた。公共交通網が機能してないため翌日日曜の出勤も果たせず、月曜日の出勤となってしまう悔やまれた。

3 月曜日職場にて

幼児健診延期の連絡をはじめ業務に追われた。その日は、そのまま翌朝まで北区の対策本部に勤務した。この時、本部や物資担当部署と顔見知りになったことがその後の力となった。

平素から栄養士職能力向上研修等で災害時の食事について学び、東日本大震災では、南三陸町へ栄養士として派遣され実際の活動を経験していた。その経験上、避難所の食事は、塩分、脂質、糖質過多で、たんぱく質やビタミンミネラルが不足することが容易に想像できた。

4 避難所へ ～ 栄養士としての活動 ～

発災当初から、保健師チーム等からは「栄養面での緊急対応者はいない」との報告を受けていたが、避難長期化による栄養の偏りへの備えとして、また回りに遠慮して言い出せない避難者がいるのではないかと思います。直接避難所を回ることにした。栄養相談の連絡先を入れたポスターを準備し、ビブスの上に養生テープを貼り「北区栄養士」とマジックで書いて身につけ、まず楠小学校に向かった。ポスターを貼ったり、備蓄の状況を見たり、避難所の方に直接声をかけることができた。

当初は、各避難所から請求されたものが届けられていたためか、避難所によって備蓄食品にも差があった。

そこで、北区本部からビタミン補給のため野菜ジュースをさっそく請求した。

5 支援物資班との連携

発災当初から続々と北区役所に届く支援物資。どこに何があるのやら。助っ人の宅配業者の方がみえてからは、見る見る仕分けが進んでいったように思った。

幸い、担当課長は、2人とも私の同期、私の意図も汲んでくれ、必要なものを持ち出す許可を得た。日頃からの連携は大事である。避難所巡回時に、車に果物の缶詰や幼児食等の野菜スープ、魚の缶詰、ソーセージ等をあらかじめ積んで、不足していそうなところに配布できた。ある日、宅配業者の方が、「ご飯をとりに来た人に、一緒にソーセージとか果物の缶詰も渡したよ。」と報告してくれた。理解者がまた1人増えたと嬉しかった。

6 避難所勤務の経験 ～区役所職員として～

区役所職員として、清水小学校に何度か泊まった。静岡市職員、小学校教諭や地域の役員・ボランティアらと活動した。静岡市の方から「我々は、小さい頃から南海トラフが来ると教育を受けてきた。今回は予行演習と思っているので鍛えてほしい。だが、熊本市は、認識が甘かったのでは。」との言葉。ありがたいやら、そして反省もしきり。夜もまだ、余震が続く。眠れないという方に寄り添い、家族に迷惑をかけるからと病院受診を渋る方に受診を説得した。ノロウイルス対策もかねてトイレを何度も清掃した。

7 食生活改善推進員との活動

バランス弁当導入が遅れている中、野菜不足解消のため、野菜の一品料理を2回、食生活改善推進員と協働で、龍田公民館で調理し避難者へ普段の食事と一緒に配布。感謝された。食生活改善推進員さんの中には被災された中での活動であったのに、自分の地域での開催を逆に感謝され、ボランティア精神に頭が下がった。

8 この経験をどう生かす

避難所の栄養管理において、大事な役割のひとつに栄養量の検証がある。日々の業務に追われ、他都市の栄養士の援助を断ってしまったこともあり、きちんとした解析ができなかったことが今となれば悔やまれる。今後栄養管理の受援体制についても熊本市の「災害における保健活動初動対応マニュアル」に追記していきたい。

また、平成30年度から、北区まちづくり推進経費で「防災

食育らくらくクッキング」事業を開始した。有事の際における衛生面・栄養面に配慮した食生活のすすめ。「自助・共助・公助」での「自助」としての備蓄の推進。「共助」として地域の防災組織等との連携。そして親子での楽しい調理実習を実施し、次世代への伝承を行っていく。毎回好評で、手ごたえを感じている。



「罹災証明」「住宅」「震災廃棄物」など支援



のこと

被災者支援情報を伝える

所 属	政策局復興部復興総務課 (復興総室)	職位	主任主事	氏名	伊藤 恵美子
-----	-----------------------	----	------	----	--------

1. 熊本地震

熊本でこんなにも大きな地震が起こるなんて驚きとともに、前震直後、どうしたらよいか分からないまま市役所に向かった。そして、さらに前震から 28 時間後、一段落して仕事から帰って休んでいた時に起きた本震。まさか 2 度目があるとは思わず、揺れが収まるのをただただ願いながら待った。完全に揺れが収まるまで待てず、今回はしばらく帰れないかもしれないと思い、着替えや食料を詰め込み、ブレーカーを落として懐中電灯を頼りに歩いて出勤した。

出勤途中、通町筋からはいつも見える熊本城の天守閣が暗闇に溶け込んで見え、急にそれまでなかった不安に襲われた。その後、執務室で朝を迎え、天守閣が堂々と姿を現した時に安堵したとともに、頑張れる気がしたのを、いまでも覚えている。

この手記では、4 月 14 日の発災後、事業者向けの「り災証明書」の発行や復興部の職員として被災者支援の広報業務に携わった経験の中での気づきや反省を記載する。

2. 被災者の声

発災当初は、商業金融課に所属し、事業者向けの「り災証明書」を発行していた。これまで水害、台風被害での発行経験はあったが、年に数件程度の発行で、窓口が混乱するほど対応に追われたのは、初めてのことであった。朝 8 時過ぎには窓口前の通路に行列が出来ており、その状態が夕方閉庁時間を過ぎても続いた。毎日一日中、発行業務をしている中で、ある被災者の声がその後の自分の災害対応における基本スタンスとなった。

当時、り災証明書は、申請者に原因となる災害とその発生日時や、被害の状況を記載してもらい、写真で申告内容に相違ないかを確認し、即日発行する方法をとっていた。

ある申請者を対応した際に、「書類の字が読めなくて…」と恥ずかしそうに相談された。その申請者は、避難所に寝泊まりしているためか、だいぶ疲れが溜まっている様子だった。「頭が働かず字が読めない」、「何をどうしたらいいのか、分からない」、そんな訴えだった。

書類を提示して、読んでもらい、記入してもらえばいいと当然のように対応してきたことが、配慮が足りず、逆に恥ずかしく感じた。その方は、熊本市が発行した「被災者支援制度」を手元に持っていたが、その内容も読んでいなかった。とにかく、情報は欲しいから手に取ったものの、内容は伝わっていなかった。

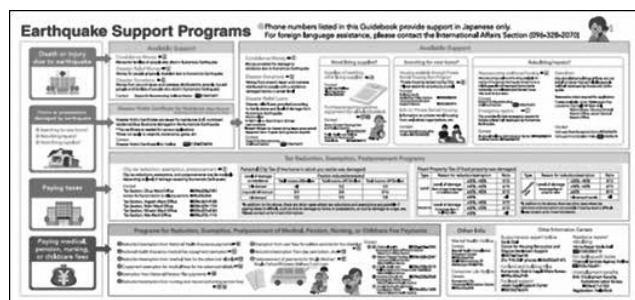
この申請者にどうしたら、情報を伝えられるだろうか。この方だけでなく、同じように悩んでいる人が必ずいる。その人たちに、情報を理解してもらわなければ復旧・復興は進まない、と思った。

3. 「伝えたい」思いから「伝わった」とき

先の被災者の声を聴いてから、どうしたらいいかと悩んでいた中、復興部が発足し、異動となった。異動後の最初の業務は、何をしなければならないかを自分で考え、事業計画と予算案を作ることだった。地震関連の広報担当となった私は、悩んでいたことがそのまま仕事につながるチャンスだと思い、仙台市の取組を参考に、広報紙の作成を計画した。

行政情報は、広く市民全般に向けて制作するものが多いが、今回はターゲットごとに 4 種類の広報紙を作成することとした。イメージしたのは、自分の祖父母世代向け、会社員など日常的に書類を見慣れている人向け、避難所で生活している人向け、支援制度とともに地域の情報もほしい人向けなど、具体的に対象者を設定して広報紙を制作することとした。

まず、自分の祖父母世代には、説明が多過ぎると読んでもらえなかったり、かえって分かりにくかったりするため、イラストを多用し、制度概要を伝えるリーフレットとした。



英語版のリーフレット

日本語が読めない外国人にも対応できると考え、英語、中国語、韓国語の 3 か国語に翻訳し、外国語版も発行した。

書類を見慣れている人向けには、市役所に問合せなくても、一度で手続きが済むように必要書類や手続きを詳細に記載し、「何をしたいか」目的別で探せるようにした。ホームページに掲載した PDF 版には、データ内にリンクを貼り、さらに検索しやすくした。これも最初に掲載したページを見た被災者から「探しにくいからリンクを貼ってほしい」との声を受けて、少しずつ改善していった。

避難所に避難している人向けには、「避難所だより」として避難所生活ならではの注意喚起や、支援内容を掲載し、避難所へは、物資を配送する業者をお願いして物資とともに配送してもらった。

最後に、第 1 号の発行が平成 28 年 12 月と遅くなったが、市政だよりに折り込んで全戸配布を行った「復興だより -Hi. Go!!-」。支援情報の発信とともに、地域や人々を元気に出来ればと思い、地域の復旧・復興の様子を発信する媒体を作った。

紙面のほかにも、文字では情報入手が困難と思われる方に向けて、「声の復興だより」としてラジオでも情報発信を行った。毎週放送し、被災者支援情報を速やかに、かつ正確に伝えると

[illegible]

まだまだ、改善すべき点は残っており、被災者全員に支援情報が伝わったわけではないが、自治会長をはじめ多くの方々の伝達力があってこそ、行政の情報は伝わっていくのだと感じた。

熊本地震では、辛いこともあったが、とても貴重な経験となった。自ら被災しながらも市職員である私の心配までして下さった被災者の方々、広報に協力して下さいました地域の方々、取材やイベントを通じて出会った多くの方々、そして、「とりあえず、やってみる!」という私を見守って下さった上司、意見を出し合った同僚など、熊本地震が起ったことでつながった多くの方々に支えられてきた。改めて、感謝の気持ちを伝えたい。

熊本地震を経験して					
所 属	政策局復興部生活再建支援課 (復興総室)	職位	主幹	氏名	横田 直子

翌日は、避難所運営にあたる者、職場に残る者に分かれ、私は職場に残り建物内の被害状況の確認や散乱した職場の後片付けにあたった。

津波注意報が解除され、自宅へ戻ると、職場から参集の連絡が入り真っ暗の中職場へ向かった。しかし、途中で、一旦自宅待機するようにと再度連絡があり、自宅へ戻り夜が明けてから

職場へ向かった。

熊本城のそばにあった職場は、崩落した熊本城の石垣が建物の目の前まで迫っていた。室内には、書類が散乱し、机の上のパソコンも落下し、倒れた書棚でドアが開かず中に入れない部屋もあった。この地震が昼間だったと思うとぞっとした。この本震の揺れによって、職場の古京町別館は倒壊の恐れがあるということで立ち入り禁止となり私たちは本庁6階に間借りすることとなった。

間借りした6階では、地震により中止となる職員研修の連絡対応に加え、人事課へかかってくる職員や他都市からの問い合わせの電話対応に追われた。

そんな矢先、発災から約3週間後の5月6日に、被災者の生活再建支援に係る業務を可能な限りワンストップサービスで行うとともに、災害復興事業を統括するための組織として、政策局内に3課からなる復興部が新たに設置され、その一つ「生活再建支援課」へ異動となった。

3 復興部生活再建支援課へ異動

生活再建支援課では、支援を待っている被災者の方へできる限り早く対応するため、5月6日の辞令交付から約10日間という短期間で各区役所などに被災者のための支援の申請受付・相談窓口である「総合相談窓口」を開設するという一方で、課内全員で毎日遅くまでマニュアルや申請書類の作成、端末などの情報機器の確保のため関係課との調整等、窓口開設の準備に追われた。

初めての経験に戸惑うことばかりであったが、早々に、東日本大震災の復興に携われた仙台市職員の方から直接レクチャーがあり、東日本大震災の体験からの助言と仙台市から提供いただいた発災から1年間の活動等を記録した震災記録誌が非常に参考となった。仙台市職員の方からは、「先は長いです。体力勝負なので体調に気を付けて」と労いの言葉をいただいた。その言葉どおり発災から約3ヶ月間休みなく勤務する日々が続いた。

各総合相談窓口は、再任用を筆頭に事務職の他、被災し一時休止となった市民病院の看護師で対応することになり、開設直前に窓口研修を行い、何とか5月17日の総合相談窓口開設までに態勢を整えることができた。

り災証明発行窓口と同時に総合相談窓口が開設されると、支援を待っていた被災者の方たちの申請や相談で窓口は混雑し、徐々に窓口対応の看護師の人員も増えていったものの、5月26日から新たに総合相談窓口を開設することとなった託麻総合出張所や対応が追いつかない区役所の総合相談窓口には、急速、生活再建支援課から班員に応援に行ってもらった。

総合相談窓口開設後、暫く総合相談窓口では窓口職員が昼食を取る間もなく窓口対応にあたり、また、市役所14階大ホールは中央区総合相談窓口の他、都市建設局や環境局が所管する窓口と合わせ、法律相談など専門相談が一体となったワンストップ窓口となっていたため、混乱する大ホール入口の前裁きのために同じ復興部内の復興総務課に案内整理をしてもらった。本来の業務があるにも関わらず協力してもらったことに、地震とともに新たに設置された復興部の連帯感を強く感じた。

4 最後に

発災から約3ヶ月もの間休みなく多忙な時期を乗り越えられたのも、職場の皆がまとまり協力し合えたことはもとより、80代の両親が高齢でありながらも自立できていたため安心して復興の仕事に専念できたことである。しかしながら、熊本地震から2年半以上が経過した今、80代半ばとなった両親も足腰が弱り、父は杖歩行となった。今回のような地震がまた発生すると、避難所担当となりいち早く避難所へ駆けつけられない私にとって、高齢の両親を抱え多少不安はあるが、そんな家族の健康を願いつつ、全国各地で地震などの災害が発生し、いつどこで起きてもおかしくない状況の今、熊本地震での教訓を忘れることなく、市職員としてきちんと役割を果たせるよう備えたい。

熊本地震を振り返って

所 属	健康福祉局 (中央区役所)	職位	総括審議員	氏名	石櫃 仁美
-----	------------------	----	-------	----	-------

1 発災直後

平成28年4月14日。健康福祉局に異動となり、まだまだ職員の顔や名前、局の業務も十分に分からない中で、熊本地震が起きた。異動に伴う会食後、店を出て数分のことだった。地震の直後、電話はつながり、家族が無事であることを確認し、被害の状況を確認しながら、市役所に向かった。

年度当初ということもあって多くの職員がまだ職場に残り、仕事をしていたが、何をしたらいいのか、職員の安否の確認、参集をどうしたらいいのか・・・何もわからない状況であった。やっと家に帰り、寝付いたときに、16日の本震。家族を中学校のグラウンドに避難させ、出勤。被害の大きさを夜が明けるとともに知ることになる。その上、度重なる余震。緊急地震速

報のたびに机の下にもぐりながら、市役所が途中から折れるのではないかと何度思ったことか。

2 り災証明書の発行

健康福祉局では多くの災害対応があるが、特に被災者が様々な生活支援を受ける際に重要となるり災証明書の発行をどうするかは発災直後、大きな課題だった。被害の調査も市内全域でこれまで経験したことがない規模の証明書を発行するからである。新たなシステムを県下で導入することになり、副市長、調査を担当する税部門、発行業務を担当する区役所、全体的な調整を行う健康福祉局で何度も、何度も協議を重ねた。

その間、多くの市民の方がり災証明書の発行受付に來られ、

2.3 時間待ついただくこともあった。圧倒的に職員の数が不足する中、発災後すぐに熊本県行政書士会より「何でもお手伝いをします!」と申し出をいただいた。災害時の協力協定を結び、被災者の方への案内や記入方法などの協力をお願いし、各区役所、総合出張所に会員の皆さんを派遣いただいた。その後も、避難所で災証明書の発行の手続きをされていない被災者の方への周知や手続きを行っていただいた。

また、政令指定都市の職員の皆さんにも発行業務を手伝っていただいた。従事人数、滞在日数、到着・帰着時間などがそれぞれの都市で異なり、その調整は大変であった。事前研修は中央区福祉課にお願いし、バスカードやタクシー券、熊本市の地図、飲食店などはまだ営業を再開していないところもあったが、少しでも熊本の経済のためになればとグルメやお土産ガイドなどを配布した。また、他都市では災害に備えてどんなことをしているのかを教えていただいたりした。その他、自治労の皆さんも県内、全国から応援に駆けつけてくださった。

次に調査が完了すると、被災者の方へ窓口での災証明書発行の案内を郵送することになった。一番多い日で約5千通の郵便を出した。案内文をプリンターで印刷し、封筒に入れ、郵便番号ごとに仕分けし、郵便局に持ち込む。被災者の方は1日も早い連絡を待っていらっしゃるの、税部門から調査完了の連絡があったら直ちに郵送した。5千通を郵送する日は、市役所10階の健康福祉局の廊下を歩きながら「郵送作業を手伝える人、集まって!」と職員に声をかけ、みんなで取り組んだ。

できるだけ早く調査結果を郵送すると取り組んだものの、多くの被災者の方から問い合わせがあり、電話が鳴りっぱなしでその対応に追われていた。そこで、コールセンターを設置し、対応することとした。コールセンターでは問い合わせの内容を分析し、その結果を基にミーティングを行い、業務内容に対応していただいた。

他都市職員、民間企業、関係団体、職員の連携、協力がなければ、13万件を超える災証明書の発行はできなかった。

3 要援護者への市営住宅等の優先提供

都市建設局技監からの「ちょっと来て」から始まった。都市建設局では被災者の方へ抽選による市営住宅の無償提供を始めていた。しかし例えば車椅子を使用している高齢者や障がい者の方などは、住宅の階数や段差などを考慮する必要もあり、抽

選で決めることは困難である。

そこで、要援護者の方々の支援を所管する福祉部門と住宅部門で「住まいと福祉に関するプロジェクト」を立ち上げた。どのような方を対象にするのか、何戸の住宅が必要なのかなどを検討することにした。その際には東日本大震災の復興にも尽力された阪神・淡路大震災祈念・人と防災未来センターの菅野拓さんのコーディネートをお願いした。私だけではいい知恵が浮かばないとすぐに判断、福祉部長と高齢、障がい、子どもそれぞれの部門の知恵者を招集。実務はこの4人が確実に行ってくれた。最初は私も何をどうしたらいいんだろうから始まったが、彼らもそうだったに違いない。

次に、健康福祉局の職員と他都市の応援保健師によるチームを編成、各避難所を巡回し、要支援者の方へ制度の趣旨や説明を行った。また、自宅避難をされている方も多くいらっしゃったので、報道機関へ情報提供し、新聞やテレビ等で取り上げてもらった。さらに、民生委員、地域包括支援センターなど関係者、団体へも情報を提供し、情報をなかなか得ることができない高齢者や障がい者の方へもできるだけ情報が届くようにした。そのことによって自宅や親戚、知人の家に避難をされていた方や家族の方からの問い合わせ、応募が多くあった。

今回、関係団体の協力も得ながら、都市建設局と健康福祉局とのプロジェクトチームで取り組むことで成果を上げることができたが、要支援者の方々が希望するバリアフリー化された住宅や1階などの低階層の住宅物件が不足しており、マッチングに苦慮した。災害時にかかわらずこれからの高齢社会を考えると公営住宅等のバリアフリー化をさらに進める必要があると感じた。

4 終わりに

もうすぐ熊本地震から3年を迎えようとする今、市役所のあらゆる組織が一丸となることはもちろん、地域の皆さん、関係団体、各自治体、民間企業、ボランティア団体、全国の皆さんなどのご協力をいただいて今の熊本市があることを強く感じている。そのことを決して忘れることなく復興を進め、災害に強い熊本市を築くことが支援いただいた皆さんへの恩返しであると思う。

災害ごみと被災した家屋の公費解体

所 属	環境局資源循環部震災廃棄物対策課 (建築指導課老朽家屋対策室)	職位	主任主事	氏名	赤松 亜弥
-----	------------------------------------	----	------	----	-------

1 大地震が起きた時 ～ 《発災直後》

その地震は、久しぶりに両親と食事に出かけ、帰宅した直後に起こった。経験したことのない激しく長い揺れに襲われ、恐怖を感じ立っていることができず、冷蔵庫につかまって揺れが治まるのを待った。

揺れが治まると急ぎ家族の安否、家の中に被害がないかを確認。幸い我が家は、本棚が倒れた程度の被害しかなく家族も無事であったが、テレビでは緊急地震速報が流れ、熊本で大きな地震が起きたことを伝えていた。画面に映し出された震度6という数字を見て、東日本大震災のことを思い出し、これは大変なことになると感じた。

2 災害ごみの収集 ～ 《ごみ減量推進課》 ～

発災時に所属していたごみ減量推進課では、街中に排出された災害ごみの対応に追われた。地震で壊れた食器、家電製品、たんすなどの大型家具がごみステーションにあふれ、道路を塞ぐ事態も発生していた。市内各所から、「道路にごみがあふれている」「まだ収集に来てくれないのか」等の情報提供や問い合わせの電話がひっきりなしにかかってきた。

一日でも早く元の生活に戻るためには、家の片づけは必須である。家の中を片付けないと、寝るところもなく避難所から家に帰れない。

しかし、やみくもにごみを出されては、収集に手間取ってしまい、ごみステーションに長時間ごみが収集されずに残ってしまう。ごみの収集をスムーズに行うには、市民の協力を得なければならなかった。

そのためには、電話での説明対応に加え、広報活動も重要であった。発災直後は、広報手段が少なく報道機関に頼るところが大きかった。ごみ出しについての報道資料とホームページ作成を任せていただいた私は、普段、市民が目に見ているごみ出しカレンダーのマークを使い、一目見て「いつ出せるのか」「どのごみを収集しているのか」がわかる資料作りに努めた。

報道機関への広報は、即時に行い、対応（報道）いただくことができたが、市民へ市から直接広報できたのは、ホームページを除くと、市政だより臨時版からであった。混乱した状況の中で、迅速に市から市民に情報を伝えることの難しさを感じた。

経験したことのない大量の災害ごみの対応は、他都市からの応援をいただきながら6月末まで続いた。少しでも早く被災した方々の不安や不便を解消したいとの思いから、同僚職員と共に休みなく対応にあたっていた。

3 公費解体の開始 ～ 《震災廃棄物対策課》 ～

地震から1か月が経とうとしていた5月8日。震災廃棄物対策課への異動内示を受けた。熊本地震により被害を受けた家屋の解体費用が国補助の対象となることが決まり、公費解体を行うために新設された課だ。環境局内で課が新設されるとの話は耳にしていたが、自分が異動になるとは想像しておらずとても驚いた。

一日でも早く被災者の不安を取り除けるよう、解体を始められるように、毎晩深夜までホワイトボードを出して全員で勉強会を行いながら、全力で取り組んだ。

5月13日の課発足からしばらくは、危険な家屋を市が解体してくれるとの情報が広く報道され、多くの電話相談や窓口相談があった。コールセンターが開設された6月8日までは、4回線の電話が鳴りやまず日中は電話対応に追われた。

電話が治まる時間外に準備を進め、課発足から1か月後の6月13日から申請受付のための予約券の配付開始、同22日から申請受付、そして7月19日には公費による解体を開始することができた。

このような状況の中、9月末までは土日も休みなく、夜も深夜まで働いたが、気が張っていたこと、また一日も早い復旧復興の役に立ちたいとの思いから、ほとんど疲れを感じずに業務

に取り組むことができた。

発足当初14名でスタートした震災廃棄物対策課は、最大時間で36名まで増員された。最終的には公費解体と自費解体（自費で解体し償還申請を行ったもの）合わせて約14,500件の申請を受け付け、約10,000件の公費解体を行った。

4 終わりに～ 《地震を通して感じた周囲の支え》 ～

私は幸いにも、家族や家に被害がなく発災当初から仕事のことだけを考えることができた。しかしこれは、被害がなかったという状況だけではなく、私の周囲の方々が仕事に集中できる環境を提供してくれたからだと感じている。

地震直後からの多忙な時期に在籍した二つの課では、女性職員は私一人。

しかし、女性だからといって特別扱いすることなく、他の男性職員と同じように仕事を任せてもらった。今になって考えると、私のことを気使いながらも、私がそれを感じて気を使わなくいい雰囲気を作ってくれていたのではないかと思う。

帰りが深夜になる私を、母は毎日市役所まで迎えに来てくれた。遅く帰り、朝早くに家を出るためなかなか会えなかった父は、たまに顔を合わせると仕事の事や体を気にかう優しい言葉をかけてくれた。

自分一人では、決してこの地震を乗り越えることはできなかっただろう。地震発生から何か月も休みなく仕事に集中できたのは、周囲の支えが大きかったと感じている。

私を支えてくれたすべての方に、あらためて感謝の気持ちを伝えたい。

住宅の耐震化～熊本城復旧

所 属	都市建設局建築政策課建築物安全推進室 (熊本城総合事務所)	職位	室長	氏名	濱田 清美
-----	----------------------------------	----	----	----	-------

1 発災の頃

熊本地震発生時、私は「建築物安全推進室」の室長として、戸建木造住宅の所有者に対し、耐震診断や耐震改修にかかる費用の一部を補助するという業務を担当していた。2011年3月に発生した「東日本大震災」直後に異動し、住宅の耐震化に対する関心が俄かに高まる中、申請件数も年を追うごとに増えている状況にあったため、地震が発生してまず考えたことは、これまで耐震改修を実施した住宅は倒壊していないかということと、問い合わせが増えるということの2つであった。幸いにも我が家に大きな被害は無く、娘はすでに県外に就職しており、下の子供も大学進学のため地震直前に県外に出ていたため、子供の心配をせずに職務にあたれることに心から感謝した。

なお、その後の調査で、地震前に耐震改修を済ませていた住宅は外壁落下等の被害は見られたものの倒壊した住宅は無く、こちら心から安堵した。

2 建築物安全推進室でのこと

地震発生の次の日から、「今度地震がきたら家が崩れるかもしれない」「耐震性の有無が知りたい」などの相談や問合せが相次いだ。耐震診断は申込開始6月、年間100戸程度の実施を予定していたものの、問合せ状況等から申込が殺到することは容易に判断できた。しかしながら、すでに補助の記事が載った市政だより4月号は配付されており、この時期に補助制度を実施しないという選択肢はあり得なかった。

みなし仮設住宅の申込み等被災者支援の業務を行いながら、耐震補助の申請に向けた準備を進め、市民説明会を開催した。想像以上のびっくりするほど多くの市民が押し寄せた。私は初めて人の波とはこういうものかと実感し、怒号が飛び交う状況に室長としての対応を迫られた。ひとまず、本庁の空いている会議室にいられた市民を全てご案内し、順番に制度の説明に会場を回った。ずいぶん長い時間待たせた会場もあり、お叱りの声も多かったが、励ましてくださる声もある中、どうにか説明を終えた。

申請件数は、例年の10年分に相当する1000件近くに上ったが、不安を抱えて申し込まれた方々をお断りすることはできず、どういう形で全ての耐震診断や耐震改修を進めていくか検討を進める中で、「予算（補助金）の確保」と「耐震診断士（建築士）の確保」が大きな課題となった。「予算（補助金）の確保」については、耐震化の必要性が高まる情勢の中、国や県との協議を行いながら進めることができたが、「耐震診断士（建築士）の確保」については、これまで建築士の方々に安価な報酬でボランティアに近い形で実施していただいていた経緯もあり、簡単に解決できることではなかった。建築関連団体との協議を繰り返し、診断結果の審査や報酬をどうするかなど様々な条件を整理しながら、熊本県のみならず福岡県の建築士の協力を得て、

どうにか必要な耐震診断士（建築士）の確保ができ、2年間での実施という目途を立てることができた。抽選で実施順を決め、事業を実施しながらの1年間はあっという間に過ぎ去った。当時、電話対応、窓口対応など、たくさんの市民からの相談や苦情に丁寧に対応しながら、国や県、建築士との打ち合わせに忙殺される毎日と一緒に頑張ってくれた当時の同僚がいたからこそ乗り切れた1年であったと改めて思う。また、熊本県、福岡県の建築関連団体の協力にはほんとうに感謝しかない。

3 熊本城総合事務所でのこと

2年間で多くの耐震診断や耐震改修を済ませるという命題がある中、異動することはないと言われていた。内示の日も自治会の説明会に出かけていたが、たびたびスマホが鳴り、ラインも入っていたため、説明会が終わってすぐに確認すると「熊本城総合事務所」に異動という。地震発生後、本庁からみた熊本城天守閣の痛ましい姿や石垣の崩壊の様子は強烈な印象で記憶に残っていたこともあり、熊本城の復旧に携わることになるんだと身の引き締まる思いがした。

「熊本城総合事務所」に異動してすぐに、天守閣復旧工事や飯田丸五階櫓の復旧工事が始まった。熊本城への関心は高く、国や専門家の視察が相次ぎ、復旧に向けた委員会や部会も数多くあり、毎日たくさん歩き、打合せし、資料を読み、説明するという状況で、まさに習うより慣れよとはこういうことだと実感しながら、目まぐるしく日々が過ぎていく。

発災直後の熊本城内の写真を見たり、当時から業務に携わっている同僚に話を聞くと、余震が続く中、どこから手を付けていいかもわからない状況で、半壊した古京町別館から必要な資料を持ち出したり、崩壊した石垣や倒壊した櫓の部材の回収をしたり、いつ倒壊するかわからない建物の調査や緊急対策の方法を考えたりと、必死で業務に取り組んだ日々であっただろうと想像できる。私が異動してきた頃は、すでに城内はかなり整然としており、発災当時の状況を経験していないことに申し訳なさを感じることもある。前震、本震とも発災したのが城内に観光客等がいない時間帯であったため、人的被害が出なかったことで復旧を進めることができていたが、城内の状況を考えると、これはまさに不幸中の幸いであつたとしか言えない。

熊本城は、難攻不落の城であり、守りやすく攻めにくい造りは工事のやりにくさに直結するということを改めて感じている。茶臼山につくられた平山城であるという地形的な制限と合わせて、特別史跡内であるため遺構に影響のない形でなければ工事もできないという特殊性もあり、復旧の優先順位を考えただうえで、工事の手順を踏まえると復旧期間は20年を要するということが明らかとなった。熊本地震から2年以上が経過し、熊本のシンボルである天守閣の復旧は目に見えて進んできており、また、城内の至る所に足場が組まれ、復旧に向けた工事が進んでいるが、まだまだ復旧はこれからであるということを毎

日実感している。

今後は立入り規制内に入っていただくための新たなルートをつくり、公開エリアを広げていくことにも注力していくこととなる。2019年10月からは、特別公開が始まり、地震前の賑わいを取り戻していく始まりの年となるが、熊本地震を経験した私たちにとっては、何よりも来城者の安全の確保を第一に考えていく必要がある。地震直後から寄せられているたくさんの暖かい寄付も、今後の復旧に大事に使わせていただくこととなるが、熊本城を応援してくださる方々の思いを受け止め、歩みを止めることなく、しっかりと取り組んでいきたいと改めて思う。

4 終わりに

今回の震災は、全国的にも地震の発生確率が低いと予想されていた熊本で起きたこと、震度6強を超える地震が立て続けに

発生したことなど、前代未聞の出来事であった。そういう意味で、災害はいつどこで発生してもおかしくないという危機感を全国に植え付けた地震でもあったと思う。

地震直後から、私たちは行政としてそれぞれに与えられた役割を果たすことに必死で取り組んできたし、今なお、それは続いている。今回、振り返って考えることは、たくさんの方々の協力や思いがあって初めて復旧を進めることができているということである。

大変な経験をしたが、何よりも周囲の温かい言葉に励まされることの多い日々であったし、これからも感謝を忘れず復旧に向けて取り組んでいきたい。

被災宅地危険度判定を通じてあらためて感じた周りへの感謝の想い

所 属	都市建設局都市政策部開発景観課 (震災宅地対策課)	職位	主任技師	氏名	鎌田 早希
-----	------------------------------	----	------	----	-------

前震が起きた時、私は残業を終え、翌日の子どもの小学校の歓迎遠足のお弁当のことを考えながら帰り支度をしていた。

その時、グラツと横に揺れ、棚の上の書類が私の足元に流れ落ち、執務室を見渡すとキャビネットが次々と倒れていた。

えっ？何で、熊本で地震が起きるの？

状況を理解できなかった。

直ぐに思い浮かんだのは、2人の子どもの安否だった。

家族に連絡を取り、無事を確認してほっとした。

職場には班員全員が残業で残っていたが、上司が私に「帰っていい。長くなるから。」と言ってくれた。

私だけ帰らせて頂くのは、申し訳なかったが、今後のことを考えると、暫く子どもを誰かに預けたいいけない。

夫は消防士で、こんな大きな地震が起きたら暫く帰ってこないだろうと思った。

職場の人達に感謝しつつ、子どもを誰に預けようかと考えながら帰宅したことを覚えている。

翌日の早朝、両親に子どもを預け、職場の人達のためにおにぎりを作って出勤した。

当時、私が所属していた職場は、地震発生直後に被災した宅地について、二次被害の危険性などを判定する「被災宅地危険度判定」の事務を所管していた。

その判定には、「被災宅地危険度判定士」の資格が必要で、私は地震の3年程前にその資格を取得していた。

前震の翌日は、現地調査の結果、宅地の被災の程度が軽微であったため、後日さらに調査区域を広げ、危険度判定の実施の要否を判断することとしていた。

しかし、その翌日の深夜に本震が起きた。
宅地被害が多数発生し、擁壁被害による避難勧告も発令されている状況だった。

国との協議など、「被災宅地危険度判定」の実施に向けた準備を行い、4月20日より実施されることになった。

この日からの約1ヶ月間、他都市の判定士の方々の応援を受けながら被災宅地危険度判定業務を行った。

その間私が担当したのは、判定に必要な資機材の調達、国への状況報告、判定士が判定した後の情報整理などの業務であった。

他都市の判定士が日中現地で判定を行い、帰庁後報告書としてまとめたものを、プロパー職員で情報整理を行っていた。

そのため、連日、帰宅するのは深夜になっていた。

5月末に他都市の判定士の方々の応援が終了してからも、判定に関する申請申し込みや相談が多く寄せられていた。

そのため、平日は通常業務を行いながら、休日に判定活動を行っていた。

その頃は、子どもの小学校も授業を再開しており、5月末の運動会の日休みをもらって応援に行った。

体力的にも限界で、運動会のお弁当も作ることはできず、お弁当はお店に注文し、うとうとしながら運動会を見ていた。

判定作業は、現場次第では体力が必要で、急な斜面を登る時は、男性職員についていくだけで精一杯だった。

しかし、そんな私にも周りの男性職員はとても親切にしてくれた。

現場で遅れても、手を引いてサポートし、疲れている私を気遣い、車の運転も常に代わりにしてくれた。

震災を通して周りの人の優しさをあらためて感じる事ができた。

現在、私は被災した宅地の復旧に携わる仕事をしている。

被災宅地危険度判定を行っていた当時は、宅地被害に対する公的な支援が確立されていなかったため、市民の方から復旧支

援を願う声に応えることができなかった。

しかし、現在は公的な復旧支援の制度が確立され、その支援制度を利用し再建を目指す市民の皆様の少しでも力になれていることに喜びを感じている。

熊本地震直後を思い出すと、水が出ず業務中にトイレに行くにも、階段で執務室がある11階から1階まで降りて行き、トイレを使用する列に並ばなければならなかった。

出来るだけトイレに行かなくて良いように、水分の摂取は極力控えていた。

また、市内全体で物資不足の中、業務が多忙であったため、食料調達が困難で食事にも困っていた。

大変だった記憶を思い出す。

しかし、地震での経験は周りの人の優しさに改めて気づくことができ、熊本市の職員みんなが団結し職務を行っていたと思う。

今はまだ復旧途中であるが、市民一人一人に寄り添いながら、復旧の手助けを続けていきたい。

支援の現場から見たもの～地域での活動を通して～

所 属	病院局地域医療連携室 (改革プロジェクト推進課)	職位	主任主事	氏名	三嶋 千尋
-----	-----------------------------	----	------	----	-------

1 前震・本震時

前震が起こった4月14日、午後9時26分、私は益城町の自宅で遅めの夕食をとっていた。突然、家の中のものがガタガタと小刻みに揺れ、次第に家全体が上下左右に揺さぶられるような激しい揺れに襲われた。私は椅子から滑り落ちるようにテーブルの下にもぐり、必死でテーブルの脚を抱え、揺れがおさまるのを待った。同居する両親に幸い怪我はなかったが、家財が倒れてドアを塞ぎ、食器棚からほとんどの食器が床に落ちて割れるなど家中のものが散乱していた。その後、震源地が本県であることを知り「まさか、この熊本で。」と驚愕した。職場は前震時、入院患者等に怪我はなく、震源地で被害の大きかった益城町等から負傷者の受入れを行った。また翌日も被害状況の確認作業等があったが、通常どおり開院し、診療を行っていた。

そして、前震から約28時間後、16日午前1時過ぎ、私は自宅で再び激しい揺れに襲われた。その日は前日から家の片づけに加え、余震に備えて食料・避難用具等の準備をしており、日付が変わり、ようやく就寝しようとした矢先であった。発災時、意識はしっかりしていたが、下からドンと突き上げるような激しい揺れは、前震より激しく、長く続いたように感じた。あまりの激しい揺れに「家がつぶれて死んでしまう」と「死」を覚悟した瞬間だった。揺れが小さくなるのを待って屋外に出たが、深夜の停電した中、道路の安全状況が把握できず動くことができなかった。近隣の住民の方と毛布や懐中電灯などを持ち寄って、声を掛け合いながら屋外で過ごした。4月に入っていたが深夜から朝方にかけて冷え込み、私は、寒空の下で持病のある両親が体調を崩さないか心配したが、ラジオから「市民病院倒壊の恐れ」という情報を聞き、すぐに職場に駆け付けられないことがとても心苦しかった。そして、明るくなってから見た町の景色は、昨日から一変し、家々が倒壊し、道路の至る所で隆起や陥没が起り、電柱やブロック塀、家の石垣等が倒れ、道を塞いでいるという凄まじい状況であった。

市民病院は前震と本震、2度の揺れの影響から建物は甚大な被害を受け、すべての入院患者を転院しなければいけないという事態となった。目に見える範囲でも日中の診療時間中であれ

ば、総合受付があり、人の出入りの多い新館の待合ホール天井材が落下し、その他の場所でも壁の一部が落ちる等していた。また新館より古い南館・北館では建物や設備に自体に甚大な被害が生じ、その後両館は立ち入り禁止となった。私が所属していた部署は南館の1階にあり、日頃仕事をしている机の後方の天井版も一部落下し、天井から水が下にしたり落ちていた。そのような執務室で転院先等とやりとりを行いながら、余震が来るたびに「次は本当にこの建物が倒壊してしまうのではないか」という不安や恐怖に何度も襲われた。

熊本地震においては、本院に限らず、災害対策本部となる行政機関や救命・救援活動を行う医療機関、避難所等の建物が倒壊または倒壊の恐れがあるため、施設を利用できなくなるという事態が各地で起こった。私は、当時、病院に配属され2年目を迎えた時期であったが、前年度に初めて参加した院内の避難訓練では、自分自身、建物自体が使用できなくなった場合まで想定できていなかった。今回、自分の所属する職場がそのような状況に陥ったことはとても悔しく、利用されていた方やご家族、そして地域の方々に大変申し訳ない気持ちが強い。

このことから、災害時等に拠点となる建物の安全性の確保や災害時の備えを万全にすることは基本であるが、建物やライフライン、医療器材など通常当たり前に使用しているものが使用できなくなるという一番危機的な状況のシナリオも想定し、訓練をすることも大変必要であると感じた。

2 院内から院外へ

～家庭訪問、避難所運営、被災者支援窓口の経験から～

入院患者が全員転院し、転院先の病院への情報提供等の業務が落ち着くと、病院スタッフの一部は他部署からの要請で院内の仕事から地域の避難所や在宅の災害時要援護者の安否確認のため個別の家庭訪問を行った。私は地域包括支援センターを拠点に2人1組で事前に登録されていた高齢者等のいる世帯をゼンリンの地図を片手に訪問し状況を聞いて回った。多くの方は自宅で過ごされていたり、親族宅や避難所におり無事を確認できたが、不在時でも訪問していると近隣の方が「〇〇さんは、娘さんのところに避難しているから大丈夫ですよ。」と声をか

けられることが度々あった。また民生委員や自治会長など地域の方が住民の避難状況を把握していることも多く、地域のつながりを垣間見ることができた。しかし、いくつかの校区を回っていると、周囲とほとんど関わりのない住民の方もいて、避難状況の確認が難しい地域もあった。その後、携わる避難所運営においても感じたことだが、日ごろ、住民同士の関わりがあり、自治会の活動などが盛んな地域は、災害時においても地域のリーダーの方を中心に自主的に動かれている印象を受け、平時の活動の基盤が有事の際の活動に大きく寄与しているように感じた。

家庭訪問の業務が終わると、次は、避難所の運営に携わるため、各区の避難所を回ることとなった。避難所では1日の多くの時間が食事の準備、避難物資の調達や管理、被災者の方への声かけや相談等に費やされたが、避難所の清掃など衛生状態を保つ活動も重要な仕事であった。ある避難所を訪問すると震災後の混乱期から続いていたのだと思うが、本来土足で入ることができない調理室に職員をはじめボランティアの方が靴のまま入り調理をする体制になっていた。そのため、一緒にいた職員と数時間かけて床を拭き上げ、消毒し土足禁止にするなどして食中毒等の被害が起きないように配慮した。またトイレ掃除をしていると高齢の方などが声をかけてこられ、その中で思いがけず排泄に関する悩み等をきくことがあり、避難所の生活では、表に見えづらいが、配慮が必要な問題が多く隠れていることに気づかされた。例えば自宅ではリビングや寝室の近くにトイレがあるため、失禁等の心配が少ないが、避難所ではトイレまでの移動距離が長く、また避難者の数に対して数が少ないこと、加えて多くが和式のスタイルであることから、身体的・精神的に使用すること自体が負担となり、利用する回数を減らすため飲食の制限をしてしまうという話を何度か聞いた。また、そのような状態で、自宅では自立してトイレに行けていた方が大人用の紙おむつを利用するようになったということも聞き、避難所の生活は人間本来の生理的な活動も我慢を強いられることが多いと感じた。そして、そのような生活が長期化するにつれ、生活の質の低下を招き、個人が本来もっていた力が衰えていく恐れがあるように感じた。

その後、私を含め病院のスタッフの一部は被災者支援制度の申請窓口に関わることとなった。申請受付から数か月は、どの窓口も混み合い、申請会場は人が溢れていた。窓口の中には待ち時間が数時間というところもあり、手続き一つ行うにしても乳幼児と一緒に来られている方や高齢者の方、障がいのある方は大変な思いをされていたように感じた。震災後は、多くの方が家の片づけや、衣食住の確保、各種支援制度の申請等を行うため、通常より慌ただしくなると思うが、申請は、来庁が基本であり、待ち時間から申請、発行に至るまで長い時間を費やしているのが現状であった。

このような点においては、来庁が難しい事情がある方などに対して電子申請など異なった手法の申請方法などがあってもいいのではないかと感じる。一方で窓口において、被災者や家族の方が当時の様子を話されながら「聞いてくれてありがとう。すっきりした。」という言葉をかけていただくことも多かったことから、対面式だからこその被災者支援があることも改めて気づかされた。

今後の被災者支援においては、様々な課題はあると感じるが、ICT（情報通信技術）等を活用し、制度によっては電子申請や事前予約ができるような仕組みや制度づくりなどの環境整備等も検討する必要があると感じた。

3 経験から学び、次につなげる

もうすぐ、熊本地震から3年が経過するが、時間の経過とともに当時の記憶を詳細に思い出すことが少しずつ難しくなってきた。また、以前は、折に触れて、周囲の人と震災のことを話す機会も多かったが、最近はそれも少なくなってきたように感じる。昨年、私は西日本豪雨災害の被災地で避難所運営に携わる機会があったが、その際、同行した職員と当時の経験を共有し合ったが、初めて知ることもあり、他の人が体験したことから学ぶことが多かった。その一方で震災後に入職した職員と話す、当時の状況を職場の先輩職員等から聞く機会がほとんどなく、実際に災害が起こった際、対応できるか不安であるという声を聞いた。

組織の中で、この経験を次にどのようにつなげていくかが課題であるが、今回支援に携わった私たちは、この経験を振り返り、次につなげていく責務がある。それは、組織内部に限ったことではなく、地域の中においても、同様であると思う。私も含め、熊本で過去に大きな地震があったという歴史を知らないという方が多かったが、何人かの被災者の方から、「むかし、ここの地域は地震で被害があったという話を聞いたことがあった、今まで忘れていたよ。」という方もいた。過去に災害があったという事実と、壮絶な経験を乗り越えられた先人の経験が、時間とともに消えてしまう恐さを感じ、語り伝えていくことの必要性を感じた。今回の熊本地震も含め、地域で起こった過去の災害の歴史や経験等を「学び」として残し、そこに暮らす人々がそれを学ぶことは、記憶の風化を防ぐとともに、防災・減災の観点から大切なことではないかと感じる。今も「あの時、もっとできることがあったのではないか」という思いに苛まれることが多いが、今後もこの経験と向き合い、職員や地域の方々お互いの経験や課題を共有しながら、ともに考え、見直し、次に備えていきたいと思う。

災害ボランティアセンターを運営して

所 属	熊本市社会福祉協議会 (観光政策課)	職位	事務局長	氏名	中川 奈穂子
-----	-----------------------	----	------	----	--------

1 前震時

前震が起こった4月14日、午後9時26分、私は益城町の前震が起きたのは、4月の人事異動により、社会福祉協議会（以下、社協）に出向して2週間経った頃だった。自宅で夕飯を済ませ、夫とテレビを見て過ごしていたところだった。我が家は、古い木造住宅で、耐震検査では「震度5で倒壊」と言われていたので、倒壊を免れたのは、幸いであった。

揺れが収まると、地震速報を聞かなくても、震度4以上であることは明らかだったので、すぐに職場へ向かう準備をした。

新町にある社会福祉協議会に着き、一人で建物の中に入ったが、数度の余震に恐怖を感じ、屋外で誰か来るのを待つことにした。屋外では、市電が電停ではない場所で緊急停止をしており、公園には近くの人が避難をしていた。道路には、ビルの外壁から落ちてきたらしいタイルの破片が飛び散っていた。

少し時間がたち、職員が二人ほど自主的に参集してきたので、事務所内の写真を撮り、倒れたパソコンを立て直した頃、常務理事と連絡が取れ、その日は一旦自宅待機となった。

翌15日は、朝から職員の安否確認をとり、関係団体の被災状況等の情報収集と「災害ボランティアセンター（以下、災害ボラセン）」の設置準備を同時進行させていった。災害ボラセンは、熊本市との協定により、社協がその役を担う。過去には、平成24年九州北部豪雨の際に、開設したこともあり、そのマニュアルを震災用にアレンジして、準備を進めた。翌16日の午前中にリハーサルを行い、午後から設置を宣言する手筈を整え、自宅に戻った。



前震直後の職場では、キャビネの位置がずれ、書類が散乱していた。

2 本震時～

母が「大きな地震が起きたら、必ずぶり返しに来るよ」と言っていたことを思い出し、私は玄関に一番近いリビングに布団を敷いて寝ていた。地鳴りとともに、家じゅうの窓ガラスがガタ

ガタと音を立て、本震と言われる長い揺れが始まった。しばらく続いた揺れも治まり、一目散に屋外へ飛び出し、近所の方と話していると、しばらくして奥の寝室から、夫が起きてきた。夫は、昨晚からの避難所運営から解放され、寝入った矢先だったため、「起きたくなかった。」そうだ。しばらくして、私は、二度とこの家の中では眠れない、と車に陣取ったが、夫は、何事もなかったように「おやすみ」と寝室へ向かった。生まれ育った家への絶大な信頼なのか、眠たさなのか、私には、信じがたい出来事であった。

16日朝から、災害ボラセンのリハーサルに出かけ、旧東部保健福祉センター1階で、いすを並べたり、動線を確認したりしていたところ、市職員が「この建物の、耐震性が定かでないため、作業を中断して、屋外へ出てください」と伝えに来てくれた。ここでは、開設できないとわかり、開設の場所探しに出かける班と、県の総合運動公園の陸上競技場で物資の集積がはじまり、そこにボランティアを入れた方がよさそうだとの情報でボランティア受付との班にわかれ、私は、ボランティア受付に連れられていった。

現場に着くと、つい2週間ほど前は、部下だった市民局の職員たちが、懸命に物資の積み下ろしに従事していた。体力には多少なり自信があったが、自衛隊員や、男性職員に囲まれて作業をしていると、さすがに同じ働きは、できないなと感じた。翌々日まで、そこで受付や積み下ろしなどを手伝い、災害ボラセンの設置準備へと移行していった。

3 災害ボランティアセンター開設

4/22（金）から11/26（土）までの長きにわたり災害ボラセンを運営することになる。全国から、のべ37,900人の災害ボランティアの方々に熊本を助けに来てもらい、本当にありがたかった。

なかでも、赤い羽根の中央共同募金会から、「災害ボラセン設置」のための「災害支援プロジェクト会議」メンバーが早期に2人駆けつけてくれ、私がセンター長として様々な判断を下すシーンでは、東日本大震災や常総水害、広島土砂災害等を踏まえ、選択肢を示し、「熊本市はどうしますか。」と選ばせてくれたことは、大変ありがたいことであった。

内閣府から、「災害ボラセン」の設置状況等を問われたときには、災害の大きさを感じたものだ。

当時、困ったことと言えば、ボランティアに関する被災者の要望と活動したいボランティアの人数がうまくマッチングできなかったこと。発災から2週間でGWを迎え、様々な人にボランティアを返すな。とお叱りを受けたが、被災者から「今日は来てくれるな。」と言われれば、その日は、活動ができないのだ。

そのことについては、一日に活動できる人数は限られているが、これからも細くて長い支援が必要なのだとメディアを通じ

て全国に訴え、また毎朝のボランティアへのあいさつの中で、丁寧な説明を心掛けた。

なかには、「どうしても活動させろ」、「活動させなければ SNS にあげるぞ」、などというボランティアもいたが、「私がセンター長です。お話を聞きましょう。」と出ていくと、大概は声を荒げることなく、「あなたたちも被災者なのに」と理解を示してくれた。このような交渉事には、女性であったことも幸いしていたように感じる。

熊本県内 17 か所に災害ボラセンが設置されたが、唯一の指定都市で、女性のセンター長であったため、メディアへの露出が増え、たくさんの方々に労ってもらったのも、大きな思い出となった。



災害ボランティアの活動風景（がれきの撤去）

4 家族の支え

地震の当初、私は夫と二人の生活で、長男は東京の多摩市でバイト生活、次男は人吉市で学生の身であった。二人の息子は、わが家が耐震性のない「震度5」で倒壊ということも知っていたので、熊本地震の報にふれ、「わが家が潰れたと思った。」と言う。携帯で私たちの無事を確認し、そのまま仕事に向かったことも知っていたが、本震の翌日に次男が、その翌々日に長男が、それぞれの住むところから、どうにか熊本に向かい帰ってきてくれた。

余震も続く中、帰ってきてはいけないと伝えていたにも関わらず、長男は、羽田から 12 時間かけて、夜中に家まで帰ってきた。羽田でルートを教えてくれた空港関係者や、親のために熊本へ向かっていると話すと料金を取らずに降ろしてくれたタクシーの運転手さんなど、たくさんの方々にお世話になったようだ。

そんな息子達は、そろって災害ボラセンでスタッフとして応援してくれることになる。長男は、大学生スタッフに混ざり、マッチングや活動報告の担当。次男は、私につきっきりで、情報伝達を担ってもらった。大学生スタッフが多い中、LINE グループでの情報発信は効果的であったが、私がいちいち打っていると時間もかかることから、伝えたい内容を次男が LINE にアップするのだ。

余震も続き、古い木造住宅で心細いところもあったが、家族が揃うととても力強かったし、前向きになれた気がした。

5 まとめ

今回、このような地震を経験し、2つのことが印象に残った。一つは、家族の絆がより一層深まった気がしたこと。我が家は、息子たちを育てる間、口癖のように「お父さんが二人いると思え。」と言い聞かせてきた。災害が起きた際には、夫婦揃って出勤しなければならないことも覚悟させてきた。サザエさんやドラえもんにみられるようなお母さんの役割は、果たせないかもしれないが、働く両親の背中を見てほしいと願っていた。息子たちが大人になった今、バイト先やクラスの友達に親のことを自慢しているという。小さなころは、随分と寂しい思いもさせてしまっただろうに、ありがたいと思う。

もう一つは、社協の職員に支えてもらったということ。突然来た上司に突然起こった災害。彼らにとっても大変な試練であったと思うが、みんなで被災者と向き合いながら、私が折れることなく立っていられるように支えてくれた。いつかは、彼らを私がしっかり支えてあげたいと思っている。

最後に、座右の銘の一つ挙げると、「恐れず 驕らず 侮らず 毅然として闘うものは、常に勝者である」

姿勢を正し、自分に言い聞かせる好きな言葉である。



災害ボランティアからのたくさんのメッセージ



「所属業務」



のこと

その時、議会は・・・

所 属	議会事務局	職位	事務局長	氏名	田上 美智子
-----	-------	----	------	----	--------

1 4月14日（木）午後9時26分～前震

4月に議会事務局長に就任したばかりの私は、その時東京にいた。基地協議会事務局長会議に出席し、意見交換会終了後、東京事務所職員と二次会の最中に一報を耳にした。「熊本で大きな地震が起こったらしい。震度7?！」でも、ピンと来ず、そのまま飲み続けていたら、それぞれ職場から緊急連絡が入った。

翌朝、6時20分発の1便に乗り、帰ってきた。空港から市役所まで、大きな地震の直後にしては、平然としていて、ビルが倒壊していることもなく、不思議な感じだった。市役所に着くとすぐに防災服に着替え、災害対策本部会議に入り、代理で出席していた次長と交代、緊迫感に包まれた。

2 4月16日（土）午前1時25分～本震

夜11時半ごろ、自宅に帰り、散乱していた食器などを片付け、やっと寝たところで、ドーンと本震が来た。停電とガシャーンと物が割れる音。恐怖よりも、「職場に駆けつけなくては!」との思いで頭はいっぱいだった。揺れが収まり、電気がつくのを待って、直ちに身支度を整え、懐中電灯を持って徒歩で市役所へ向かった。途中、街中は避難する人たちでわんわんしていたが、例えば道路の大渋滞など混乱している状況は見られなかった。信号は点いていたが、街灯が落ちていたり、道路に段差や亀裂が入っていた。市役所に着いてから、職員の安否確認と全員参集の指示を出した後、防災服に着替え、5階の災害対策本部に急いだ。

3 議会事務局の動き

事務局職員の参集状況は、育休中の3名を除いた25名中、前震時が18名、本震時が17名だった。また、被災状況は、半壊が1名、一部損壊が17名、本震後1週間の自宅以外の宿泊場所は避難所が2名、親戚・友人宅が2名、車中泊が6名だった。

議員については、職員が手分けをして、電話で安否確認を行ったが、連絡が取れず、2～3日後にようやく確認できた議員もいた。

幸いにも、職員にも議員にもけが人等はいなかった。

被害や対応状況についての議員への情報提供としては、災害対策本部会議資料を毎回会議終了後、全員へFAX、電子メール等により送付した。「とても役に立った」という声の一方、資料が多かったため、「FAXの用紙が不足し、データが溜まったままの状態になっていた」、「もう送らなくてもよい」等の声も聞かれた。

また、市役所1階は、あちこちに毛布が敷かれ、荷物が置かれ、大勢の避難者で溢れていたため、中央区と協議し、議会棟2階の予算決算委員会室を避難所として開放。高齢者や子ども連れの方に優先的に入ってもらい、職員1名を24時間体制で配置した。

4 議会の動き

未曾有の大災害に対し、議会はどう動くか？当時の澤田議長がほとんど毎日登庁してこられたので、随時相談しながら、議長及び主要会派による団長会議を中心に、第2回定例会の会期や開催場所、全員協議会の開催、行政視察の中止等々について、迅速に話しを進めることができた。

議員が収集した地域からの要望等については、現場での混乱を避けるために、議会事務局で取りまとめ、対策本部や担当部署につなぐこととしたが、徹底せず、直接区役所等へ毛布や水、支援物資等の配布を要求する議員がいた。

また、議長とともに防災服で、内閣府や総務省、自民党本部等へ要望活動を行った。随行とはいえ、内閣官房長官や総務大臣などにお会いでき、貴重な体験となった。全国市議会議長会にも防災服で出席した。防災服姿で羽田空港や東京都心部をうろうろするのは少し抵抗があったが、他都市の議長さんなどはもとよりタクシーの運転手さんからも「熊本市さんですか？大変でしたね。がんばってください」と温かい声を掛けていただいた。

ところで、平成28年度は4月27・28日に第91回九州市議会議長会総会を熊本市で開催し、熊本市議会議長が会長に就任予定だった。2度の大地震により開催は困難となり、急遽、前会長市の長崎市が会議の開催を、次年度の会長就任予定だった大分市が会長市を引き受けてくださった。両市にはご迷惑をお掛けしたが、特に、わずか10日間で会場を確保し、総会を開催していただいた長崎市の厚意は忘れてはならないと思う。

5 振り返り

職場で迎えた本震直後の朝、皆に何か朝食をと思い、部下にコンビニへ買いに行ってもらった。ペットボトルを抱えて戻ってきた。「飲み物しかありませんでした」コンビニから物が消える・・・初めて実感した。

支援物資が届いても、職員が並ぶわけにもいかず、自分も含め、24時間体制で働いている部下に食料がないというのは本当につらかった。

何日後かに比較的被害の少なかった地域の議員が差し入れてくださった、地区の婦人会手作りのおにぎりとお漬物を皆で口にしたときは、思わず涙が出た。

また、私は平成8年に自治大学校の特別課程を受講したが、そのときの同窓生の一人が声を掛けてくれて、全国各地から、チョコレートやクッキー、野菜ジュース等々いろんなものが届いた。落ち着いたら飲みなさいとお酒も入っていた。女性のネットワークは心強い。感謝の言葉しかない。

余震がずっと続いたことは熊本地震の大きな特徴だと言われている。ベッドに横になると揺れを感じた。何かあれば、すぐ職場に駆けつけなければならない。夜中に何度も目が覚める。

要望活動等で東京のホテルに宿泊している時も感じた「あつ、揺れてる」。「昨日揺れたよね」「えっ？」自分では気づいていなかったが、かなりストレスが溜まっていたのだろう。

地震から約3ヵ月半が過ぎた7月末に横浜市で指定都市議会議事務局長及び神奈川県内の市議会事務局職員を対象に防災講演

会が開催され、「その時議会は動く～熊本地震における議会対応について～」と題し、話しをする機会をいただいた。熊本地震の経験や思いを伝えていくことは、支援をしてくださった皆様方への恩返しだと思っている。

緊急時の体制と報道

所 属	政策局総合政策部広報課 (人材育成センター)	職位	副課長	氏名	上村 清美
-----	---------------------------	----	-----	----	-------

1 地震の前に……

思い起こせば6年ほど前に出先機関で勤務中、豪雨のため避難勧告が発令され、避難者を受け入れたことがあった。

その日は休日で、職員は2人だけ。危機管理防災総室から電話が入り、すぐに避難所を開設してくださいと言われ、あわてて対応した。

そのころ、避難勧告の発令自体が稀だったので、避難者がいるというだけでテレビの取材が入り、大変焦ったのを覚えている。幸い、その日のうちに勧告は解除され、何事もなく済んだ。

その時、「これが大きな災害だったら対応できていたのだろうか。」と、非常時の体制について考えさせられたことを覚えている。しかし、まさか数年後に想像を絶する大惨事に見舞われるとは思ってしなかった。

2 業務体制

当時、私の所属は広報課だった。

広報課の業務は、報道対応と市政広報の2つに大きく分けられる。有事の際の体制として、水害などの災害時には、ローテーションを組み、緊急の報道対応と通常業務を計画的に行っていた。

しかし、熊本地震では状況が違い過ぎた。長期に及ぶものは想定していなかったからである。

24時間対応の体制が長期間続き、災害対策本部をはじめとする報道対応や各種媒体を通した市民への情報提供、避難所での対応などが課の業務として割り当てられた。

通常業務の延長上と思われるかもしれないが、情報量が比べようもなく多く、錯綜する中、迅速かつ正確に報道対応や市民への情報提供を行わなければならない。加えて他課への応援業務もある。この体制が長期となると職員の体力面で厳しいものがあり、同様の勤務シフトを続けるには限界があると感じた。みんなが慢性的に疲弊し、判断力も低下していたような気がする。みんなの気力だけで成り立っていた、そんな状況だった。多少の差こそあれ、どの職場でも似たような状態だったのではないだろうか。

熊本地震を体験して、「有事の際」というものの認識が変わった。改定された熊本市業務継続計画に加え、何かあった時の臨機応変な対応や体制づくりについて、日頃から心がけておかなければならないと痛感している。

3 緊急時の報道

地震直後からしばらく、私の記憶に鮮明に残るものの一つに、フロアを埋め尽くしていた報道関係者の姿がある。

地元はもちろん全国各地から入れ替わり立ち替わり取材に來られた。その目まぐるしさに、名刺をいただいても、なかなかお名前とお顔を一致させることはできなかった。

毎日、災害対策本部会議が開催され、報道各社にもオープンにされていたが、それでも市長への個別インタビューを望む声が多く、その対応と調整に苦労した。特に、地震から1か月、2か月、半年などの節目は依頼が殺到し、その後も途切れることはなかった。

インタビューの内容については、ほとんどが被災者支援や復興に関するものであったが、災害時のSNSによる情報提供に関するものも多かった。

市長のツイッターによる情報提供や「ライオンが逃げた」というデマの拡散と終息が話題となり、結果としてSNSの活用方法あるいはメディアリテラシーなど各方面で取り上げられることになった。

そんな中、私個人としては、いち早く被災した女性や子ども、高齢者、障害のある方への支援に目を向けて発信されていた女性記者の姿が印象的であった。

被災した市民の皆様に対して必要な情報を届けることが最優先であることは言うまでもない。

同時に、報道各社からの県内、全国へ向けた情報発信は、被災者支援のため、そして地震の記憶が風化されないためにも、本当に重要なことであると再認識した。

熊本地震は、まだ終わっていない。復興の途中だ。

いつどこで大きな災害が起こるか分からない今だからこそ、報道各社には今後も、復興する熊本の姿を発信し続けていただきたいと心から願っている。

4 最後に

被災直後からの広報活動に対して、時にお叱りを受ける中で、思いがけず「ありがとう」「頑張ってください」と声を掛けていただいたこともあった。それは、気持ちが伝わる、元気をもらえる何よりの言葉だった。胸に熱いものがこみ上げてきて、「思いやり」のありがたさを心から感じた瞬間だった。

消費者センターの現場では・・・

所 属	市民局市民生活部生活安全課消費者センター (男女共同参画課)	職位	所長	氏名	東原 福美
-----	-----------------------------------	----	----	----	-------

1 はじめに

熊本地震から早くも3年が経過した。その記憶が風化する前に、経験したこと、感じたこと、苦しかったこと、その思いを、記憶を辿りつつ、ここに記録しようと思う。

指定都市移行から4年経過した平成28年4月に、それまで全く予想もしなかった大きな地震が二度にわたり本市を襲った。「予想しなかった」というのも、九州はかつて大地震を経験したことがない、その発生率が低いと思い込んでいたからである。そして、それは指定都市に移行した本市の真価が試されていると感じた。

2 前震発生時

私は家にいた。今まで経験したことのない大きな揺れ。私は洗濯の途中で夫のシャツを握りしめたまま、夫の「外に出れ」という声に促され、屋外へ飛び出した。揺れが収まり、その日はやれやれと、倒れた書籍などを元に戻した。局主管課に「参集か」と聞いたが「自宅待機」と回答があったので、課の職員の安全を確認して、少し不安を抱えながらも就寝した。

翌金曜日午前6時半、「管理職は直ちに参集」と連絡があった。出勤後、局主管課で地震対応に関する連絡を受けた後、相談員全員の無事を確認。課の職員2人を避難所対応に派遣し、残った職員で倒れた棚の片付け等をしながら、情報収集や通常通り相談業務を行った。その日、相談電話はあまり鳴らなかった。

3 本震発生後

翌16日早朝、震度7の本震が寝込みを襲った。家の中に留まることができず、夫、長男、愛猫と車の中へ。一番心配なのは隣の校区に一人で住む高齢の母。矢も楯もたまず、見に行くと近所の人に挟まれて、公園のベンチで毛布に包まれた小さな母の姿が見えた。「一緒に行こう」と誘ったが、娘の立場を思いつたのか、「近所の人と一緒にここにいる」と固辞した。後ろ髪をひかれながらも、その場を後にした。

その後に備え、給油し帰宅した。家の中は本が散乱、食器は割れ、足の踏み場はなかった。だが、片付ける意欲は減退し、生活のため最低限必要なスペースだけを確保した。明け方、県外の大学に進学のため2週間前に家を出たばかりの次男が「大丈夫か?」「片付け前に写真撮っとけよ」「気をつけてな」と立て続けにLINEのメッセージを送ってきた。初めての独り暮らしで心細かっただろうに。家にいるときはわがまま一杯で俺様の次男から!!ぶっきらぼうな優しさとその成長がうれしすぎて涙が出た。長男も前震発生後、大学から帰宅途中に両親母の無事を確認しに行ったことが後からわかった。そして両家の墓も見に行ったらいい。辛い中にも子どもたちの逞しさと家族の支えを確認できた出来事だった。大学時代の友人からも、ママ友たちからも心配するLINEメッセージがたくさん届いた。

そして、今でも耳に残っているのは一晩中、間隔を置かず鳴り続けた大音量の緊急速報「エリアメール」。しばらくはトラウマになった。



◀市役所別館自転車駐車場の内階段

4 消費者センターの対応

2度の地震により、熊本市消費者センターの入っている駐輪場は、エレベーターが故障、階段内壁が崩落したため、避難経路が確保できず、職員の安全が保証できないとの理由で立入禁止となった。やむなく相談業務の休止を決断し、報道資料の投込みの準備をしていたところ、早期の復旧作業により週明けから通常業務を継続することができた。この地震で益城町をはじめ10市町村の消費者相談窓口が機能停止に陥り、熊本県消費生活センターがその代替を務めることになった。当センターへも相談が一気に押し寄せてきた。

棚が倒れ、書類等が散乱したセンターの中で、非常勤の消費生活相談員8名は、高い使命感でひっきりなしに鳴り響く相談電話に懸命に対応してくれた。地震直後は消費者相談の範囲を超え、「断水はいつまでか」「罹災証明や支援金はどこでもらえるのか」「ブルーシートが欲しい」など行政サービスに関する問合せや「隣の瓦が飛んできて我が家のガラスが割れた。損害賠償を請求できるか」など近隣トラブルに関する相談が大半を占めた。ありとあらゆる相談が寄せられ、地震発生1週間後に第1のピークを迎えた。

同じ頃、消費者庁と国民生活センターの職員が、「被災地でどんな支援が必要か」をヒアリングする目的で来所した。消費者庁から土業による「専門家派遣事業」、国民生活センターからはフリーダイヤル「熊本地震消費者トラブル110番」設置が提案された。私は、災害時における消費者支援情報の提供と、疲弊する相談員支援のため、経験豊かでスキルの高い消費生活相談員の派遣を強く要望した。

また、ほぼ同じ時期に阪神・淡路大地震発生当時の神戸生活科学センター相談員が記録誌を携え、様々な生活情報を70回にわたり全避難所にプッシュ式でファクス送信を続けたとアドバイスに来てくれた。

4月25日に県弁護士会無料電話相談、そして4月28日に

被災者支援情報ダイヤルが開設された。その頃になると、当センターの相談件数はピークを過ぎていたが、少しでも生活者の不安解消の一助となればという思いから、ゴールデンウィーク及び5月中の土曜日に臨時相談を行うことを決断した。報道の影響もあり、多くの相談が寄せられ、相談件数は第2のピークを迎えた。5月下旬になると相談内容は「賃貸借契約」「住宅の補修工事」など住宅関係の相談が増加し、半数以上を占めるようになった。

そうした過酷な状況で、私は相談員のメンタルヘルスを案じ、改めて国民生活センター理事長に、自らも被災しながらも懸命に相談対応を行う相談員の疲弊状況と支援の必要性を直接訴えた。その熱意が伝わったのか、即座に消費生活相談員の本市への派遣が決定し、7月までの延べ18日間、東北地震時に相談対応の経験のあるベテラン相談員が派遣され、本市相談員に大きな安心感をもたらした。相談員の被災自治体への派遣はこれが最初のスキームとなった。先進事例として今後の被災地支援につながることを期待したい。

本来、消費者行政は「相談」と「啓発」が車の両輪とも言われている。悪質商法に引っかからないためには、その手口を事前に知り備えることが必要だ。そのため、地震発生直後から、市政だよりや市HP、SNS、テレビ・新聞報道等あらゆる方法を駆使し、補修工事トラブルや義援金詐欺に関する情報提供と相談窓口の周知に努めた。6月4日以降は、「避難所だより」に県消費生活センターと連携して「消費者トラブル注意報」を掲載し、避難所に情報を送り続けた。その後、悪質商法の未然防止のため消費者へきめ細かな情報を提供しようと「消費者トラブル事例集」を発行することが市の方針で決まり、仮設住宅全世帯に配布した。

自然災害はいつ発生するか分からない。日頃から国や県、近隣自治体と連携体制を築くとともに、相談技術を磨き、あらゆ

ることにアンテナを張り最新の情報をアップデートすること、様々な相談機関と常に情報共有を図ることの必要性を強く感じた。

4 最後に

当課は職員が少なかったので、私も避難所支援のローテーションに組み込まれ、通常業務と情報調整室、通常業務の繰り返しで連続だった。そのような状況で、当課では職員が復興部に異動したり、避難所支援へ張り付きになったり、体調を崩す職員が続出し、危機的状況を呈した。課長の代わりを務める中、本当に最良のマネジメント、判断ができていたのだろうか。仕事は常に全力で走りながら考えるばかりで、立ち止まって周りを見る余裕はなかった。しっかり検証し、次に備える必要があると思う。

また、家庭生活のことはほとんど覚えていない。電気・水道は早めに復旧したものの都市ガスの開通には時間がかかったので料理はカセットコンロで行っていた。何も食べていたのかほとんど覚えていない。入浴はLPガスの実家の風呂にお世話になったことを思い出した。家族のこと、自分のことは二の次で、娘・妻そして母としての役割は果たしていなかったと思う。ただ、息子たちは親の手助けがいらない年齢だったから助かった。子育て世代の職員は県外の両親に子どもを預けに行った、子連れ出勤した、と後から聞いた。今後、自治体の防災対策に忘れてはいけない視点だ。

最後に、ご支援いただいた消費者庁、国民生活センター、他自治体、熊本県、弁護士会そして上司、同僚、相談員の皆さん、友人、そして家庭を顧みない私に文句を言うことなく仕事に送り出してくれた家族、すべての方々に改めて感謝を申し上げたい。恩返しはとてもできないが、この記録を残し、活かしてもらおうのが唯一の恩返しだと思う。

感染症対策業務とLGBT支援活動を通して見えてきたこと

所 属	健康福祉局保健衛生部感染症対策課	職位	技術参事	氏名	泉 真理子
-----	------------------	----	------	----	-------

1 はじめに

「熊本地震での体験を、女性職員としての視点や、LGBT※支援の視点から書いてほしい」との依頼をいただいた。日頃からいくつかのLGBT支援グループと活動しており、地震の際にも活動に関わった経験からご指名いただいたのだと思っている。とはいえ、私はLGBTの専門家でもなく、女性ならではの特別なエピソードがあるわけでもない、身近な人とのできごとを思い出し、書いてみようと思う。特に、当時、直属の上司だったN主幹(女性)や、2人暮らしをしていたパートナーには本当に支えられたし、LGBT当事者(普段そのことを意識することはないが)の友人たちと話すことで気付いたことも多くあった。

思い返すとふがいない記憶もたくさん浮かんできて心底嫌になるが、1つの記録として、少しでも役に立つといいなと思う。

※LGBT: 同性愛者や性別に違和感を持つトランスジェンダーなど、いわゆる性的少数者を指す言葉の1つ

2 発災時の状況 ～前震～

そのとき私は、関東から来た旧友と再会し、焼酎を飲もうとしているところだった。街中の古い雑居ビルの3階、店主が九州中を周って集めた“こだわりの焼酎”が壁いっぱい並べられている、狭いけれど雰囲気のあるお店だ。

突然「ドン!」と突きあげるような強い揺れ、続いて大きな横揺れがおきた。カウンターの高い椅子に座っていられず床にしゃがみ込み、何が何だかわからずにいた。誰もが、大地震がおきたことを信じられずにいたと思う。余震が続き、壁の焼酎瓶がいくつか落ちて割れてしまった。狭く古いビルだ。火災がおきたら、崩れてきたら、と不安もよぎった。誰かが「避難し

よう！」と言い、余震の中、皆で、崩れそう(に見えた)な階段を下りて外に出た。外は、避難してきた人たちでざわめいていた。あまりに現実味がなく、妙に高揚する気持ちを抑えながら周囲を見ていたように思う。

そこで頭に浮かんだのが、自主参集だ。しかし、気がかりなことがあった。友人は、博多への用事のついでに熊本まで足を延ばしており、最終の新幹線で博多へ戻る予定だった。翌朝8時には博多に戻らないといけないが、新幹線も高速バスも動いているとは思えない。「市職員だけど、友人を送り届けるまでは参集できない」という妙な責任感と後ろめたさでいっぱいになった。

そのとき、上司のN主幹から安否確認の電話があった。事情を説明すると、「とりあえず来なくていいから、必要になったら連絡するから、そのときはよろしくね！」と力強く言い切ってくださり、ふっ、と後ろめたさが消えていった。同じころ、車で近くにいたパートナーからも連絡があった。同様に事情を話すと、すぐに迎えに来て、友人を熊本駅近くの避難所まで送ってくれた。始発が動かないようなら迎えに来る、と友人に約束して、いったん帰宅した。N主幹や、パートナーの存在は、とても心強かった。

翌早朝、やはり電車は動かない。荒尾まで行けば始発が動くとの情報があり、車で送ることにした。無事に友人を送り届けた後の長い帰り道、妙に静かな大通りを走るうちに、ようやく、「被災したんだ」と実感し、苦しい気持ちがどっと込み上げてきた。

職場に到着したのは朝8時頃だった。この日は、職場の片づけや被害状況の確認、ルーチン業務の整理などをして、夜遅く、帰宅した。

そして、本震が起きた。

3 感染症対策業務① ～決断力・行動力・包容力～

本震後の出来事でまず思い出すのも、N主幹のことだ。

本震翌日、一時帰宅から職場に戻ってくると、作業服に着替えたN主幹が、消毒薬などを抱えて出ていこうとしていた。避難所から、「感染症の患者が出たので対応してほしい」と要請があったそうだ。「感染症をおこさない、拡げない」ために、迅速な対応が求められていた。初発生だったために、マスクミ対応の準備も必要だった。私だったら混乱して、何も手につかなかったかもしれない。

でもN主幹は、とにかく何でもすぐに決断し、行動される。考える前に体が動いているようにさえ見えた。それでいて、的確。

「とりあえず行ってくるから、今後、消毒薬とか手袋とかがたくさん必要になると思うから、在庫確認と購入の準備もしておいてね！」と、先を見越した指示まで残して出ていかれた。自分は不眠不休で働いているのに、部下には「大丈夫？帰れるときに帰って休んでね。倒れられたら困るから」と、常に気遣ってくださったことも印象に残っている。

こうしたN主幹の決断力や行動力、そして母のような包容力にはいろんな場面で、最後まで支えられた。

4 感染症対策業務② ～業務の範囲を超えて～

その後も、避難所運営などに人員を割かれる中、情報調整室や区役所、避難所から感染症対策の相談が次々とあり、物品や人手が足りなくなっていた。手当たり次第、発注するが、すぐには手に入らない。

そんな中、職員の一人が、家の近所の量販店で消毒薬を見かけたので買ってこようかと提案し、GOサインが出るとすぐに買いに行ってくれた。ある業者さんは、通常ルートでは納品が遅くなるからと、自家用車で鹿児島県の支店まで在庫を取りに行き、その足で夜中に届けてくれた。他課の職員たちは、届いた物品の配布や準備を手伝ってくれた。皆が、自分の業務の範囲を超えて、できることをやっていた。

そういえば、避難所へ物品を届けたときに、なりゆきでトイレ掃除まですることになったのも、今ではいい思い出だ。デッキブラシを握ったのは何年ぶりだっただろうか。

ほどなくして、九州の他自治体や全国の団体などから多くの支援物資が届くようになり、物資不足は解消された。避難所では他都市からの応援職員が、毎日の衛生管理や患者の早期発見・受診に尽力してくださった。多くの支援に、感謝している。

最終的な避難所での感染症発生数は、インフルエンザ10人、感染性胃腸炎12人、全て単発例で終わらせることができ、避難所内で拡がることはなかった。

5 LGBT 支援活動 ～見えてきた困りごと～

ゴールデンウィークごろから、LGBT支援グループでの活動も再開し、全国の支援者から送っていただいた支援物資を被災者(避難所)に届けたり、LGBT当事者や支援者を対象とした交流会を企画・開催したりした。活動にあたり、全国からいただいた支援や応援の言葉がとても心強かった。

ただ、このころ、職務と並行してボランティア活動を行うことが、正直とてもきつかった。休日もなく上司や同僚が出勤している中、職場に負担をかけてしまっているのではという思いもあった。しかし、交流会に集った参加者やスタッフたちが、「自分を偽らなくていい場所に来られてほっとしている」「震災を忘れて楽しみたい」「また参加したい」と笑顔で交流する姿を見て、こんなときだからこそ、必要とされている活動なんだと思い、続けることができた。

活動の中で、「震災とLGBTの抱える困難(困りごと)」が一つのテーマとなっていた。東日本大震災のときにも話題になったそうだが、例えば、心と体の性に違和感を持つトランスジェンダーの方からは、「避難所のトイレが男女別で周囲の目もあり使いづらかった」「避難所で、見た目の性別が異なるため、好奇の目でみられたり、不審がられたりして嫌な思いをした」といった話を聞いた。同性愛者の方からは、「同性パートナーとの関係が周囲に知られないよう、友人と偽るなど細心の注意を払った」「地震で負傷した同性愛者の友人のお見舞いに行きたかったが、関係が説明できないので諦めた」などと聞いた。震災で精神的にも肉体的にも疲弊している中、自身のセクシュアリティ(性)のことで、さらに心配事を抱える状況は、辛かったらと思う。

しかし、考えてみれば、これらは震災時特有の困難というわ

けではなく、程度は違えど日頃からよく聞くことではないか？とも思う。もちろん困りごととは人それぞれなので一概には言えないが、当事者の友人たちと話す中で至った結論は、「LGBTなどの多様な性について社会の理解がもっと進んでいれば、生じなかった困りごとが多かったかもしれない」ということだった。

6 終わりに ～あれから～

あれから3年近くがたち、着実に街の復興は進んでいるが、社会の意識はどう変わっているだろうか。自分は成長しているだろうか。決断力は、包容力は……なかなか、身につかない。

先日、地震からの復興のために地域で奮闘している方々とお会いする機会があった。足元の生活再建に加え、地域づくりを含めた長期的で持続可能な復興プランが必要という現実を目の当たりにし、「この人たちのために」自分も何か力になりたいと思った。正直、地震のとき感じたことを忘れかけていたけれど、風化させないことの大切さって、関わってみないとなかなか気付けないものだ。

復興の青写真を描いていく中に、多様な性に対する視点も取り入れていただけたらな、とも密かに思う。これからもっと社会の理解が広がって、友人たちの様々な困りごとが、少しずつでもなくなっていくことを願っている。

熊本地震 ペットをめぐる被災者支援

所 属	健康福祉局保健衛生部動物愛護センター	職位	所長	氏名	村上 睦子
-----	--------------------	----	----	----	-------

動物愛護センターは震源地の益城町から約7km、車で15分程度に位置している。震源地に近かったためか施設も被害を受け、建物を支えるよう壁の崩壊や敷地の地割れの他、給排水管の損傷、停電、ガスボンベの破損等、ライフラインも途絶え、ペット対応の拠点となるはずの施設が被害を受けた。

本稿では、被災直後から、全国からの多くの温かい支援に支えられ、人とペットの命を守るために、混乱の中で模索しながら進めていった取り組みについてご報告させていただく。

1 災害に備えた事前の取組

熊本市動物愛護センターは、平成14年に全国でもいち早く、犬猫の「殺処分ゼロ」の取組を開始し、平成21年には限りなくゼロに近づいたことから全国的に取り上げられ、ゼロの取組の草分け的存在にもなっている。現在でも、熊本市が委嘱する動物愛護推進協議会推進員（獣医師会や動物愛護団体、動物取扱業者、市民等）と動物愛護の普及啓発活動を中心に地道な取組を継続しているところである。

災害に備え、平成25年5月31日に、熊本県獣医師会熊本市支部及び薬品会社2社と大規模災害時の動物救護活動に関する協定を締結していた。

平成28年3月までには、熊本市の地域防災計画に、避難所のペット同行避難の項目を追加し、避難所運営マニュアルにペットに関する事項をも追加し、熊本県でも避難所でのペットの受け入れに関する手引きを作成して、市危機管理防災総室や各区役所等、関係部署に4月中に配布する予定で準備を進めていた。しかし、熊本地震の発生には間に合わなかった。

2 発災直後のセンターの状況

発災後、全職員の無事を確認。動物愛護センターの収容犬猫の逸走や負傷はなかったものの、建物を支えるよう壁の崩落、建物の周辺の地割れ、壁のクラック、プロパンガスの転倒、水道の寸断、施設内の机、パソコン、電話機、書棚等、殆どのも

のが転倒し、書類が散乱した状態で、何から手を付けたらよいか分からない様な状況であった。

3 他の自治体への広域譲渡

発災直後、飼い犬猫が行方不明になった、個人的に迷い犬猫を保護しているといった相談が普段の10倍の件数寄せられた。図は不明犬猫の問い合わせ状況である。ピークは発災後一週間程度で、6月上旬には通常の問い合わせ数に戻っている。犬の情報より猫の方が多き事が分かる。一方、保護犬猫の問い合わせ状況では、不明と同様に発災後一週間程度がピークであるが、猫よりも犬の保護情報が多い傾向が見受けられた。



8/7現在までの問い合わせ数: 667件(犬245 猫424)
通常の約10倍



8/7現在問い合わせ数: 279件(犬197 猫82)
通常の約5倍程度

このように、問い合わせが急増したことから、動物愛護センターで保護収容する犬猫が急増し、収容能力を容易に超えることが懸念された。そこで、震災後に収容する犬猫のスペースを確保するため、北九州市及び環境省の支援・協力により他の自治体へ犬猫あわせて55頭（犬43頭、猫12頭）を広域譲渡することができた。

4 犬猫の収容状況

犬は震災の影響で、4月に54頭収容し過去最高であった。しかし、飼い主の元に、約8割（41頭）の犬を返還できている。過去2年の同時期を比較すると、返還率は5割から6割程度であることから、返還率が高かった事が分かる。これは、平成21年度から動物愛護推進協議会と協働で行った「迷子札つけよう100%運動」で、迷子札や狂犬病の鑑札、済票の装着はもとより、ペットが迷子になったときの連絡先の周知を啓発した成果ではないかと思われる。

一方、猫は過去2年間の同時期と比較して収容頭数に特徴的な増減はなかったが、飼い猫が迷子になったという不明情報が増加していることから、飼い猫が野良猫化し、繁殖して新たな子猫の誕生や、負傷や衰弱した猫の収容が増加することが懸念された。

5 支援物資の支給

震災直後から、全国から支援物資が動物愛護センターに寄せられた。

熊本市内では、多くの店舗は休業し物流がストップしていた。動物愛護センターでは、物流が回復するまでの約1ヶ月間、ペットフード、猫砂、ペットシート、ケージ、サークル等の支援物資を被災者に支給した。約1カ月間で、受け取り者は1,000件を越えている。

また、ペットを抱えて何も持たずに避難所に避難された方もいて、避難所内で放し飼いの状態のところもあり、約200頭のケージ、サークルの貸し出しをしている。

6 動物愛護推進協議会推進員との連携

4月20日から熊本市動物愛護推進協議会の推進員と動物愛護センターとで避難所を巡回し、ペットと同行避難している飼い主の状況の把握に努めた。巡回先の避難所には、「迷い犬猫の連絡先」や、「ペット同行避難の心得」、「支援物資配布の案内等」のチラシやポスター」を掲示した。

7 緊急一時預かり制度の開始

避難所等にペットと同行避難している飼い主の体調が急激に悪化し、緊急入院などが必要になった場合、安心して治療に専念できるようペットを一定期間無償で一時的に預かる体制を環境省の支援で整備した。4世帯犬6頭、猫4頭を預かり、内2世帯のペットが飼い主のもとに戻る事が出来ている。この体制は避難所が閉鎖されるまで続けた。

8 熊本地震ペット救護本部の立ち上げ

熊本県、一般社団法人熊本県獣医師会、熊本市、一般社団法人九州動物福祉協会では、被災したペットの救護やその飼い主を支援するため、「熊本地震ペット救護本部」を設置した。救護本部では、（一社）九州動物福祉協会が運営する「熊本地震ペット救援センター（大分県玖珠郡九重町大字湯坪1625（旧やまなみ荘）」で、6月5日から被災ペットの一時預かりを開始した。預かり費用は無料で、これまでに熊本県全体で犬49頭、猫20頭（内、熊本市分犬36頭猫17頭）を預かっていただいた。

9 仮設住宅への支援

仮設住宅では、もペットとの生活を希望される方にスムーズにペットと入居できるよう、ケージやサークル、フード、ペットシート、猫砂などを配布するほか、入居後は動物愛護推進協議会の推進員とで見守りを続けるとともに、仮設住宅ごとに発足する自治の中で、飼育方法のルール作りを促す等の支援を行った。

10 まとめ

災害は突然やってくる。近年でも国内外でも大規模な自然災害が発生している。

熊本地震では、前震が起きた翌日、地震の後片付けに追われ、くたくたになってやっと就寝した17日の深夜に、誰も予想しなかった本震が発生し、その後も大きな地震と余震が繰り返し襲ってきた。現在でも地震が発生するとあの時の事が蘇えり、普通の生活のありがたさを身にしみて感じている。

ペットは人に安らぎを与えてくれる大切な存在である。日常を取り戻す為にも、心のよりどころでもあるペットと一緒に生活できる事が被災者の復興の力になるのだと思う。

飼い主は災害時もペットを適正に飼養し、ペットと一緒に災害を乗り越えられるように、自らの責任で日頃からしっかりと準備しておくことが大切である。そうすることで、避難所や仮設住宅等でのトラブルを最小限に抑えることができ、ペットに対して色々な価値観を持っている人々とも、協力して共に災害を乗り越えられるのではないと思う。

まもなく熊本地震から3年を過ぎようとしている。現在でも地震後生活が一変し、ペットを手放さざる得なくなった。体調を崩しペットを飼えなくなったといった相談が続いている。ペットも大切な家族である。これからも人とペットが穏やかに暮らせるように、一つひとつ丁寧に向き合っていきたい。

「支援」と「受援」

所 属	健康福祉局健康福祉部健康づくり推進課 (子ども政策課)	職位	技術参事	氏名	木原 薫
-----	--------------------------------	----	------	----	------

1 あらまし ～ 《初めての経験》 ～

今回私は、これまでの人生で経験したことのない、大きな揺れ、環境の変化、地震対応の業務などを経験し、辛さや日常のありがたみ、人のこころの温かさ、家庭と仕事の狭間に揺れる思いなどの様々な思いも経験し、改めて、「支援」と「受援」について考えさせられた。この手記では、4月16日の前震から概ね1ヶ月間に私が置かれた状況について、職員として他自治体からの保健師派遣の調整業務や被災者の健康支援体制に携わった際に感じたことを記載していこうと思う。

2 発災時の状況 ～ 《混乱に対処する》 ～

前震翌日、いざという時に夫婦共に子どもを両親に預けて仕事へいかなければならぬため、家族で夫の実家に身を寄せていた。家族でやっと寝付いた時に、再びの大きい揺れで目が覚めた。足先にあった大きなテレビ台が私たちの体の上に倒れてきたため、とっさに隣で寝ていた小学生の息子の上に覆いかぶさった。棚に置いてあったお酒の瓶が割れ、酒の中身や瓶の破片は、布団の上に飛び散っていたが、幸いみんなケガをせずに済んだ。当の息子はそんな状況にも関わらずぐうぐうと寝ていたので、こんな時に良く寝ていられるなとわが息子ながら感心したのを覚えている。子どもたちと高齢の両親の安全を確認し、片付けもできないまま、いつ帰れるか分からない状況に、今度同じような揺れがあったら、このまま高齢の両親に子どもを預けて行っていくのか？と子どものことを心配しながらも、夫婦で互いの無事を祈って実家を後にした。

職場では、棚が倒れ、パソコンが床に落ち、物が散乱している中で、集まってくる職員みんなが、呆然とした。その後、上司からの指示の元、区役所の巡回相談の状況や被災者の状況など情報収集や保健師派遣チームの要請などの準備が始まった。

業務としては、母子医療について、国からの情報を区役所保健子ども課に伝え、母子保健業務や母子医療等の対応について情報交換し、親子（母子）健康手帳発行や乳児健診の市外の受け入れ対応、準備等に追われた。職員みんなで役割分担しながら、互いに手探りで相談しながら対応した。混乱する中、職員みんな、家族のことや家のこと、車中泊しながらの出勤など、自身の不安を抱えながらも、互いに気遣う声かけや励ましに救われて発災後の混乱をこり越えたように思う。また、この経験が、その後の職員間の絆や信頼につながったように思う。

3 「受援」について ～ 《神戸市からの後方支援》 ～

他自治体からの保健師派遣チームによる避難所の被災者支援や健康支援が始まり、福岡市、北九州市に続き、19日から神戸市の派遣となった。神戸市は、震災経験と東日本大震災への保健師派遣など、被災地への支援活動で豊富な知識と経験を有しており、神戸市に当課の後方支援に入っていただいた。

神戸市からの4つのアドバイスは、①現場を見る②アセスメントする③これから起こりうる状況を予測する④対応するであった。まず、神戸市の保健師派遣チームと一緒に現場へ行き、家屋や道路の被災状況、避難所の被災者の状況などを見て回り、被災者や現場の職員などに話を聞いて回った。神戸市の保健師派遣チームは、それらの状況から、これまでの経験を踏まえて、ロードマップの作成や当課が何をすべきか動きの助言や資料の提供、作成の補助などをしてくださった。具体的に、我々と一緒に考え、熊本市の現状や使える機能、情報等に神戸市の情報や知恵等を加えて提案してくださり、一緒に作り上げ、保健子ども課等の他課と連携することができた。次々に変わっていく被災状況や方針に合わせて、対応のサポートをしてくださり、在宅支援者へのローラー訪問等について関係機関と検討していく際も、保健子ども課や自治体からの派遣保健師等が動いていける体制作りのために、市全体の方針としての保健活動や先を見据えた視点でアドバイスや協力をいただいた。おかげで、当課も落ち着いて対応することができた。

神戸市の保健師派遣チームの「熊本市のできることをしていきましょう」「一緒にがんばるから」、「大丈夫乗り越えられる」、「それでいい」、「必ず終わりが来る」など沢山の温かい声かけや励まし、労い、先のめどを示しながらのアドバイスなどは、疲労している我々にとって、とても身にしみる、頑張る力を与えてくれた。



巡回による情報収集



避難所にて段ボールベッド作成（東区）

また、災害対応に従事する一方、被災している自分の家のこと、子どものことなどがずっと気になっていても、市民も職員もみんな頑張っている中、そのことを簡単に言葉にすることができずにいた、私も含め母親でもある職員のことを心配し、温かい言葉をかけてくださり、思わず涙ぐむ私に、一緒に涙を流してくださった。初めての休暇を取る時にも後ろめたい自分の気持ちに対し、「あなたも被災者」、「休んでいいんだ」、「そのために私たちが来た」など声をかけてくださり、自分も被災者であることを改めて感じ、休むこと、母に戻ることは「明日への活力」「私の大事な役目」なんだと前向きに思うことができた。神戸市だけでなく、福岡市、北九州市、広島市、仙台市、千葉市、川崎市、堺市、東京都、京都府など沢山の保健師派遣チームが熊本市に応援に来てくださり、区役所保健子ども課の職員や当課と一緒に活動をしてくださった。そして、熊本市民の健康支援を進めていくことができたこと、我々職員のこころを救ってくださったことに、こころから感謝している。

4 終わりに ～《「受援」から「支援」へつなぐ》～

現在、まだ自宅に戻れない被災者がいる中、熊本地震は終わっていない。また、近年、世界中のどこにいても、地震や水害など災害は頻発している中、いつどこで災害は起こるかわからない。だからこそ、被災地としての経験を風化させてはいけなし、経験したことを学びに、変えていくことが大事だと思う。「受援」することを経験した、我々が支援する側として、被災地としての経験を他自治体へ伝えていくことで、お役に立ていけたらと思う。また、不幸にも被災される地域がある場合は、物質的支援、人的支援は勿論だが、経験したからこそ分かる、辛さを分かち合える「支援」をしていくことで、我々が受けたご恩を少しでも返していけたらと思う。

被災した母子への後方支援

所 属	健康福祉局子ども未来部 (医療政策課)	職位	部長	氏名	島村 富子
-----	------------------------	----	----	----	-------

1 あらまし

2016年の4月14日の21時26分、自宅で突き上げるような立てゆれに始まり、震度6弱の横揺れ、家の中のものが壊れる音、恐怖の時間が過ぎ庁舎に向かい、執務室や施設等被害状況の把握し等夜に帰宅し、生活ができるぐらいの自宅の整理をし就寝に着いてすぐ、16日の1時25分に震度6強の本震があった。とても長い横揺れで、家が潰れるかと思い、まさか地震のぶり返しがあるときたことがあるが、前日より大きな地震が二日後にくるとは、また来るのではとの恐怖でいっぱいになったことを思い出す。

この手記では、4月14日の発災から1か月まで、子ども未来部長で保健師という立場で取り組んだこと、恐怖により避難所生活を2週間して感じたことを記載していこうと思う。

2 発災時の状況

～ 《自宅も被災し98歳の舅と避難生活》 ～

2016年の4月14日午後9時26分、震度6弱の地震を自宅であい、夫婦共々何が起こったのか呆然とするなか、夫は98歳で一人暮らしをしていた舅の安否を確認に行った。参集しなくてはと思い、家にあるパンやペットボトルなどの食料や清潔用品をバックにつめ、すぐ動けるような服装や運動靴で本庁まで歩いて向かった。途中、舅の家の前を通ると、家が傾き被害があり中にいるのを躊躇したのか、夫と舅2人で外に座っていた。私たちが家に引き取ることを決め、私は庁舎に向かった。

16日1時25分震度6強の本震は、揺れが長く、家財も倒れたり、また玄関が開かなくなったりなど、自宅も大きな被害に会い、自宅にすることができず、98歳の舅をつれその日は

寒かったので、毛布や敷物をもって近くの公園に避難した。

その後、当初の避難場所はいっぱいの情報を得て、舅と3人千原台高校に避難した。その後も震度5の地震を千原台で経験したが、感じる揺れやものが割れる音などなく安心して過ごすことができた。昼間は、私も夫も仕事に出たので、舅はひとりになったが、パンやおにぎりの配布のお知らせを難聴や目も不自由であったため取りに行くことが困難だったが、近くの方々のお世話を頂き食べることができ、持っておられた食料を分けてもらったりしたようだ。一緒に避難していた方のお世話になり、とても感謝しています。

3 被災母子の支援をコーディネート

～ 《子ども未来部の保健師として》 ～

職場では、発災当初から職員による関係施設等の被害状況の把握等が始まった。国からの問合せも部署から各々に聞いてこれられ少しずつ違いその対応に追われた。

そして、福祉避難所の開設が始まり、母子特に周産期（出産から1か月まで）の方々の対応の相談があったが、熊本市の協定は、対象を障がい者と高齢者としていたため、どうするか検討した。施設をどうするか、対象範囲や期間をどうするか、周知の方法など話し合った。施設については、現在協定を結んでいる施設で対応できるところを問い合わせし開設することとした。また、周知については、保健子ども課と市内産婦人科医にチラシと趣旨を配布した。施設が高齢者向けの施設であったため、食事の問題等々あったが、30件ほどの利用があり、喜ばれた。

また、区役所の地域担当の保健師たちから、発災直後から保健師による避難所等巡回をする傍ら、要配慮者の安否まで手

が回らないとの話を聞いていた。丁度その頃、退職された保健師から、何かできることはないかとの相談があった。ボランティアとの立場での支援がいいのではと提案し、市社協のボランティアセンターに問い合わせをし、保健子ども課と退職保健師の会とをマッチングして頂けるよう相談したところ快諾してもらい安否確認の支援を実施された。日頃は中々電話も繋がらないお母さん達も、電話による安否確認は喜ばれ安心感に繋がったと聞いている。

熊本市市民病院の助産師さんから、地域で被災のため困っている母子の支援をしたいとの相談があり、区役所の保健子ども課の業務支援はできるとの返事だったので、母子業務の主管課である健康づくり推進課へつなぎ、区役所で母子保健手帳の発行に伴う相談業務を支援いただいた。保健子ども課の保健師は避難所巡回をしていたため、とても助かったと話していた。

5月になり、幼児検診の再開の話が持ち上がり、部は違ったが検診を始めることで日常が戻り、母子の安心感にもつながるので発災3週目であったが開始することの重要性を、主管課を後押しした。それに伴い子どものPTSDの対策としての役割の重要性についても助言し、開始する運びとなった。他の機関

でのPTSD対策として、保育幼稚園課に児童相談所の職員を紹介し講演会を開催するようアドバイスし、子どもとお母さんと接するとき気を付けることをしっかり認識することができ保育の現場でしっかり活用していただいた。

4 終わりに

今回の震災は、私たちにとっては、行政の立場でも一住民としても、震災への備えは、常日頃から考え準備しておくことが大切と痛感させられた。それは、食料などの物品の備えだけでなく、日ごろからの震災を想定しての訓練などの積み重ねが重要と再認識した。

今回の地震では情報が中々取ることが困難で、自ら動いて取る努力が必要だったと反省させられた。また、情報発信についても、実際に被災された方に接する現場の援助者に届かないと利用できないことも痛感し、発信の手段や誰にまで想定することが重要だと感じた。

まだまだ元の生活に戻られていない方々もおられ、1日も早く復興がなされることを願います。

熊本地震を振り返り

所 属	健康福祉局子ども未来部子ども支援課 子ども・若者総合相談センター	職位	所長	氏名	馬原 葉子
-----	-------------------------------------	----	----	----	-------

当センターは、24時間年中無休での電話相談、その他メールや面接等により、子ども・若者に関するあらゆる相談に応じ、情報の提供及び助言を行い緊急・困難なケースを関係機関と連携し早期支援に繋いでいる。(平成26年4月開所)

平成28年4月14日、16日と二度の未曾有に起きた熊本地震にて、職員並びに相談員も被災者となり、安否確認を行ったが電波が繋がらないことや充電が出来ずに緊急連絡に困難を期した。

本震後、余震が頻繁に発生するなかこれから地震による不安や悩みをもった相談者が増えるであろうと想定し、センター職員と相談員の協力のもと速やかに相談体制を固めることに徹した。

まず相談体制の取りかかりとして、地震による心のケアとしてこころの健康センター、各区の保健子ども課と連携した「被災されたお子さんをお持ちの家族の方へ」というチラシを避難所と5月の検診で配布し、避難所で困り感をもつ親から子どもへの関わり方や親自身の心の不安をもつ相談者には相談員がしっかりと寄り添い軽減に努めた。

次に、避難所での物資状況や給水場所、医療機関に関する日々変動する情報をいち早く収集することで相談者への生活に関する最新情報の提供に役立てることができた。

さらに、相談員の統制を図るためマニュアルを作成し、マスコミからの問い合わせ、一時保護、入所した子どもの状況や子ども・若者に関する相談等についての基本的な対応方針を固めていった。

地震による初期対応が落ち着き始めた頃、地震後のケアに関する研修や講座等に相談員を積極的に派遣する等相談対応の充実を図った。

こうしたなかで、平成28年度の相談をみると、総件数は6,867件、うち地震を絡めた相談は337件と全体の5%を占めた。傾向としては平日開庁時よりも平日閉庁後の夜間及び土日祝日の方の相談が多く、地震が夜間に発生したことから、同時時間帯になると不安が高まることが心理的にうかがえた。

相談内容では、避難所での人間関係が1番多く、次に精神疾患の悪化、不眠、食欲不振など健康面への心配、3番目の育児に関する相談では、子どもが怖がる、夜眠ろうとしない、家に入ろうとしない等、どのように対応したらよいかわからないといったものであった。

熊本地震から2年9ヶ月が経ち、復興・復旧への取り組みがなされるなか、災害によるこころの傷跡は大きく心身のケア支援へはまだまだ向き合っていかなければならない問題であり、今後も多くの悩みや不安を抱える相談者に適切に対応できるよう、情報の収集並びに相談員研修を重ね相談体制の充実を目指すものである。

震災時の児童相談所と一時保護所

所 属	健康福祉局子ども未来部児童相談所 (子ども発達支援センター)	職位	所長	氏名	中村 恭子
-----	-----------------------------------	----	----	----	-------

1. 発災時の状況

発災時、私はちょうど自宅に一人きりで洗面所にいたが、突然の轟音と激しい揺れを受けて最初は何が起こったのかわからなかった。何秒か経ってやっと地震だとわかったが、まさか熊本が震源とは思わなかった。洗面所の隣が台所まで至近距離にある冷蔵庫が揺れていて、防災番組では「台所の冷蔵庫が倒れて危ない」と言っていたので、「離れなければ!」と頭では思ったが、体は全く動けなかった。

揺れがおさまってテレビを見ると「熊本地方が震度7」と放送していた。(震災を通して、停電が少なかったため常にテレビやスマホで新しい情報が得られたこと、電話で連絡が取れたことには本当に助けられた。新聞もページ数が少ない時があったが、ちゃんと届いた。)

LINEで家族に無事を伝えていたら、夫が帰宅した。夫は東京出張を終えて熊本空港から車を運転して帰る途中で揺れに見舞われ、「急にハンドルをとられて、右に蛇行してしまった。最初は何があったのかわからなかった。」と言っていた。お互い職場に行かなければならなかったのに、車で一緒に家を出た。信号は点いてなくて、車は思ったより少なく、パニック・火災・ガス漏れ等は無さそうで、白山通りの交差点もお互い道を譲りあって通行していた。

職場に向かいながら、一時保護所の子ども達のことを考えていた。保護者の意向に反して職権で保護中の子ども達だ。「子ども達に何かあったら児相の責任だから、しっかりしなくては。」と自分に言い聞かせていた。

2. 児相業務について

児相に到着して、すぐに保護所に行った。子どもたちは皆怪我ひとつなく、ラウンジに集まって毛布にくるまってテレビのニュースを見ていた。子ども達が家族の安否を心配しているので、それぞれの子どもの担当職員が保護者に電話をかけて、子どもと保護者双方の無事を伝えるメッセージャーになった。児相による一時保護に納得していない保護者も多かったと思うが、「(自分も被災してしまい今後どうなるかわからないので)子どもは保護所にいる方が良いと思う。」と判断される保護者が多かった。

また後日談として聞いた話だが、保護所職員は建物の倒壊や火災も想定して、万一の際の避難経路・救援を待つ場所を消防局に相談していた。その後本震に見舞われたが、幸いな事に消防の出動はなくて済んだ。

前震と本震で職員一同疲れていたが、その後は被災後も必須の児相業務(虐待対応等)を続けながら、震災時の児相業務(児相が関わる子どもと保護者の安否確認と支援、特に施設措置や里親委託中の子どもの安否確認と安全確保、避難所で過ごす親子からの相談対応等)を行った。私は4月に所長になったばかりで戸惑う事が多かったが、当時の県中央児相の所長から「災害時における児童相談所の活動ガイドライン」(東日本大震災を教訓にして平成25年に厚労省が作成したもの)を教えてもらい、それに沿って業務を行った。ガイドラインには、災害時の業務の一つに「避難所にいる孤児や遺児の保護」も挙げてあった。熊本地震では必要なかったが、東日本大震災では保護者を喪い避難所でひとり過ごした子どもがいたということに気づかされ、その被害の甚大さに胸を衝かれる思いであった。また、九州各県の児相から「子どもが一時保護所で生活できないなら、うちでお預かりしますよ!」とありがたい申し出をいただいた。保護所の調理場ではコンベクションオープンが壊れて調理不能となっていたが、職員がカセットコンロを持ち込んだり、業者さんが自宅で調理したものを届けてくれたり、皆八面六臂の大活躍であった。

今振り返ってみて、児相が震災後も業務を行うことができたのは、まず何より児相職員が無事であったこと、建物の被害が軽く執務可能であったこと、サーバーが無事でシステムが機能したこと、(自家発電だったが)電気が使えパソコン・電話等の機器が使えたこと、そしていろんな方々からの有形無形の援助をいただけたからだと思う。

3. 最後に

5月半ばに厚労省の方が市内の養護施設を訪問された際「今までの震災の経験が無駄にしないよう、国もさまざまな施策を行ってきた。」との話をされた。確かに阪神・淡路大震災の時に比べて都市の建物やインフラは強くなったし、DMATが創設されたし、救援物資の補給や災害への人々の備えについても進歩が見られる。

そのような国の施策もあるのだろうが、やはり人は思いがけない苦難に見舞われても、それを教訓にして少しでも良い方向を目指す強さや知恵が標準装備されているように感じる。

熊本地震を経験した私たちも、私たちだからこそできる提案をしていかなければならないと思っている。

保育園の現場で起きていたこと

所 属	健康福祉局保育幼稚園課城東保育園	職位	園長	氏名	諸熊 理津子
-----	------------------	----	----	----	--------

1 前震の夜から

熊本地震の前震が発生したのは、城東保育園に異動してきてから、14日目。日曜日や、週休を除くと実質11日目の4月14日夜のことだった。

大きな揺れに驚きながら、テレビのニュースに目を向けると、震源地は熊本県の益城町。最大震度は7というニュースを耳にし、当時の園長先生にすぐに電話をした。園長先生の自宅は益城町だった。電話は通じたが、園長先生は、「もう家に入れない。明日、申し訳ないが園には行けそうにない」と言われ、園児を受け入れるにあたり、いくつか話された。

異動してきたばかりで保護者の顔も、子どもの顔もよくわからない中で、前震の翌日の受け入れが始まった。全体でも30数名と少ない人数だったが、何度もくる余震に不安な思いだった。そんな中だったが、私をはじめ職員は皆、余震はあっても、もう大きな地震がくることはないと思っていた。通常、20時まで開いているが、その日は全員が18時半までにお迎えがあり、延長保育はなく、その日の保育が終わった。

そんな中、16日の夜中に本震が発生した。園長先生からは、避難所に避難をすることと、道も寸断され、保育園まで行けないと連絡があった。

本震の翌日、出勤をすると、前日とはまるで違い、色々な物が倒れ、散乱している状態だった。土曜日だったことと、子どもも多くは登園しないだろうと見越しての3名で出勤したが、月曜日から、園を開けなくてはいけないことを考えると片付けに必死だった。就職以来20数年、どんなに大きな台風がきて、保育園が休園になったことはなく、この時も休園になることより、どうやって受け入れようということばかり考えた。

園は、電気は付いたが、水は出ず、ガスも使えない状態だった。余震が続く中、閉園が決まったと連絡があったのは、16時頃だった。2名の職員で手分けをし、在園児140名に地震後の安否確認とともに、休園のお知らせを連絡した。

2 休園になってから開園まで

18日（月）から、子ども達は来なかったが、園内外の片付けや修理をした。避難所が開設され、職員も交代で避難所に行くようになった。

21日（木）から、職員でいくつかのグループに分かれて、避難所へ、出前保育にでかけた。城東保育園からは、熊本学園大学、熊本大学、城東小学校へ職員が何人かに分かれてでかけた。ブロックや、絵本、ままごとを持って行ったり、絵本のよみかせや、パネルシアターなどを行なった。体育館の中ばかりで遊べない子ども達はとても喜び、「明日も又来る？」と声をかけたそう。

25日（月）から、園の開園が決まった。開園の条件は、ライフラインが確立していることであった。2階は水圧が足りず、

水が出ない状態だったので、開園にむけて、トイレを流すための水をペットボトルに入れて、2階のトイレに運んだ。今でも2階のトイレには、なぜか片付けることができず、ペットボトルに入った水が置いてある。

当面の間は、延長保育はなく、朝の7時半から、夕方6時半までの受け入れとなった。25日の開園初日は、全体で84名の方が登園された。保護者の方々は皆さん口々に「保育園が開いてよかったあ」と言われ皆さんが困っていることが理解できた。その一方で、仕事に行くために県外の祖父母にしばらく預ける家庭もあった。避難所から保育園に通う子どももいた。登園してきたことで、子ども達がこの地震で色々な経験をしたことがよくわかった。何度も起こる余震の中、子ども達を守ることを一人ひとりが必死だったように思う。地震の話をし、子ども達との約束事を作り、部屋に貼った。少しでも音がすると保育士にしがみつく子ども。トイレに一人で行けない子ども。子ども達も様々なストレスを抱えていることがわかった。

26日に緊急預かりサービス事業が始まった。自分が通っている園が休園で仕事に行けない保護者のお子さんや、地震の片付けで保育ができないお子さんを城東保育園でお預かりした。園の1室を使用した。担当保育士は、休園になっている公立保育園から毎日交代で保育にあたった。5月14日（土）の終了日までに、のべ110人の方が利用された。

色々な県から支援物資が届いた。城東保育園は、物資を置く場所があるため、物資を一時置き、他の保育園が取りに来られた。紙おむつ、粉ミルク、お尻ふきなど、頂いた物は大変助かった。残った物は、園の災害物資にした。地震をきっかけに、園の災害用の備蓄を見直し、備蓄の場所を確保した。

子どもも大人も初めて経験した大きな地震に体も疲れていたが、心も疲れているようだった。そんな中、5月23日（月）に保育幼稚園課主催の「子どもの心のケア研修」があった。地震後、子ども達の行動で色々と感じることがあった。気になりながらもどんな対処をしたらいいかわからない中で受けた研修は、とても勉強になり、職員で共通理解をし、子ども達のケアに努めた。

3 熊本地震を経験して

振り返ってみると、地震からの2年半が、長がったのか短かったのかよくわからない時がある。しかし、あの経験をしたことで、わかったことや、もっと考えなくてはしなかったことが見えてきたように思う。熊本には地震は来ないと思っている自分がいた。本震の時に子ども達が目の前にいたら、どうなっていたのだろうと考えると怖くなる。何の経験のない私たちが守ることができたのだろうか。子ども達が保護者の元にいる時で本当によかったと誰もが思ったと思う。しかし、今は、あの経験を一人ひとりがしっかりと活かし行動し、後世に伝えていかなくてはいけないと思う。

熊本地震の発生から

所 属	健康福祉局保育幼稚園課	職位	主幹	氏名	村尾 仁美
-----	-------------	----	----	----	-------

1 前震 14 日

熊本地震の前震の時は、友だちと居酒屋で飲んでいて。大きな揺れを感じ外に出たら、人々の悲鳴と泣き声・・・と共に街中が真っ暗でいたところで液状化現象が起きていて躓きながら転びそうになりながら役所にたどり着いた。早くついたが、何をしようかわからず、とにかく安否確認を公立全園に行った。

家に帰ると出産で帰ってきていた娘が「公務員だから仕方ないけど、家に誰がいることだけは忘れないでね」と・・・。確かにすっかり家の事など忘れていた。

余震が起こる中で次の日は、保育園の状況確認等が始まった。

2 本震 16 日から

かなりの揺れが夜中に発生した。ライフラインが閉ざされた中、職場にいかなくても・・・の思いと共に、公立各園長にメール、電話連絡した後 14 日の事をふまえてまずは娘と孫を安全な場所に・・・との思いで実家の前の公園に連れて行き義母とその公園に居るように伝え、職場に急いだ。

職員全員の安否確認を行い、夜が明けると園の状況確認と園児の安否確認が始まった。

各園より、ライフラインが切断されている。液状化現象で陥没がみられる園等、様々な状況報告があり閉園の判断がでた。開園の条件として

- ① イフラインが全部整っている。
- ② 施設の安全が確保されている。ことが条件となった。

3 公立園の職員として

園からは、「出前保育に行きたい。」「何をしたらよいか？」の問合せも多く、まずは出来る事から始めようと決め、園の近隣地域の避難所の様子等を見に行くところから始めた。各園地域の避難所で子どもたちには遊びの提供、お年寄りにはお喋りの相手等自分たちでできることから小さな支援が始まった。

私は、園の小さな支援の報告とこれからの指示と同時に職員の物資支援応援隊と避難所対応班等の人数割り当てに対する人の確保を受け持った。【積極的に応援職員として頑張りたいが事情があり出来ない職員。昼間なら時間がとれる職員、避難所に夜間でいける職員、園に残る職員の把握。】これが一番大変だった。明日の人数が本日の昼過ぎしかわからなかったり、人数も定まらず・・・。その人数を受けて、園に動員をかけ人選をし、確定していく。人が集まらなると個別に連絡をとって確保し報告するという毎日だった。その中で男性保育士が担い手としてかなりの発揮をしてくれたことで感謝している。

物資支援応援に午前中は行き、夕方から避難所対応に行く職員もいた。男性保育士を統括してくれる職員も出てきた。私ももちろん避難所担当として夜を経験した。

それと並行し【臨時預かり保育サービス事業】を開園可能な園から始めた。『被災者の方が復興作業等に伴い、一時的に家族における育児が困難な児童。開園が困難な保育施設に通う児童。』が条件だった。初めて園にきて大泣きするかと思っていたが、子どもなりに自分がおかれている現状を把握しているかのように親と別れて朝から夕まで在園したことのない園に通園してくる子どもたち。その子どもたちの心を精一杯おもてなしできたらと、まだ開園できない園からの応援職員も派遣した。この事業の日々の子どもの人数把握とそれに対しての職員の応援人数の確保も私の業務として行った。

少しずつ生活も落ち着き私たちにも余震慣れがあった。5月23日（月）には「子どもの心のケア研修」を児童相談所と子ども発達支援センターの応援により開催した。子どもたちの心と行動及び保護者の心によりそう保育園等の職員としてみんなが自覚を持ち、心身共に元気を取り戻そうと一つひとつ取り組んだことと思う。

4 それから・・・振り返ってみて

私たちにできる事はなにか？と一人ひとりが保育園の職員として考え行動する姿があった。公立保育園として拠点園となり頑張っていくことも経験できたと思う。災害に備えて作成していた防災マニュアルを保育士、調理師がそれぞれの分野で見直し、保護者、職員用の緊急メールの整備等を行なった。まだまだ整備していかないといけないこともたくさんある。熊本地震を経験したものとして活かしていきたいと思う。

被災した動植物園

所 属	経済観光局観光交流部動植物園 (食品保健課)	職位	技術参事	氏名	上野 明日香
-----	---------------------------	----	------	----	--------

1 あの日、あのとき、あの場所で

当時、わたしは熊本市動植物園の獣医師兼チンパンジーの飼育スタッフとして勤務していた。平成 28 年 4 月 14 日 21 時 26 分 M6.5 震度 7 (本園震度 6 弱) の熊本地震 (前震) 発生、その日は動植物園を出たばかりで、市民病院の付近を運転中だった。突如ハンドルを取られるような大きな横揺れ、周囲の車が次々とハザードランプをつけて路側帯による中、携帯から地震アラートが鳴り響き、咄嗟にハンドルをきり、動植物園へ U ターンさせた。22 時のミミナガヤギの人工哺育当番を交代してもらった上司がまだ動植物園にいる・・・上司は？動物たちは？動植物園は？咄嗟に電話した上司とはすぐにつながり無事が確認でき、直ちに動植物園へ向かう旨を伝えた。数分後に戻った動植物園正門の前の道路や駐車場は、亀裂が入って陥没し、水が噴き出していて、足元がみえない状態だった。事務所に恐る恐る戻り、2 階から降りてきた事務職員に状況をききはじめたとき、園内から上司も戻ってきて、倒れたロッカーの隙間からこわばった表情の上司と目が合った。

2 足元が崩れて水が噴き出す緊迫の動植物園

地震後 15 分で集まれた、獣医師 2 名 (上司と自分)、残業していた事務職員 2 名、夜間の守衛 1 名、近所に住んでいた嘱託職員 1 名の 6 名で、とにもかくにも獣舎の破損状況と動物たちの安否確認が必要と、ヘルメットをかぶり懐中電灯を持って、一緒に園内の見回りを始めた。万が一獣舎が壊れて動物たちが脱走していた場合、気がたっている怯えた猛獣などから襲われる可能性もあるため、まずはクマ舎と大型ネコ科獣舎から巡回した。1 つ 1 つの寝室を懐中電灯で照らしてのぞき込み、1 頭ずつ安否確認と、脱走する穴があいていないか、周辺にひそんでいないかを確認しながら進んだ。1 人の獣医師が襲われた場合、もう 1 人が急いで麻酔銃や吹き矢を取りに行く段取りで、緊張状態が続いた。足元は暗闇、警報ランプが点滅し、あちこちに亀裂が入り、隆起や陥没、泥水も噴き出して液状化、時折歩けないほど大きく揺れる中、逸る気持ちを抑えてときにしゃがんで揺れがおさまるのを待ちながら、一歩ずつ進んだ。

猛獣舎の動物たちの安否確認が済んだ頃、事務所から園 PHS に「ライオンが逃げているのか」という問い合わせがあり、そんな偽情報がネット上に流布しているとは思ってもおらず (後に軽い気持ちで偽情報を掲載した男性は警察の捜査により逮捕)、「ライオンは寝室にいるのを今確認したばかりだ」と

伝えた。しかし、そのとき同内容の電話相談が殺到してその数 100 件にのぼっており、事務職員は本庁の本部とも連絡がとれないほど電話対応に追われていた。このとき、本庁のサーバーもダウンして、動植物園のホームページでも正確な情報を伝えられない状況だった。地震発生から 1 時間後、かけつけた飼育スタッフ 16 名 3 班体制で自分たちの担当動物への対応をはじめた。23 時 30 分動物の脱走なし、死亡個体なし、15 日 2 時にはスタッフ全員の安否確認もできた。ほとんどのスタッフが朝まで動植物園で待機し、余震が来るたびに自分の担当動物を中心に見て回り、明るくなってからは再度被害状況の確認にあたった。この時点では停電もなく、県内の高速道路は不通だったが一般道路は使用できていたため動物たちの飼料搬送ルートは確保できていた。15 日の時点で、とくにユキヒョウ舎の展示場側の天井鉄柵の損壊、ネコ科猛獣舎周囲の大きな地盤沈下や隆起、亀裂が多く確認されたことから、日本動物園水族館協会 (JAZA) に連絡を取り、猛獣 4 種 5 頭を緊急避難させたい旨を伝え、加盟園館へ急ぎ協力要請した。さらに、給排水管断裂による断水に対しては、隣県のマリンパークやうみたまごなど水族館の方々が、15 日の夜に大小タンク (1000ℓ : 1 個、500ℓ : 2 個、20ℓ と 18ℓ : 24 個) をトラックで持参してくださった。この夜はスタッフ 2 名を待機で残し、解散した。



「おいふざけんな、地震のせいでうちの近くの動物園からライオンが放たれたんだが、熊本」

3 本震発生とスタッフの奮闘の日々

その夜中、平成 28 年 4 月 16 日 1 時 25 分、M7.3、最大深度 7（当園は震度 6 強）の本震が発生した。動植物園全域で停電、断水、建造物の倒壊、獣舎や観覧通路の更なる損壊が広がった。わたしの住まいや周辺道路の損壊も著しく、崩れた屋根瓦や塀が散乱し、切れた電線が垂れ下がってショートする中、近隣の避難所へ歩いた。そこには続々と避難してきた人々で溢れていて、家族と職場へは SMS で命の無事とすぐには動けないことを連絡し、避難所体制をつくる準備に集中した。体育館倉庫からマットやイスや布を出して外に並べ、プールの水をトイレへ運ぶバケツリレーを行った。途中、職場のスタッフから



動物たちの安否情報と明るくなったら片付け始めるといふ話をもらい、わたしも空が少し白み始めて足元がなんとか分かるようになった頃、道路の瓦礫を近隣住民とよけて、車を職場へ走らせた。着くとすぐに、資料館館長から水槽が割れて破片が散乱し、水浸しだと応援要請がかかり、すぐに作業にあたった。クロコモザル舎とワオキツネザル舎は傾き、チンパンジー舎とグラントシマウマ舎とポリピアリスザル舎の外の放飼場も、動物を外に出せないほど大きく損壊していた。さらに大きい地震が起こる場合を想定して、クマ、ネコ科猛獣、シマウマ、チンパンジーなど被害の大きい獣舎の動物たち用の麻酔薬を 1 頭ずつ年齢・性別・体重などを考慮しながら手計算し直し（停電でパソコンが使えないため）、半数の獣医師が動植物園に異動してきたばかりであったため必要な仕事を合間に教えながら、後片付けにあたった。2 日間肉体労働と精神的にはりつめた状態で疲労しているスタッフを帰した後、大小の吹き矢を夜中に黙々と 100 本つくった。このとき、園に貢献して下さった動物ボランティアさんが亡くなった知らせが入り、後に震災関連死と判定された。また、本園の動物たちの調査研究や実習で

緑深い東海大学阿蘇キャンパスの学生さんも、地震により尊い命をおとされた。この日、動植物園の被害全貌が明らかとなり、ここから長い無期限の休園がはじまった。

真っ先に心配したのは、動物たちの水の確保だった。園内の地下の給排水の配管はあちこちで断裂して使用不可能だったが、園に隣接する江津湖側に湧水箇所が 2 つあり、動物たちの飲み水や清掃のための水を始業前や終業前に確保する日々がはじまった。水汲みだけで毎日 30 分かかり、車も通れない損壊が激しい場所へは、両手に 20ℓ タンクをもって亀裂や凹凸、瓦礫や壊れた遊具をまたいで運んだ。わたしも毎日 20ℓ 12 個のタンクをチンパンジー舎へ運んでいた。猛獣輸送のための檻準備もはじめた。そして、動物たちへの対応に追われているうちに、自分たちヒトの食糧がないことに気づいた。心配してくれた九州隣の動物園の方々が余震の中、車で水や食料を持ってきてくださった。また、震源地に近かったわたしの住まいも大きな損壊で住めなくなり、学生時代の友人たちが食料や日用品を送付してくれた。避難所生活を長期間過ごすことになったスタッフも複数いた。

緊急猛獣移動が完了するまでは夜間の交代勤務を行い、4 月 22 日、JAZA が手配した大型トラックが各園からの支援物資を山積して到着した。物資の入ったダンボールには各園スタッフの手書きのメッセージがあり、中には、東北地震の際に津波で大切な方や家をなくされたスタッフがいる仙台の八木山動物園の方々からの応援メッセージもあった。それを見つめながら、わたしたちはまだ生きている、助けてくれる仲間がいる、助かったこの命は動物のため、周りの人々のために尽くさねば、と心に決めた。荷下ろし後、空になったトラックには、吹き矢麻酔で眠らせたネコ科猛獣 4 種 5 頭を入れた輸送箱をのせて翌 23 日に九州 4 園館に発った（この日から猛獣たちが再び戻るまでの 2 年 6 ヶ月、長期にわたり受け入れてくださったのは、福岡市動物園、大牟田市動物園、到津の森公園、九州自然動物公園





の4園館)。

園スタッフは、震災後は避難所対応（支援物資の手配、在庫管理、喫食メニュー作成と提供、相談対応）、罹災調査、市内に溢れる震災ゴミの撤去作業、夜間勤務や臨時異動などにより明らかな人手不足となり、長期にわたる連続勤務となった。それでも飼育スタッフだからこそできることは他にもあるはずと、地震発生前後の動物たちの行動変化をみて思いを強くした。

動物たちへの心的影響は大きく、とくに大きな余震が頻発していた地震発生から1週間に不安様行動が頻繁にみられた。アフリカゾウは夜間眠れず目は充血、耳を広げて興奮状態でぐるぐる回り、便もゆるくなって食欲も低下した。カバは、呼んでも水からあがってこなかった。獣舎の損壊が著しかったグラントシマウマは、被災時全頭が顔に擦過傷を負い、余震がくると警戒声を発していた。クジャクは、小さな余震にも反応して鳴き、わたしたちも余震の合図としてとらえていた。ヒクイドリも羽毛の逆立ちと警戒して起立する行動がみられた。とくに大きな影響を受けたのが、わたしたちの仲間、霊長類たちだった。共通点として、食欲不振（キンシコウのメス、アンゴラコロブス、マンドリル、チンパンジー）、被災した場所である寝室へ入りたがらないという行動がみられた。また、揺れの中、マンドリルとチンパンジーは必死に格子にしがみついていた手指に擦過傷を追い、チンパンジーの部屋のあちこちに軟便跡があった。



余震のたびに、警戒声をあげて天井にかけあがりしがみつくチンパンジー

た。表情豊かなチンパンジーが浮かべる不安の色の濃さに、胸が痛くなった。また、園から消えたこどもの声とその先の見えない静けさは、このまま閉鎖になる

のではない、動物たちはどうなるのだろう、傾いた獣舎や断水はいつ直るのか、衛生状態を維持できるのか、スタッフの心にも色濃い不安の陰がおちていた。そんな動物やスタッフの様子



被災時の個室という環境になると落ち着かず格子を引っ張るチンパンジー

を見ながら、飼育に携わるスタッフだからこそできることは何だろう、自分に問い続けた。そして、すべての飼育スタッフに、地震前と後の担当動物たちの行動変化をきき、心的不安定な個体の行動をさらに注意して観察し、それぞれの担当者の対処方法をきき、必要なときは話し合いながら少しでも落ち着ける環境づくりに徹した。ゾウやチンパンジーの健康管理訓練も彼らが落ち着くのを優先して停止した。とくに、チンパンジーの中でもヒトが育てた人工哺育の1個体は、不安でからだをよせてきたり視線がさだまらず右往左往したり格子を引っ張ったり鼻声でなくこともあった。声をかけながらからだをさすり、指をさしだしてくるときは指をにぎりました。寝室では食欲がなく入りたがらない個体には、寝室に無理にいれることはせず不安の少ない場所で給餌して、とくに不安が顕著にみられた個体は、はじめ30秒程度から入室にならしていき、5分、10分、30分、1時間・・・それを続けて、半年かけてやっと寝室に泊まれるようになった。

さらに、市民の方々は地震発生時のライオン脱走偽情報の流布や休園で中の状況が把握できない日々不安な気持ちで過ごしているのではない、動物の安否を気にかけてくれている方々がおられても、今はそれをきける時期ではないと遠慮して口に出せずにいるのではないだろうか・・・そんな思いから、地震発生時から停止していた園ホームページで、園の状況を確認したい人に正確な情報が伝わるように飼育ブログを再開したいと上司に掛け合った。思いが伝わり園長からの了承を得て、その日からすべての仕事を終えた夜間にブログをあげる日々がはじまった。この日からタイトルに「動物だより」と入れて、経過もわかるように日付と地震発生から何日目であるかを記載し、この人たちがこの動物を見守っているから安心して下さいという思いで飼育担当者名、文責者として自分の名前を連盟でのせるようにした。そして、ブログ再開して真っ先に伝えるべきとあげた内容は、緊急猛獣移動だった。次に、無事にくらしている動物たちの日常の様子をあげていった。ブログをあげる際、被災した人々の心的不安をかきたてるような園内の激しい損壊写真は避け、言葉も慎重に選んだ。それから数日後、園の通用門に寄ってきたご近所の方々に呼び止められた。「園は大変みたいね、がんばってね。うちは近いけど大丈夫だったよ」「ブログみたよ、わたしはオタリアのミクが好きたい、元気しとるね？のせてよ」「わたしはクッキーが好き、チンパンジーの。」口々に明るく声かけてくださり、読まれた方からの直接の声がきけたことをとても嬉しく感じた。さらに、飼育ブログをみたという方々から手紙やFAXなどが届くようになり、元気な動物たちの様子に安心したこと、よく訪れていただけて休園が残念であること、園スタッフと動物たちへの励ましのメッセージが書かれていた。外と隔絶された環境にいて、人々がど



んな気持ちで動植物園をみているのか直接話すことがほとんどなくなったスタッフは、手紙に集まり、笑顔で回し読みした。また、手紙に添えて、動物へのおもちゃなどの贈り物も届くようになった。他の業務で遅くなり夜中に更新はじめるときも少なくなかったし、疲労でパソコンの前に座った途端に眠気がおそう日々もあったが、自分が決意してはじめたことであり、このブログの向こう側で待っている人がいる、動植物園が再開するまでは会えない動物たちの様子と飼育スタッフの取り組みを伝え続けた。

また、復旧の目処がたたず、一般の方が入れる状況ではないとはいえ、動植物園はこのままでいいのだろうか、情操教育の力をもつふれあい動物たちと一緒に地震の恐怖を味わったこどもたちを癒せないだろうか、スタッフの中からそんな声が複数あがるようになった頃、避難所の1つであった春日小学校の校長と上司とが話す機会があり、ぜひふれあい移動動物園をと望んでいただき、5月26日、春日小で試験的に行った。こどもたちの喜びの笑顔で大成功に終わり、こどもたちを元気づけにいったわたしたちスタッフが逆に元気をもらい、感謝の想いで胸が熱くなった。それから12月まで、希望のあった市内の幼稚園、保育園、小学校、支援学校の計43校で実施した。途中、7月には業務負担が少し軽減されて自分の休日もとれるようになり、被災後そのままだった住まいを片付けて引っ越しもし、地震後に発症、慢性化した蕁麻疹に対してもやっと病院にかかることができた。

4 部分開園できたときの感動

平成29年2月29日、園内のスタッフは浮き足立っていた。約10ヶ月も続いた長い長い休園日が開ける日が来たのだ。土日祝日に限り、被害が少なかった植物園、ふれあい広場、ゾウ舎、キリン舎という小規模エリアの部分開園であったにもかかわらず、待ち望んでくださっていたたくさんの方々が来園された。そわそわして出迎えに並んだスタッフたち、朝日が差し込

む江津湖側の南門から3人のこどもさんを連れただのお客様がはじめて入って来られたときの光景は、今も胸に深く刻み込まれている。当日は、たくさんの方から労りや励ましの声をいただき、こどもたちの笑い声が園に響き渡った。園内に活気が戻ってきた。開園後は、イベント等の企画も任されて、地震から1年経過した平成29年4月16日、熊本地震特集ガイドを行った。地震発生時の動物たちの様子や飼育スタッフの対応なども写真を展示し、当時の経験や取り組みについてもガイドした。同年6月3日、部分開園エリアが草食獣を中心とした動物園側1/3まで広がった。開園時は毎回ガイドを組んで季節や動物愛護週間に合わせたイベントを行い、教育普及にも力を入れた。復興を目指して努力を重ねる日々の中には、内からも外からも多くの助けがあった。熊本市現代美術館のスタッフは、被災した園のために熊本市動植物園 復興応援企画「がんばれ！アニマルズ」を持ってきてくださり、動植物園と美術館とでコラボした顔だし看板づくりやスペシャルギャラリートークなどを開催した。他園館や大学から地震時の対応や、必要なことなどを講演してほしいとの要望をいくつもいただき、外へ行く機会も増えた。動物園水族館獣医師臨床研究会(ZAVZ)やその九州・沖縄ブロック(kozavg)へも経過報告したり、動物の生活の質の向上を目的とするSHAPE-japan事務局はワークショップの会場に当園を選んで声をかけていただき、一緒に熊本を盛り上げてくださった。



5 未来へつなぐ

災害復旧工事や耐震設備も大事だが、必要なことはそれだけではなく。動物たちのくらしを豊かにし、命を繋いで、育み、そこでイキイキとくらす姿から学び伝えていける教育機関を動植物園は目指している。動植物園の大事な役割の1つである調査研究も、地震発生前後の動物行動と対策や経過をまとめて発表したり、ZAVZやkozavgで稀少な症例の手術を発表したり、動物の健康管理のための採血や聴診や投薬のためのトレーニングも、地震で休園中にも記録と改善を重ねて、力を入れて実施してきた。

平成30年4月1日、わたしは動植物園から食品保健課へと異動となった。異動を惜しみ全面開園まで見届けなくていいのかという声もいただいたが、不思議と自分の中は晴れ晴れとしていた。自分が担当していた内容は適材適所に振り分けて引き継ぎ、後輩も育ち、これまで作成してきた資料やマニュアル、

自己の知識技術の向上のために購入した書籍も園に残した。先行き不透明で陰鬱な重くしい空気が満ちていた動植物園はもうない。園には笑顔が満ち、動物たちのくらす環境もスタッフたちの手で豊かになってきている。これからのくまとの未来は、今動物たちの姿に目を輝かせていることもたちが引き継ぎ、築いていってくれることだろう。ただがむしゃらに、1日1日を精一杯後悔がないように生きた歳月だった。異動後は、動植物園の動物ボランティアに登録し、土日祝日のイベント等での手伝いに携わりながら、見守る立場となった。平成30年10月22日、猛獣達は熊本に帰ってきた。地震後、新たに当園の

仲間となった動物たちもいる。平成30年12月20日、復旧工事を終えて全面開園することができた。あの日から2年と8ヵ月、長い間あたたかく見守ってくださった市民の方々、一緒に園を盛りあげてくださったボランティアや各団体の方々、応援や支援いただいた全国の方々、園が現在の姿になれたのはたくさんの力添えがあったおかげであり、つらく苦しいときを一緒に乗り越えてくれた園スタッフと動物たちにも感謝の思いは尽きない。この思いを胸に大切に抱えながら、これからも誰かの助けになることを願って生きていきたい。



小中学校の教育的支援が必要な子どもたちへ

所 属	教育委員会事務局学校教育部総合支援課特別支援教育室 (子ども発達支援センター)	職位	室長	氏名	城門 千代
-----	--	----	----	----	-------

1 教育的支援が必要な子どもたちへ

大きな2度の地震、長引く余震等の体験や生活環境の激変は、子どもたちの心身に影響を与えた。学校再開にあたっては、どの子どもにとっても安心した学校生活になるようにしたいと考えていた。

医療的なケアの子どもや発達障がいの子どもの等、特別な教育的支援が必要な子どもたちは、自分の思いを言葉等で十分に伝えられないことが多い。そのため、一人一人の状況を細やかに把握し、実態に応じた対応が求められる。地震直後から、被災後の校舎の後片付けや避難所の運営等の対応に追われていた学校の先生方の負担は、かなり大きいと思われた。

このことから、学校再開に合わせて、学校現場での特別支援にかかる人的支援を行いたいと願った。そこで、4月21日に他の政令市に対して、協力員の派遣を要望し、福岡市と28日に打ち合わせを行った。そしてすぐに配置計画を作成し、各政令市の指導主事や教職員等を「特別支援協力員」として市内の小中学校に配置して、支援を要する子どもたちや担任等への支援や助言等を行う体制を整えた。

まず、現場の状況把握のため学校訪問等を行い、協力員の配置が必要な学校を選定した。また、協力員の受入れの準備として、宿泊所の手配（市立必由館高等学校セミナーハウスやホテル等）や配置予定校に関する資料の作成等を行った。

このようにして、5月10日～7月15日までの約2か月間、19政令市から135人、のべ983人を小中学校40校に配置して支援を行ったのである。

2 受け入れ準備の大変さ

各協力員の学校への配置は連続1週間とし、毎週土曜日は、各協力員への「事前説明会」と前任者との「情報連絡会」とした。このことで支援者が入れ替わっても、学校での支援が継続できるようにしていった。

当時は、私以外の職員全員は、昼夜を問わず、交代で避難所の対応に当たっていた。同時に、本来の業務も進めなければならない。自宅や実家が大きな被災を受けている職員にとっては、自分自身の被災対応として、週末は貴重である。そこで、事前説明会には管理職である私が、毎回、参加することとなった。

また、地震の影響で高速道路が寸断されていたことから、市内のあちこちではかなりの渋滞。説明会の開催時刻に教育委員会ビルにたどり着かない人もいた。あわせて、当時は被災して営業できない宿泊施設が多く、配置校と宿泊先とがかなり離れていて、通勤に膨大な時間を費やしてしまうこともあった。刻一刻と変化する交通機関や宿泊施設の状況など、タイムリーに復旧状況の把握を行う必要があった。

3 まずは学校が望むことを

各政令市から派遣された指導主事等の協力員は、特別支援教育に関する専門性が高い。「いち早く支援が必要な子どもたちを支えたい」という思いを持って、本市へ入られていた。

しかしながら、再開したばかりの学校では、「日常の学校生活を取り戻したい」という思いが強い。特に、前震が入学式直後だったことから、小学校1年生の中には担任の名前さえまだ覚えていない子どももいて、「自分の席に座り、先生の話聞く」という基本的な学習姿勢から教える必要があった。そのため、配置校からは「1年生が席に着くように声をかけてください」「ワークシートの丸付けをお願いします」など、学校生活にとって「ごく当たり前」のことを要求されることが多かったという。協力員の熱い思いとは、ずれた形だったようだ。

そこで、「まずは学校のニーズに合わせて活動してほしい」「専門性はもちろん必要だが、今は何よりも安心して過ごせる学級づくりを」「担任自身も被災者。ゆったりとした気持ちで支えて」と、事前説明会で私から協力員へ繰り返し伝えることとした。

4 支援者を支える

福岡市の協力員が期間中ずっとこの事業のコーディネート役を担ってくれた。彼が何よりも大切にしたのは「支援者を支える」という視点である。

当時は宿泊施設が十分でなく、全員がセミナーハウスに寝泊まりすることとなった。そこには、全国から派遣されたカウンセラーも宿泊したことから、大広間に雑魚寝である。そこで、彼が行ったことは3点。①玄関横に喫茶コーナーを作り、くつろぎの場とした②帰所後すぐに入浴できるように大浴場にお湯をはり、入浴剤は日替わりとした③毎晩、ミーティングを実施し、互いの頑張りを確認し、称賛し合う時間とした。

支援者を支えることが重要であると気づかされた。

5 「子どもたちから力をもらいました」

学校の人的支援については、支援の計画から実際の支援までのすべてを被災自治体が単独で担うのは難しい。今回の協力員派遣を通して、日ごろからの政令市間の連携の重要性をあらためて認識した。

「自分たちが力になりたいと思って熊本に来ましたが、逆に子どもたちからたくさんの力をもらいました。」これは、協力員のほとんどが熊本を離れる時に言ってくれた言葉である。本市の子どもたちの「力強さ」と「可能性」を信じて、今後も教育的支援が必要な子どもたちへかかわっていきたい。

使命

所 属	北消防署楠出張所 (北区役所総務企画課)	職位	所長	氏名	松村 優子
-----	-------------------------	----	----	----	-------

1 前震における活動

突然の激しい揺れ。まさかこの熊本で！と誰もが思ったことだろう。まぎれもなく私もその1人である。直ぐに家族の安否、家の被害を確認後、消防職員である私は家族を残し直ぐに職場へと向かった。日頃から、災害に対する危機意識の高い消防職員は、4時間内で全員がそれぞれの職場に参集している。ただ、経験したことのない地震に、益城町を含む消防局の管内にどれだけの被害が出ているかは分からず、出勤途上、被害状況を確認しながら職場へと急いだ。

当時私は、4月1日に消防隊員19人が所属する楠消防出張所の所長として着任したばかりだった。これまで災害現場活動等の経験はあったが、女性初の所長という肩書きに不安がなかったと言えば嘘になる。消防は災害に対し迅速な判断や対応が求められ、立場上統率力も求められる中、4月初めに管内の消防団長や自治協会会長に挨拶を済ませた矢先の地震となった。

多くの人たちにとって、何もかもが初めての経験。地震から約30分後、市民からの問い合わせが出張所に相次いだ。最初の一言は、区役所や当時の総合出張所に電話しても誰も出ないため、消防にかけたということだった。問い合わせの内容は多岐におよび「避難所の場所はどこですか？」「体育館がまだ開いていません。」「毛布が全く足りなくて寒いです。」「公園に避難したがトイレトペーパーがありません。」等。ただ、その頃既に消防車や救急車は益城町へと出場していたため、残った隊員に指示し、可能な限り全力で対応した。(ちなみに、トイレトペーパーは出張所のペーパーをお裾分け!!)

23時頃、消防対策部から消防団に対し管内の被害状況を確認させるよう指示が出た。この時間に電話とは少し躊躇したが、幸い各消防分団長への挨拶回りを済ませていたおかげで、電話1本でお願いすることができた。

日付が変わり4時近く、一旦消防車両が益城町から帰所してきた。出場した隊員たちの話しによると、想像を絶するような光景だったというが、現場を目の当たりにしていない私は、ニュース映像を見るまでは想像力に欠けていることに気付かなかった。

2 本震における活動

前震後、交代勤務の隊員たちが24時間待機していることから、18時頃私は一旦自宅に帰ることができた。「余震が震度5弱ならば自主参集だから！」と同じく帰宅する所員たちに達し、心の中ではそんな大きな余震はないと都合良く信じ、0時過ぎに寝入った。

1時25分、まさかの本震。本震による揺れは、被害が大きいであろうことは優に想像できた。当然我が家も激しく物が散乱していたが、手をつける暇もなく、今度こそは帰れないかもしれないと思い、必須の化粧道具と着替えを準備し職場へと向

かった。職場に到着したのは本震から30分経った頃だったが、既に消防車や救急車は出場しており、無線から流れる指令で本震による被害の酷さがうかがえた。この本震により、熊本市全域で断水が生じ、阪神淡路大震災での大火災が頭によぎった。隊員一同、とにかく火災だけは発生しないでほしいと願うばかりだった。

幸い管内で火災は発生しなかったものの、ニュースでも話題となった、龍田西小学校の擁壁や運動場のクラックによるブルシート張り、後日プールの水を抜く作業は長時間を要し容易ではなかった。また、地震後の雨による土砂崩れ等も発生し、その対応にも覆われた。

5月に入り、夜からの避難所応援も始まったが、署の方針で私は除外され、避難所の経験をすることは出来なかった。

3 現在において

平成29年4月から北区役所に出向し、防災訓練や防災講座等で話す機会が多い。当時の避難所運営についてはお叱りの声が多い中、やはり自分の命は自分で守る、そして共助の大切さを話し、特に非常食の備えの必要性を訴えている。ただ、全国各地で発生する災害に関心はあるものの、なぜか非常食の備えは少々薄れてきている感がうかがえる。ただ、何事も継続は大事であり、今後も市民に対し訴え続け、もっと防災意識を高められるようお手伝いをしていきたい。

4 結び

今回の地震において我が家はたいした被害もなく、また日常生活における不安はなかったものの、長期に渡るライフラインの停止は、便利すぎる日常の慣れを改めて考えさせられた地震となった。

最後に、当時一緒に勤務した出張所の所員の臨機応変な対応と、私へのバックアップに感謝するとともに、私の仕事を理解し、いつも労いの言葉をかけてくれる家族に感謝したい。

そして熊本地震において、多くの方々からの支援に感謝するとともに、犠牲となられた方々に哀悼の意を表します。

上水道の復旧業務を振り返って

所 属	上下水道局維持管理部水運用課 (環境局環境推進部水保全課)	職位	主査	氏名	緒續 美智子
-----	----------------------------------	----	----	----	--------

1 はじめに

熊本地震が起きた平成28年4月は、上下水道局の水質管理室に配属されていた。水質管理室は、水道水の水質を維持管理していくための様々な検査を行う部署である。私生活では、市職員の夫、中学2年生の娘、小学5年生の息子との4人暮らし。二世帯住宅の1階には、夫の両親が住んでいる。そういう状況だった。

2 前震の時のこと

平成28年4月14日。その日は水運用課の歓送迎会有り、帰宅してすぐに地震が起こった。初めて経験するような大きな揺れ。幸い、我が家は電気も水道も異常はなく、生活には支障が無いようだった。

水道は、市民生活にとって欠かせないライフラインである。普段から、台風に伴う停電や寒波による凍結などは天候から予測し事前に備えており、施設に何か異常がある時にすぐに出勤するというのは、それまでも職員にとっては当たり前のことだった。そのため、とにかく出勤しなければ、とすぐに思った。携帯電話がなかなか繋がらない中、後輩職員がLINE電話をくれて話すことができた。私以外の職員は皆、歓送迎会の二次会会場からそのままタクシーや徒歩で出勤するとのこと。私も1週間前買ったばかりの自転車で出勤した。(この自転車は、その後も大変重宝したので、買って置いて良かったと思いました。)

職場では、水質検査機器や薬品等に異常がないかを確認しつつ、水運用課の水運用センターで、水源地等の情報を確認した。すると、地震により井戸水が濁り、その濁度を感知して自動停止した井戸が多数あった。自動停止した井戸の状況確認のため、職員はそれぞれ現場に行くことになった。施設の維持管理を担当している班の職員だけでは到底足りないため、部署に関係なく対応し、私も水源地の電気系統がわかる職員と一緒に麻生田水源地に向かった。

水源井が自動で停止しているため、手動で排水運転(お客さまに送らず排水する運転)を行って濁りの状況を確認し、きれいになった井戸から運用(お客様に送ること)に切り替えるという作業を行った。寒くて真っ暗な中、懐中電灯を使っ

3 本震の後のこと

前震での初期対応を終え帰宅し、洗濯物を干して、さあ寝ようとした時だった。立ってられないぐらいの揺れ。近くに置いていた携帯電話をどうにか手に取り、ダイニングテーブルの下に隠れた。当時、夫は仕事で不在、子どもたちは1階の祖父

母の家。いつまでも収まらない揺れ。家はきしみ続け何かが割れる音、途中、電気が消える。家が崩壊して1階にいる子どもたちが潰されませんように、ただそれだけを祈りながら、揺れが収まるのを待った。

子どもたち、義両親と無事を確認し合い、着替えなどをリュックに詰めて、職場へと向かった。自転車で出勤する途中、緊急地震速報のあのアラームが何度も鳴り響き、恐怖のあまり涙が出てきた。

水道は、すべての井戸が濁りで自動停止するという緊急事態だった。すぐさま様々な水質検査が始まった。一旦濁りはしたもののすぐに回復した井戸もあれば、なかなか濁りが収まらない井戸もあった。回復した井戸から運用を開始し、給水車に入れる水の検査を行った。最初は上下水道局も断水していたため、水質検査に欠かせない精製水(蛇口の水を装置に通して製造します。)が足りなくなる恐れがあり、検査も慎重に行った。

公園に設置してある耐震性貯水槽の水を市民の方にお配りするというので、その水の検査のために市内一円を回った。錦ヶ丘公園ではとても長い列が出来ていた。東区役所で働く同期の職員が、拡声器を使って市民の方に説明していた。貯水槽の水の量には限りがあること。並んでいる全員が水を得ることができかどうか分からないこと。できるだけ多くの人に水を持って帰ってもらうため、一人あたりの量を制限すること。市民の方は皆さん困られており、全員が納得できる対応ではないため、大きな声で自分の意見を言われる方もあり、私も大変心苦しかった。

水源井が回復し、やっと配水池に水をためて送水を始めても、お客さまの家庭になかなか水が届かない期間が結構長かった。水道は水道管を通して、高低差やポンプによる圧力を利用して水を送っているが、配管に亀裂等があるとそこで圧力が抜けてしまい、そこから先に水を送ることができなくなるからだ。

上下水道局では、当初お客さまからの問合せの電話がひっきりなしに鳴っていたため、電話対応に多くの労力を割かなければならなかった。夕方近くになると、総務課の職員が、当日の夕方以降の電話受付に対応できる職員を募っていた。私も夕方から夜中までの当番に出たが、「いつになったら水が出るようになるのか。」「出た水は飲んで大丈夫なのか。」といった問合せが多かった。

「いつになったら水が出るようになるのか。」への答えは、お客さまの住所によって大きく違った。熊本市内は多くの配水区に分かれており、配水区ごとに復旧状況が違ったからだ。住所を聞いて、その配水区の現状を説明するよう心掛けた。

「出た水は飲んで大丈夫なのか。」に対する答えも、難しかった。配水池から送り出す時点では水質基準を満足している水でも、地震の揺れで水道管内部の錆が剥がれやすくなった状態であったため、お客様の家の蛇口に届くときには濁り水になっていることが多くあったからだ。幸い、水道水の消毒の効果は確認されていたので、目視で錆等が無くなれば、飲んでも構わな

いとお知らせした。

私自身も家に帰れば水がなくて困っている状況だったため、市民の皆さんが不自由な思いをされていることを考えると、とても辛く苦しかった。そんな中、友人たちが「水が出るようになったよ！ありがとう。」というLINEをくれたのは、本当に心の支えになった。

4 家族のこと

本震が発生し自宅が停電・断水になった4月16日は、日中私と夫が不在の中、子どもたちは2人だけで避難所の小学校に行き、数時間列に並んで食料を分けてもらったとのこと。また義両親は車で親戚の家に行き、おにぎりをたくさん作って帰ってくれた。夕方帰宅し車中泊をした後17日の朝、そのおにぎりをみんなで食べながら私は、昼間は仕事があるから、子供たちのために水や食べ物を調達する列に並ぶのが難しいな、子どもたちのために何もしてやれない、と途方に暮れた。そんな時に、鹿児島に住む夫の弟が、しばらくこちらにおいて、と誘ってくれたため、子どもたちと義両親の4人で行ってもらうことにした。朝食後すぐに出勤する私に、娘が「ママ、死な

んでよ。」と泣きながら言った。鹿児島の義弟家族とは普段から親しくしており、いとこ達とも仲が良いので、私も心配なく仕事に専念できた。だが、鹿児島で過ごして数日後、娘が電話越しに、小さな声で「もう帰りたい。」と言った。この2つの娘の言葉は、今でも思い出すたびに胸が痛む。

私の場合は、子どもが比較的大きかったこと、さらに預かってくれるところがあったことで、業務に専念することができた。だが、子どもたちの気持ちを考えると、それが正解だったのかどうかは自信がない。また、もっと小さい子どもを遠くの実家に長期間預けて出勤し続けた後輩や、子どもの預け先がなく出勤できずに申し訳ない気持ちを抱き辛い思いをした職員も知っている。

子育てに限らず様々な家庭環境の中で生活している職員。その職員も被災者という状況の中、業務を通常とは違う形態で継続していくのは市職員全員にとって大変なことだった。熊本地震から3年が経とうとしている今、改めて振り返ると、私が出勤するのに協力してくれた家族、一緒に頑張った職場の皆さんに感謝の気持ちでいっぱいになる。





「家庭と災害対応」



のこと

介護と緊急時の対応について

所 属	健康福祉局子ども未来部子ども支援課	職位	主任主事	氏名	村山 佐江子
-----	-------------------	----	------	----	--------

1 あらまし

2016 年 4 月 14 日以降のことについて、私自身が家庭を持つ市民として、また職員として体感したことを記していこうと思う。ここに出てくる母は亡くなってしまったが、地震発生から母が亡くなるまでの間の私自身の記憶が途切れており、当時自身が感じたこと、思ったことを記しておいたメモを確認し、手記を書くことで、今後の災害対応の役に立てたらと思う。

2 発災時の状況 ～《前震・本震》～

前震発生時、一時退院していた母と娘達の 4 人で、それぞれの時間を過ごしていた。

台所で火を扱っていた私が軽く揺れを感じた瞬間、すぐに激しい揺れに変わった。頭では地震と分かっているが、体験したことのない揺れに半分は何が起きているか理解できないまま、夢中で火を消し、こぼれた油もそのままに為す術もなく揺れに身体を任せていた。揺れが収まり、本来ならすぐに職場に参集すべきところ、母の容態が良くないため、この日は出勤せず、万が一に備えて母の薬や身の回りのものをまとめておいた。

本震時は、通常通り出勤し、何事もなく帰宅。近所の方と集会所で集まって寝ることになった。全員が寝静まった夜中、再び地鳴りと激しい揺れ、建物の軋む音で目が覚めた。布団に潜り込む者、手をつなぐ者、子供の上に覆いかぶさる者、それぞれではあったが不気味な音と激しい揺れに誰しもが倒壊を覚悟していたように思う。ある程度、揺れが収まった後、一旦町内の公園に集合し、近くの大学の施設へ避難した。

避難所では、避難者の既往症を聞き取り、施設内で居る場所を記して施設の管理者に渡した。一緒に避難した近所のイスラム教徒の留学生がいたため、宗教に対応できるか分からないので、大学の友人に連絡して一ヶ所に集まった方がいいと伝えた。

職場から安否確認の電話があり、状況を説明して、この日も母と一緒にいることにした。この時、母は夏を越せるか分からず、いつ意識がなくなってもおかしくない状態であった。また、合流した叔父も透析患者で、2 日後の月曜が透析予定日であったため、まずは 2 人の受け入れ先病院を探すのが急務であった。夜が明けるにつれ、被害状況がハッキリしてきた。視界に入るどれもが、窓ガラスが割れ落ち、壁はヒビが入って剥がれ落ち、さながら戦場ようになっていた。かかりつけの病院も、平常通り診察もできないであろうと思われた。

昼頃、職場から電話があり、出勤できない焦りや申し訳なさと、どうすることもできない自分を非常に情けなく思ったことを覚えている。幸い職場も理解がしてもらえて、とても感謝している。

翌日、叔父の病院から連絡があり、ひとまず市外の病院で透析が可能となった。次いで母も元々の病院で通院と点滴で対応してもらえることが決まり、私も出勤することが可能となった。

また、子どもたちも時間があるときは自発的に避難所の手伝いや、友達を誘い合って社協のボランティアに行くなど、子ど

もたちなりに今熊本がどういう状況で、自分が何ができるかを考えて行動するようになっていた。それは最悪の状況下での、嬉しい発見となった。

3 災害対応

既に避難所では 1 日のスケジュールが決まっており、特別困難はなかった。1 人の高齢者が和式の仮設トイレの使い方を知らずに、足を置く部分に座って用をたしていた場面に出くわした。

職員も避難者も忙しく、この様なプライベートな空間のことまで見かけない限り分からない事ではあるが、トイレに限らず使用方法等を紙に書いて貼るといった小さなことも気にかけていく必要があるのではないかと思った。

また、災害対応には電話対応もあった。これも途切れることなく様々な内容で問い合わせの電話がかかってくる。仕方のないことではあるが、どこまで市として対応可能で、どのようなケースの場合はどう対応するか、相手の連絡先を聞いておくべきか、判断に悩む内容もあった。混乱している最中、職員でも分からない事柄であっても適当なことは言えないため、電話対応する部屋に種類別に対応した履歴等を貼ってあれば、やり易かったかもしれない。

この時、どこに行っても目に入る景色は荒れ果て、すれ違う人々は地震前と同じ生活・景色に戻れるのか、余震も避難生活もいつまで続くのか、誰もが不安の渦中にあり、どの避難所も沈んだ雰囲気覆われていた。その様な毎日の中でも、ちゃんと朝から太陽は登り、木々には花が咲きはじめていることに気づき、「大事なことは何も変わっていないから大丈夫!」と自分を奮い立たせたことを記憶している。今となって思えば、避難所勤務のときに花一輪でも飾って避難者の気持ちを和らげる工夫や、そう考える心の余裕が私たちにも必要だった。

4 終わりに

私は既に子供も大きく、通常であれば出勤可能であったが、母や叔父の病気の関係で初動対応ができなかった。出勤してからも、泊まりの避難所勤務の際は、母達は今夜は大丈夫だろうかと気にかかり、落ち着かない気持ちで過ごしていた。私以外でも、自宅介護中で病状が重い家族を持つ職員は、どうされていたのかと思う。

当時 母は時折 脳症を発症し、急に何も認識できず、徘徊し、会話もできず、トイレの場所さえ分からない状態になることがあった。私の不在時は、子ども達がみていてくれたことが、とても有り難く頼もしかった。しかし、避難所で脳症の症状が出たら、高校生の子供達だけで対応するのは困難で、子どもと母達だけを置いていくことができなかった。対象が大人であるために、あまり話には出てこないが、子どもと違う理由で目が離せない状況は、どの年代の職員にも当てはまるケースだと思う。これについても災害時に一番に対応しなければならない組織として、どう対応するか、せめて話に出る機会があればと思う。

最後になるが、この震災を機に人は自然には勝てないけれど、助け合って困難を乗り越えることができると身をもって知ること

ができた。また大勢の方の善意に触れることもできた。この経験と恩を忘れずに、次代につなげていきたい。

想定外の熊本地震

所 属	健康福祉局子ども支援課子ども・若者総合相談センター	職位	副主任	氏名	谷富 麗子
-----	---------------------------	----	-----	----	-------

1 前震時

私は丁度入浴前で脱衣室にいた。すぐに地震の揺れと気づき脱衣室のドアを開け、廊下に出たが揺れが酷く手すりを握っていた。しかし、車椅子生活の高齢の母が自室に居ることがすぐに頭に浮かび、揺れの中母の元へ行き、声かけをして不安を和らげるようにした。

余震は震度5位を予想した。その晩、母のベッドの横の時計や絵画などは取り外し、母親の心臓等の薬を1週間分、父と私の3人分の着替え等や必需品などを袋にまとめて玄関口に揃えた。家の中は食器類などの散乱が酷く、その晩は1階の母のベッドの横で寝た。翌日は、通常のバス通勤をせず、車で出勤し、ガソリンを満タンにして（神戸震災経験者から話を聞いていた為）ペットボトルの水などを買って帰宅した。

2 本震時

母のベッドの横で寝ていた為、揺れが続く中、母にずっと声かけを行った。地鳴りが未だに忘れられない。揺れがおさまり1時40分頃、隣の家の方が玄関のドアを叩き、「大丈夫ですか。避難しましょう」と声をかけて行かれた。玄関は物で散乱し、車の鍵が見つからず、ドアが開かず状態。父が叩くなりして何とかドアを開けることができた。そして避難の為に、母をベッドに座らせ私が背負おうとするが全く立ち上がることができなかった。（父は高齢のため無理だった）避難していない為に、再度、近所の人4人で家に来られた。母を抱えられない事を伝えると近所の人2人が母を背負って車まで運んでくれた。途中、石垣の大きな石が道路に落ちていて、避けて避難所へ向かった。小学校に到着。校庭は車と人が一杯で中に入ることを断られた。自治会長さんが、門の前に車を止めさせてくれた。母のトイレは、その度に車から車椅子を出し、慣れない場所での介護は高齢の父にとっては負担が大きかった。

3 避難所（小学校）生活

地震明けの朝食は炊き出しによりおにぎりが配布された。

母の介護のため車を校舎の近くに入れさせてもらった。

私自身、教室解放になるまで車の中で過ごした為か、頭痛と嘔吐が始まった。教室の中で具合が悪く避難所に冷えピタがないか尋ねたがなかった。救急車を呼んでもらいたい位の具合の悪さだったが病院に行っても対応ができないかもしれないと思った。偶然に父親が持っていた鎮痛剤を服用して、徐々に嘔吐頭痛が治まった。誰か教室を巡回してもらい健康状態を聞いて欲しかった。反面、教室に入ってから市職員であることを日が経つほど口に出せなくなった。何も出来ない状態で過

ごすのが心苦しく、朝は教室から出勤していいのかと罪悪感を持った。そんな中で毎朝校長先生が「いってらっしゃい」と声かけをしてくださるのは励みになった。

出勤前の着替えはトイレの中で行った。

避難生活が続く中、昼間、親の話相手がいないか教室内を廻ったが知り合いが誰も居なかった。町内ごとに分けてあれば良かった。（後に聞いた話では私の町内が小中学校の中間地のため中学校に避難したとのことだった。）

避難所の教室内では、車椅子に母が座ると特定の女性の人が「テレビが見えない」「父のいびきがうるさい」「後ろから蹴ってやった」などの苦情。肩身の狭い思いだった。父は母の介護のため教室の近くに車を置かせてもらい、車の中で毎晩寝た。それでも気疲れして人の少ない部屋を探して移動した。そこでは精神疾患のあるような男性がおられ、子どもの話声、私の家族の話声で怒鳴られるようになった。

恐くなり、周りの人も立ち去り、父が「帰ろう」と言い、校長先生にお礼を伝えて夜の8時半位から自宅へ帰った。

食事は不自由なくできた。両親は私の仕事の間に慰問の人の話などを毎日嬉しそうに報告してくれた。この事は心の支えとなった。避難中の情報で車椅子だと学園大学に行った方が良いと聞いたが、移動した所でどんな支援が受けられるのかの不安もあり、そのまま学校で過ごした。

4 避難所対応（業務）について

私の業務は避難所の避難者数が少なくなった時期でもあり地震の回数も少なくなった頃だったので、家族に高齢かつ身障者がいるので助かった。

小学校の避難所は教頭と2人対応（日中）だった。避難所の人が少なく教頭先生は殆ど教室におられたが、精神疾患のある人がいて私の名札を引っ張られたり、近寄って何も言われずに目の前に立たれる時は仕事とは言え怖かった。日中で避難者が少なくても女性一人の対応は不安だった。

公民館は、看護師さんが主に動かれたので指示に従った。

中学校での避難所は自宅から近くで地域の事は少し分かっているつもりだったが、引継ぎの注意事項で気が張った。仮眠の時に困った。避難者の横かステージの上で仮眠との事だったが、環境的に眠れないため車の中で仮眠した。校庭の暗い中だったので不安だった。

今回、3か所の避難所対応に従事したが、地元の小学校だと子どもの出身校でもあり私自身が地域に長く住み役員経験もあったので、動きやすかったのではないかも思った。

5 地震後のこと

家は半壊で、特に瓦や倒れた家具類の片づけが困難だった。結局、父が夏過ぎまで瓦袋 100 袋以上を一人で片づけた。私も瓦袋を持ってみたら重くて全く持てなかった。ボランティアは知っていたが市職員であるため逆に頼むことを遠慮した。家の片づけは 1 年半後に瓦が出来上がり、2 年目に畳や障子、3 年目に台所と順を追って気長に修理をしている。今も玄関口には避難用の荷物を備え、地震後テントの購入をした。音に対して敏感になってしまったようだ。

6 校区の防災訓練に参加して良かったこと

長年にわたり、毎年 1 回行われる防災訓練に何度か出席したことはあった。今回、回覧版で内容に関心があり参加した。

小学校の校長と教頭による熊本震災の時の学校の取り組みで良かったこと、悪かったことなどパワーポイントを使っ

て報告が行われた。東北地震の時に連携した学校と今でも交流があったため、指示を受けながら動かれたことや当校出身の学生に呼びかけてボランティアをしてもらったことで勝手が分かり動きが早かったことなど私の知らなかった支援活動の実情を沢山知ることができた。取組の素晴らしさと今後の課題はとても参考になった。(この紙面には記載されないぐらい) 学校が避難所になる場合は、本当に学校と地域、行政の繋がりの大切さを感じた。また、日頃から地域を知ること課題である。今後、大地震がないことを願うが阪神淡路大震災、東北地震、熊本地震の教訓を得て新たなマニュアル作成の参考となり、各家庭での防災マニュアル(避難方法や避難時のことなど)の重要性を感じた。また、講演会などに参加し、業務上参考になることもあった。

最後に、市職員としてしっかりと業務を果たさないとはいえなかったが、避難所では大変お世話になり、支援して頂いた方々に心より感謝申し上げます。

育休復帰後の地震対応について

所 属	経済観光局観光交流部観光政策課 (健康福祉政策課)	職位	参事	氏名	北添 友子
-----	------------------------------	----	----	----	-------

1 地震発生の時

平成 28 年 4 月、私には 3 歳の長男と 1 歳になったばかりの次男がおり、これから本格的に仕事に復帰しようということだった。

前震の時、我が家は全員自宅にいて、長男は祖母と布団で絵本を読んでおり、私はちょうど次男の授乳をしていた。これまでに体験したことのない揺れに、驚きはしたもの、家具等も倒れたりしておらず、少し落ち着いてから休むこととした。

そして、その翌日の夜中、私は子ども二人と同じ部屋で就寝しているところで大震が来た。突然の大きな揺れ、地震の発生を知らせるアラーム音、食器棚が倒れ皿やガラスが割れる大きな音、まるで夢のように感じた。子どもたちは、まだ事情が分からないのか、長男は泣きもせず、むしろ興奮状態で、次男は眠ったまま目を覚まさなかった。マンション内は停電しており、余震も続いていたため、いったん、近くの避難所に移動することとした。長男は朝まで全く眠れないようで、避難所内をずっとウロウロしたりして過ごしていた。逆に次男はほぼ寝てすごした。授乳室のある避難所だったため、機嫌が悪くなったらすぐに授乳できたからだ。やはり、子どもが迷惑をかけないよう、泣かないようにと、とても気を使っていた。

2 本震翌日の夜勤

本震翌日の夕方から翌朝まで、対策本部の電話当番に行くこととなった。出産後、夜中に家を空けるのは、これが初めてだったが、少しでも役に立ちたいという思いから志願した。

私がいらない間の食事が心配だったので、子どもたちのために、おにぎりをたくさん作ってから出かけた。(電気は復旧していたので)

次男は、離乳食は進んでいたものの、まだ授乳中であり、夜中も 2～3 回は授乳していたので特に心配だったが、何とかミルクで対応できた。むしろ、私の方が授乳しない時間が長くなると、胸が張って痛くなるので、業務の休憩中にトイレで搾乳してやり過ごした。

3 対策本部の電話当番

私は、その後も、対策本部の電話当番を 2～3 日に 1 回担当した。当初は「避難所に食料が届かない」、「給水車がいつくるのか」「避難所が閉鎖(体育館等の安全性に問題があるため)されてどうすればいいのか」「いつになったら水道が復旧するのか」などの問い合わせばかりだったが、電話口で怒鳴る人や泣く人も多かった。経験したことのない非常事態に、みんな冷静さを失っているのだから当たり前だと思うが、こちら側もまだ混乱しており、答えられないことも多く、謝ることしかできないことが辛かった。しかし、電話は鳴り続けてるので、何とか気持ちを切り替えながら対応していた。

そんな中、他県の人から「物資を届けたい」「被災者に住まいを提供したい」「ボランティアに行きたい」などの申し出の電話も多くあり、その言葉に勇気づけられたし、心強かった。

その後、徐々に情報が整理されたり、いろいろな制度が動き出したりして、的確な情報提供が行えるようになっていった。

4 葛藤

本震のあつとすぐ、同僚たちは職場に参集し、避難所に行くなどしている中、自分はただ家にいて何もできず、申し訳ない気持ちでいっぱいだった。また、そのような大変な業務を、自分だけが免除されているような、後ろめたさもあった。

その後も、結局、避難所等に行くことはなかった。上司や同僚から「お母さんは、あなたしかいないから（子どもの近くにいてあげなさい）」と言われ、本当にありがたかったし、実際、保育園も閉まっていたため、長時間や夜間の勤務は難しい状況だった。それでも、昼夜を問わず災害対応業務にあたっている同僚たちのことを思うととても胸が痛んだ。そこでこんな非常事態なのに、役に立てないことが無念で情けなかった。

5 最後に

このような災害時だけでなく、常に一定数の職員が、育児中だったり介護中だったりする。でも、そういう人たちに気を

使いすぎてはいけないと思う。遠慮したり、「出来ないだろう」とあきらめないでほしい。

気を使っていたくのはとてもありがたいこと。でも、一職員として「自分にできることはやりたい。」「もっと役に立ちたい」と思っているのも事実だ。

地震の時、私は電話当番という一つの役割を務めることができて本当によかったと思う。100%の力では仕事できなかったし、出来る事や量も限られていた。それでも、少しでも役に立てることが救いだった。私なりに力を発揮し、何らかの役割を担う、それが喜びにつながると今も思っている。

災害対応と育児

所 属	西区役所まちづくり推進課 (指導監査課)	職位	参事	氏名	中村 幸香
-----	-------------------------	----	----	----	-------

1 前震・本震

前震の発生した日、当時、私は西区役所まちづくり推進課に勤務していた。いつものように仕事を終え帰宅し、夕食を済ませたところ、ガタガタガタと普通でない揺れを感じた。二人の息子がお風呂から飛び上がってきた。慌てて息子たちを家具の倒壊の恐れのないリビングに移動させた。こんな時はどうすればいいのか、全くの想定外の事態に途方に暮れた。とりえず職場に参集しなければならないが、自宅に子どもだけを置いて参集してもいいものかと考えていたところ、夫が帰宅してきた。夫が帰宅すると同時に家を出て、自転車で西区役所に向かった。区役所では避難所を開設運営することとなるが、人員をどう配置するか、各課との役割分担等、全てが手探りであった。

そして本震。夫に子どもたちと一緒に自宅にいてもらい、私が区役所に参集することにした。自転車で出かけようとしていたところ、当時中学校に入学したばかりの長男は、自転車通学用に購入した真新しいヘルメットを「お母さん、生きて帰ってきてね」と言いながら渡してくれた。子どもたちも不安だったであろう。あの揺れの直後に子どもたちだけを自宅に残して夫婦ともに職場に参集することはできないと思った。夫も市職員であり、被害の大きい市民病院に勤務していたため、夫婦で災害対応に従事となった場合の子どもたちの預け先はどうなるのか、いざという時に私一人で子どもたちを守るのかという不安でいっぱいだった。地震の影響で市内の小中学校は当分の間休校となり、祖父母にも子どもを預けることができず、私の住んでいる地域は津波の浸水地域であったため、家に子どもだけを置いておくこともできなかった。このような事情を上司に相談したところ、幸いにも職場が避難所だったこともあり、子連れ出勤を快く許可していただけた。

2 子どもを持つ職員の災害対応について

私はこのように比較的恵まれた環境で安心して災害対応に従事できたが、他の職員は災害対応時に子どもをどうしていたのだろうかという疑問が浮かんだ。そこで、市内の避難所が概ね閉

鎖され、少しずつ通常業務にシフトしていった10月頃、私が管理人となっている市役所内のオフサイトミーティンググループ「つながるママカフェ」のメンバーに「地震の時に子どもはどうしていた?」というアンケートを行ったところ、メンバーからの回答やメッセージが寄せられた。

アンケートの中では、私のように職場の理解が得られ夜勤の免除や子連れ出勤を了承してもらえた職員もいる一方で、子どもの預け先がないので出勤できないと職場に伝えたら非難された、子どもがいても当然のように夜勤のシフトに組み込まれ、小学生の子どもだけを家に残して夜間の避難所勤務に従事したなど、厳しい状況が推測される回答も少なくなかった。

なぜ、職場によってこのように状況が異なってくるのだろうか。アンケートの結果や他部署の震災対応の様子を聞いたりする中で、子どもを持つ職員の災害対応勤務への配慮が職場によってまちまちであったと感じた。もちろん、職場により状況は様々であり、状況に応じた対応が求められるが、組織として子どもを持つ職員への対応方針を早急に打ち出すことができれば、子どもの預け先さえあれば出勤できた数多くの戦力を救い活用できたのではないかと思う。そのためには、上層部の指示を待つだけではなく、現場からも職員の状況や子どもをもつ職員の「こうなったら安心して出勤できる」という意見を集約して上層部に伝える必要があったことを痛感した。もし、次回このような甚大な災害が発生した場合には、可能な限り子どもの預け先を確保し職員が少しでも安心して災害対応に従事できる環境を組織的に整えてはどうだろうか。

3 おわりに

このように比較的恵まれた環境で災害対応に従事できた私自身も、当時のSNSを振り返ると、「市職員なのに災害対応に出られなくてごめんなさい。」という内容の投稿をしている。このような思いをする職員が一人でも減ることを、また、あのような甚大な災害が二度と発生しないことを切に願う。そして、この声が今後災害対応に従事する他自治体職員の一助となれば幸いである。

寄 稿



私たち(指定管理者)が行った、男女共同参画の視点での取組

所 属	熊本市男女共同参画センターはあもにい (くまもと県民交流館パレア)	職位	館長	氏名	藤井 有貴子
-----	--------------------------------------	----	----	----	--------

1 まさかの発災！何をどうすればよいのか？

14日の前震の直後、東区の自宅にて被災した私のもとにはあもにいの夜勤務のスタッフからショートメールが入った。「複数の市民が避難して来られています。このまま受け入れますか？」はあもにいは指定避難所ではないため、備えも避難所開設のためのマニュアルもない。私は即答できないまま当時の担当課の課長に電話を入れたが、携帯は通じず。とにかくショートメールで「一時的に受け入れます」というメッセージを残し、はあもにいのスタッフには避難者の一時受け入れの指示を出した。行政の指示を仰げないという状況の下で、指定管理者として何をすべきなのかかわからない…。恥ずかしながら14日夜の私は、混乱と不安の中でただただ夜が明けるのを待つしかなかった。

翌朝は早々に出勤し、館内の被害状況を確認しながら後片付けを行った。避難者は早朝には自宅に戻られており、会館は休館となった。男女課との連絡も課長とのショートメールのみ。この時も、被災地にある男女共同参画センターとして、まず何をすべきか判断に迷うばかりだった。

2 東北から届いた「地震後の性被害を防いで！」というメッセージ

東日本大震災の報告書を見ながら、今後のことを考えていた時に、あるスタッフが半年前に全国女性会館協議会が大規模災害を想定して構築した『相互援助システム』を思い出しアクセスした。すると、そこに全国の男女センターから、「大丈夫ですか？」「支援物資を送りたい」という声が数多く届いていた。全国の人たちが熊本のことを心配してくれているということが何より有難くて、私は涙をこらえることができなかった。その直後には東北にある男女共同参画センターの元館長からも電話が入り、「東北では5年経った今でも、性被害に遭ってカウンセリングを受けている人が在る。あなたがもしも動けるのならば、今すぐに性被害防止の啓発をしてほしい」と懇願された。私は迷わず自分たちの役割の優先順位の一歩に、性被害防止の啓発活動を位置づけ、15日のうちにポスターの大部分を作りあげた。課長と相談をしながら、避難所への掲示や支援物資にメッセージカードを張り付けるなど、ありとあらゆる手段を使って情報の拡散に努めた。『一人でも多くの人に、非常時にはDVや性被害が起こるリスクが高まるということを知ってもらいたい。熊本から、被害者も加害者も出したくない！』という、ただその一心だった。

3 多様な立場の人の、ニーズに沿った支援とは

その後連休明けからは、会館内に女性や子育てファミリーを優先する集約避難所を開設。主たる管理は行政職員の方が行われるため、指定管理者である私たちは後方支援と、開館に向けての準備などを行うことになった。併せて、市内23箇所の集約避難所の環境改善を目的とした施設の点検やヒアリング、意見箱の設置などを行う『避難所キャラバン』にも取り組んだ。もしも避難所開設時の初動に男女共同参画の視点が活かされていれば、もう少し安全と安心を担保できたのではないかと思われる様子も複数目にした。またその他にも避難者の意見を聞いていく中に、「行政職員や第一線で支援を行う人たちの疲労が気になる」という声があったことから、支援者支援のための『自己メンテナンスシート』を作成。県外から支援の申し出をつないで、親子を対象にしたメンタルケアも行った。

私たちは様々な取り組みを通して、多様な立場の人たちへのニーズに沿った支援の必要性を再確認した。また発災直後から取り組んだ性被害防止の啓発については、残念ながらその取り組みを知っていたという人がごくわずかであったということも、その後のアンケート調査の結果で明らかになった。防災は日常の備えを徹底することが重要であり、平時にできないことは非常時にはできない。男女共同参画センターの果たすべき役割の大きさを痛感した。

4 被災経験を無駄にせず、前に進んでいくために

発災からもうすぐ3年。私は、はあもにいの館長を退いた今も、時間の都合がつく限り県内外で「男女共同参画の視点でみる熊本地震」というテーマで、熊本地震についての話をする機会を頂いている。県外に行くと、自分たちの知らないところで多くの方々が支援に出向いてくださったことや、支援金を集めてくださっていることを見聞きする。そのたびに頭を下げ、心の底から一歩前に進まなければ…と、強く思う。『一人でできることは限られているが、皆で力を合わせることでできないことは（自然災害を止めること以外）ない！』と、私たちは気づいたはずである。被災経験をマイナスにとどめず、よりよい熊本を創っていくためにも、県民の防災意識を高めていくための活動のすそ野を広げていくことに、これからも微力ながら取り組んでいければと考えている。つらく悲しい被災経験も、多くのことを学び得る機会をくれた。当たり前の日常に感謝する気持ちを忘れず、その学びを無駄にしない生き方をしていきたい。

外国人支援

所 属	一般財団法人熊本市国際交流振興事業団	職位	事務局次長	氏名	勝谷 知美
-----	--------------------	----	-------	----	-------

1 前震から本震

2016 年の4月14日。この日、私は遅番で午後10時までの勤務だった。熊本市国際交流会館では、そろそろ閉館の準備に取り掛かろうとしていた矢先、激しい揺れを感じ、デスクの書類は滑り落ち、しばらく動けなかった。揺れが収まったと同時に、残っているスタッフ、防災センターのスタッフがそれぞれ施設利用者の確認、館内の被害状況確認に向かった。会議室利用者の方々に怪我などなく、全員の無事と安全が確認できた。また、館内の設備に大きな損傷はなく、明日朝一番で再度確認をするということで一旦全員帰宅させた。その後、午前1時過ぎに外国人避難対応施設を開設することとなり、15日は通常運営を中止した。しかし、避難者が全員帰宅したことを受け、閉館時間である午後10時に閉所した。そして、本震…午前4時過ぎ、再度、外国人避難対応施設として開設することとなった。この日から閉所となる4月30日まで24時間の避難所運営、災害多言語支援センター開設・運営、被災者のための相談会等々外国人支援が始まった…

※熊本市地域防災計画上、熊本市国際交流会館は大規模災害発生時における外国人避難対応施設と規定されているが、指定管理者である私たちと行政の間で特に取り決めはなかった。熊本市の決定に基づき避難所を開設・運営を行い、開設中は外国人に限らず誰でも受入、支援を行った。

2 避難所運営

本震後、会館には在住外国人以上に韓国、中国、タイ、アメリカ等海外からの旅行者をはじめたくさんの外国人が訪れた。避難者数は一時的に100人を超えた。彼らは何が起こったのかわからず、いち早くこの場を離れたい、安全な場所に移動したいと伝えてきた。情報が錯綜している中、交通情報や手段を伝えたとそれぞれ熊本を離れて行った。在住外国人は、家の壁や天井が崩れたり、タンスや食器棚が倒れ、不安と恐怖の中、避難所生活を余儀なくされた。避難してきた方の中には、小さな子供を連れたタンザニアの一家、奥さまが妊娠中のスリランカ人夫婦、これから阿蘇に実習生としていくことになっていた中国人研修生など40人ほどがいた。指定避難所ではなかったので配給が届かない可能性があり、すぐさま、炊き出しの協力をインターネットで呼びかけ、熊本にある外国人支援団体コムスタカ〜外国人と共に生きる会〜が閉所までのほぼ毎日温かい食事を提供してくれた。さらに館内の案内表示や情報を可能な限り多言語化し提供した。多言語表示は、自治体国際化協会のホームページ (<http://dis.clair.or.jp/>) から災害時多言語表示シートを活用した。これまでの災害時の外国人支援から必要な用語や指示、情報をテンプレート化しており、12言語で翻訳されている。これまでの経験が生かされていると実感活用してみて実感した。

他、足りないもの、必要なもの、特にイスラムの戒律にあった（ハラール）物資の提供協力をお願いした。すると全国からたくさんの反応があり、様々なものが届いた。ハラールのお弁当、ハラールの乳児用粉ミルク、アルコールの入っていない除菌ティッシュなど…本当にうれしかった。しかも驚いたことに、一方的に送りつけてくるということとはほとんどなく、何が必要か、こんなものがあったら良いのではと事前に、こちらに確認を取り送ってくれた。後は、私たちにできることは、彼らの声の一つ一つ耳を傾け、できることをやる。それしかなかった.. スタッフのストレスもかなりあっただろうと思う。実際は、避難所運営と並行して、会議室を利用している利用者からの問い合わせも徐々に多くなり、いつから利用できるか、地震で利用できなくなった料金は全額還付してもらえるのか、日程を変更したい..等々明確な回答を迫られたが、避難所をいつ閉所できるのか目処が立たないうちは返答に困った。

防災直後の避難者は不安が大きく、特に外国人被災者はテレビやラジオなどから流れてくる情報が日本語のみで状況がわからず、更に不安に陥った。スタッフは丁寧に状況をわかる言語で知らせた。最初は積極的に声をかけ、落ち着いてからは、相手のペースで話しかけられることに対応するようにした。

そんな中、本震の日に出産し、5日後、自宅に戻れず避難してきたバングラデシュの家族がいた。産まれたばかりの赤ちゃんを抱え、不安と恐怖のなか、また日本語がわからない状況でやってきた。すぐさま、ドアで仕切られた会議室を準備した。数日後、お母さんより赤ちゃんに沐浴をさせたいと相談を受けた。確かに、赤ちゃんは非常にデリケートで体温調節も難しく、常に清潔な環境が必要。考えた…まず、館内の調理室にあるシンクを運び、電気湯沸かし器で何回も何回も湯を沸かし、即席のベビーバスを作った。十数年ぶりに沐浴をさせた。両親が見守る中、耳を押さえ、ゆっくり湯にいれ、その小さな体を優しく洗った。とても気持ちよさそうに目を閉じていた。何とも言えない感情が湧きあがった。ただ、元気に育ってくれることを願った。

3 災害多言語支援センターの運営～情報の多言語～

災害時、外国人被災者は情報弱者になると言われている。それは、災害時使用される言葉は、日常では使わない言葉が多いからだ。配給、物資、給水、り災証明など。また、災害情報もテレビでは日本語でしか流れない…早く、多言語の情報を提供したかった。しかし、避難所運営やマスコミの対応、各国大使館からの自国民の安否確認など、目の前のことに対応するので精一杯だった。本格的に多言語での情報提供できる体制ができたのは、本震から約4日後の20日だった。九州地区地域国際化協会連絡協議会のメンバー、多文化共生マネージャー全国協議会のメンバーが応援に駆けつけてくれた。交通網は遮断されている中、レンタカーを借り、各地域でメンバーをピックアップ

プし、何時間もかかりながら来てくれた。日頃からの“つながり”に感謝。この日から、避難所巡回、情報の収集、翻訳、発信作業が一気に進んだ。英語、韓国語、中国語、やさしい日本語で発信した情報も、色々な団体によって更に多言語され拡散された。全国から寄せられた協力依頼も、リスト化し、その都度、状況を見て協力をお願いした。

4 終わりに

今回の震災を経験して、日頃からの“つながり”がいかに重要かということを強く感じた。はじめての避難所運営、多言語支援センター運営、課題はたくさんあったが、“つながり”によって助けられた。この経験から学んだことを次に生かすための“行動”を起こすことが重要だと感じている。

- PHOTO -



あ と が き



今回、「熊本地震を女性職員の目線で残す」目的で、手記を作成する機会をいただきました。もちろん、災害復旧には「チーム熊本市」として、男性職員も含め職員一丸となって取り組みました。しかしながら、女性職員には安全衛生や家族ケアなどの女性特有の事情があったのは事実です。このようなことは、今まで語られてきませんでした。それを一人ひとりに声を掛け、52人の女性に協力していただき、「証言集」として取りまとめることができました。

その一人ひとりにストーリーがあります。

それぞれの手記を読み、胸が熱くなってきました。

ここには、葛藤や苦悩を心に秘めながら強靱な精神力でリーダーシップを取り、業務に邁進した女性職員の姿があります。この手記を通して、弱さを微塵も見せず、迅速でしなやかな決断をしていた女性リーダーたちにも家族があり、仕事と子育てや介護の間で思い悩んでいたことを知ることができました。

ただ、忘れていけないのは、熊本地震から3年近く経った今でも、その傷は癒えていない、ということです。

「このような機会をもらってありがたい」という職員が多くいる中で、「思い出すと涙が溢れ、文章が書けない」「まだ思い出したくない」という女性職員も少なからずいました。

執筆に協力してくれた多くの女性職員が、今回の機会ですべての記憶を思い起こし情報を整理する作業を通して、その思いを昇華し、次への一歩を踏み出す勇気を持てたと思います。

この手記がお読みいただいた皆さんの心の復興の第一歩となり、また、予期せぬ災害に備える一助になれば幸いです。

最後に、この手記に関わっていただいた全ての皆さんに感謝申し上げます。

熊本市男女共同参画課

平成 28 年熊本地震 熊本市女性職員 50 の証言

発行；2019（平成31）年3月

【編集・発行】熊本市市民局市民生活部男女共同参画課

〒860-8601 熊本市中央区手取本町1番1号

☎（096）328-2262 Fax（096）351-2030

E-mail: danjokyoudou@city.kumamoto.lg.jp
